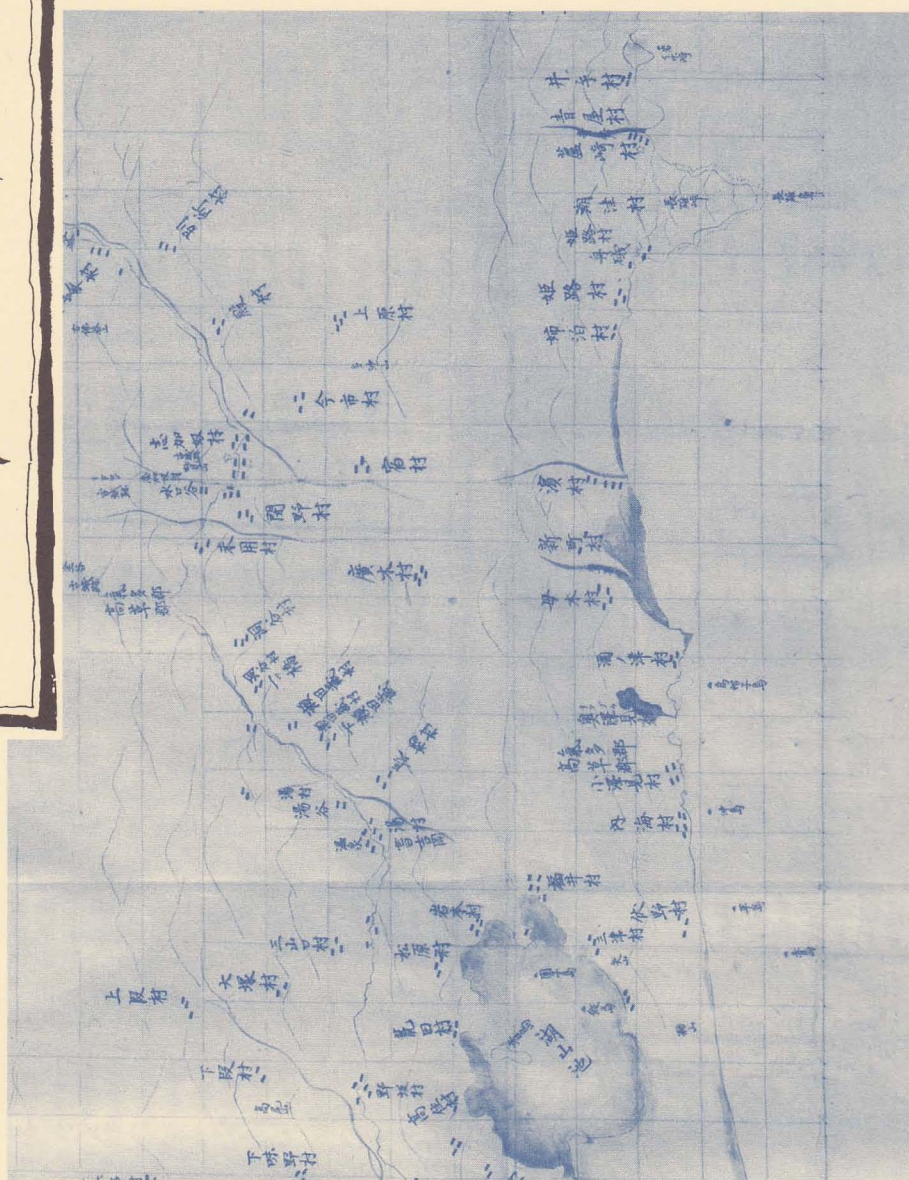


研究

史料と伊能図



二〇〇八年 第五三號

伊能忠敬研究会

前号で紹介された「石井記録」は、多くの会員にとって興味深いものであったと思う。これに因んで「青谷」を含む大図を取り上げた。青谷は鳥取市西方の日本海岸にあり、現在は鳥取市に含まれている。藩の陣屋も置かれ、因州和紙の産地として知られる。ここでは地図上で青谷を眺めてみよう。

伊能隊はこの地域を文化三年八月(第五次)と文化十年閏十一月(第八次)に通った。それぞれ近辺には台風とおぼしき嵐や積雪の記事が見られる。文化三年には米子から海岸沿いを東に進み、蘆崎村泊は八月十五日である。青屋、蘆崎、潮津の三村は、元は一村(それぞれ西・下・上青谷)で、惣名を青谷(青屋)としたことが、第八次の測量日記に見える。石井記録を残した石井世左衛門が天測を見学し、坂部貞兵衛を訪ねて懇篤な示教を得たのはこの蘆崎の宿舎である。測量日記はこの夜の測量にふれていないが、地図上には星印がある。測線はここで長尾鼻の岬回りと横切りの街道に分岐している。

文化十年の第八次測量は内陸コースで、地図の範囲外にあたる倉吉から美(三)徳山三佛寺、湯村温泉(三朝)、鷲峯、鹿野(志加奴)を経て倉吉往来(美德通)を鳥取に向かう。この道は峠越えのため、忠敬、病気の保木敬蔵などと荷物が海岸回りととなり、青谷の世左衛門宅宿泊となった。再会を期した坂部の死去を知っての世左衛門の落胆、また翌日鹿野まで天測見学に出かけ、思いがけず実現した忠敬本人との面談の詳細は「記録」の通りである。鳥取、鹿野から青谷へのルートは、因幡と伯耆を結ぶ主要道であった。しかし、青谷―鹿野間は測量されておらず、したがって地図にも描かれていない。

鈴木純子 (題字は伊能忠敬の筆跡)

巻頭

話題Ⅰ

史跡探訪3「伊能測量隊・金沢の宿」

二〇〇八年度総会報告

初出展される伊能家の陣笠

「船手」史料発見

「石井記録」の新聞報道

「伊能大図フロア展」と「和算展」

話題Ⅱ

講演「再現！海上引縄測量」

伊能大図総覧の地名と景観(七)

「綾部のバカ息子」麻田剛立生家を訪ねて

芳名録

上杉慎吉 福士政一 緒方知三郎

研究ノート

伊能隊・東大寺の諸堂や宝物拝覧

『伊能忠敬測量日記』に見る地震

伊能忠敬研究(三) 測量実験と地図

伊能忠敬と米沢街道(二)

忠敬墓碑銘・十七歳の書者―關研

多摩における伊能測量(二)

九州支部だより

九州支部春季例会報告

忠敬談話室

例会案内

お便りから 日々の話題 お知らせ

表紙図解説 鈴木純子

河崎 倫代 一

編集部 二

編集部 五

編集部 六

渡辺 一郎 一一

星埜 由尚 一六

河島 悦子 二六

伊能 陽子 二八

佐久間達夫 三〇

辻本 元博 三四

石谷 春香 三八

松宮 輝明 四六

植田 浩一 五二

佐久間達夫 五九

石川 清一 六八

編集部 七〇

編集部 七一

史跡探訪3 伊能忠敬測量隊・金沢の宿「すみよしや」

◇所在地 石川県金沢市十間町 ◇概要 寛永十五年創業と伝えられる金沢で最も古い旅館。通行手形を発行できる手判宿でもあった。明治初期に創業地の尾張町（現・森忠商店の位置）から現在地に移転した。



丸に「開」の字は手判宿の標。忠敬一行の宿泊時に軒先に掛けられていた創業以来の看板の前に立つ、当主の住泰守さんと女将の芳子さん夫妻。左が河崎倫代会員

忠敬さんも見た「すみよしや」の看板

案内人

金沢市在住 河崎 倫代

一九八〇年十月、「江戸時代の旅」展で伊能図に出会った。能登半島沿岸の村々が克明に記されていた。「一日漏らさず忠敬自ら書き記した記録」があることを知ったのは一九九一年三月。伊能図と出会って十年が経過していた。その時から始まった加賀藩測量関係史料の調査。まもなく家人から「伊能忠敬のことを書いている人がいるよ」と手渡された「日本経済新聞」の切り抜き記事。早速、新聞社を通じて著者に連絡を取った。それが渡辺一郎さんと研究会との出会いだった。さて、『伊能忠敬測量日記』享和三年七月二日（一八〇三年八月十八日）の項には次のように記されている。

「朝より晴天、六ツ半頃宮越町出立、「測量ニ量程車を用」四ツ後ニ金沢城下尾張町へ着、止宿住吉屋太兵衛、此日、午前晴午後曇晴、夜ハ曇ル、曇間測量、子後「大」風雨」

たったこれだけである。他藩では何の誰某が挨拶に来たと記されている。量程車を使用したのも不思議だ。会報四九号の表紙図解説でも書いたが、まだまだ書き尽くせない、ミステリアスな金沢測量！

測量隊八名が宿泊したのは八月十八日。私が訪問した日は終戦記念日の八月十五日。旧盆と夏休みで多忙な時期だったが、親切にもてなしていただいた。「伊能忠敬が泊った宿ですよね、と聞いてくるお客さまもいらっしやいます」とのこと。近年は老舗旅館を希望する外国人観光客が増加しているとか。「伊能忠敬の宿」として、世界に発信して下さい」とお願いし、「すみよしや」を後にした。

（かわさき みちよ・伊能忠敬と灯台と民具の能登さいはて資料館）

NPO法人認可申請へ、皆さまのご意見を

編集部

去る七月二〇日、二〇〇八年度の伊能忠敬研究会総会が深川の富岡八幡宮で開催されました。全国から多くの会員が参集し、一年ぶりに再会した「忠敬ともだち」との語り合いを楽しみ、また研究会の新たな将来像にむけて積極的な討議をおこないました。当日はじつとりと汗が滲み出るような蒸し暑い日でしたが、忠敬先生の銅像はいささかも動じることなく、この日も着実な一歩を踏み出そうとしていました。

第一部 講演『再現！海上引

縄測量』—唐丹でおこなった海上引き縄測量実演について

講師・渡辺一郎名誉代表が「海上引縄」測量をテレビロケの実演を通して解説しました。講演は、撮影現場の具体的な話を中心に、スライドを使って臨場感ある一時間ほどの講演でした。(なお講演内容は今号十一頁以下で誌上再録しましたので、ご覧ください。)



第二部 総会

十四時三十五分から第二部

の総会議事に入りました。はじめに定足数の確認をおこないました。会員総数二二名、出席者四三名、委任状七九名で総会が成立したことを確認しました。

議事に先立って星埜由尚代表理事から挨拶があり、そのあと先般逝去された本会顧問・大友正道氏と同・小島一仁氏に全員で黙祷を捧げました。議長に渡辺一郎氏を選出し、議事を開始しました。

第一号議案 二〇〇七年度事業報告

鈴木事務局長より昨年度総会以降の二〇〇七年度事業について報告がありました。おもな事業は昨年一〇月の佐渡・新潟への研修旅行、ついで同月の伊能忠敬記念館「西日本測量と絵地図展」見学と記念講演聴講及び懇親会の実施、本年四月に佐原支部懇談会、五月に九州支部例会と、計三回の例会を実施したことが報告されました。また、会報『伊能忠敬研究』は第四九号から五二号を発行しました。

第二号議案 二〇〇七年度会計報告および監査報告

同じく事務局長より二〇〇七年度の会計報告として昨年四月一日から本年三月三十一日までの収支について報告がありました。収支報告書中、収支が合わないように見える点があるが、これは会報の発行が遅れたことにより本来三月中に収納すべき会費収入が四月以降にずれこんだためで本質的な誤差ではない旨、説明がありました。続いて清水靖夫監事より監査報告があり、出納ならびに帳票類などすべて適正である旨、報告されました。二〇〇七年度事業報告および会計報告は拍手をもって承認されました。

第三号議案 二〇〇八年度事業報告案

同じく事務局長より二〇〇八年度事業計画案について提案がありました。事業案として、本日の総会および一〇月の研修旅行(テーマ「忽那諸島から御手洗、呉に『伊能測量の原風景』を訪ねる」)

が提案されました。また、「例会」を今後、隔月で継続的に開催する(第一回目は九月一四日を予定)こと、また第二次ウオークの事業として「ウオーク日本」「伊能大河ウオーク」「完全復元・伊能大図展」等の行事を主催もしくは共催事業として実施することが提案されました。また会報『伊能忠敬研究』第五三号から引き続き発行していくこと、以上の事業が提案され、拍手により了承されました。

第四号議案 二〇〇八年度予算案

同じく事務局長より二〇〇八年度予算が例年並みの規模で提案され、拍手により了承されました。

第五号議案 役員追加選任について

今後予定される「第二次ウオーク」や「例会」実施等の諸事業に対応するため、役員の追加選任が提案され、伊能敏雄さんと新沢義博さんが理事に加わることが承認されました。また、渡辺名誉代表が理事を兼任する件についても併せて提案され、了承されました。NPO法人認可申請について(ご意見を事務局へ*宛先:会報最終頁参照)

昨年度の総会において話題となった特定非営利活動法人化について、今総会において正式に提案がなされました。星埜代表より、今後、会が円滑な活動を行うためには、法人格を取得して責任の明確化をはかり社会的責任を果たす必要があるという観点から、定款・役員構成のひな型を示して提案説明があり、認証申請の可否について討議にはいりました。会員から「NPO団体は事務手続きが煩雑なので専従職員が必要になるのでは」「収入源は」「この総会で決定するのか」という質問が出され、それに対して「ボランティアで運営している団体にならいたい」、「この総会で大筋の了承が得られれば、理事会として認可申請をすすめたい」「理事会における検討の参考にするため、NPO法人化等について、会員の意見を広く聴く」

「今後、監督官庁と調整したうえで、最終的な定款案をお配りしたい」と回答があり、NPO法人認可申請の件は了承されました。

二〇〇八年度役員

名誉代表	渡辺 一郎	理事兼任
代表理事	星埜 由尚	
理事	伊能 敏雄	総務担当(新任)
理事	伊能 洋	総務担当
理事	柏木 隆雄	行事担当
理事	香取 禎良	香取支部長・旅行担当
理事	斎藤 仁	総務担当
理事	新沢 義博	行事担当(新任)
理事	鈴木 純子	事務局長・調査研究担当
理事	前田 幸子	編集長・HP担当
監事	清水 靖夫	
幹事	石川 清一	九州支部長
幹事	原田 照男	関西支部長
幹事	小林 一三	新潟支部長
幹事	坂本 巍	HP「資料室」担当
顧問	伊能 陽子	編集委員
顧問	安藤由紀子	編集委員
顧問	佐久間達夫	編集委員





第三部 懇親会

記念撮影のあと、懇親会に入りました。恒例となった「遠来の会員からのご挨拶」では、ご主人同伴で出席された方の微笑ましいお話や、富岡八幡宮に残る几号（水準点の標識）保存についてのご提案もありました。終始なごやかな雰囲気の中、それぞれの日頃の研究や活動について語り合い、交流を楽しみました。



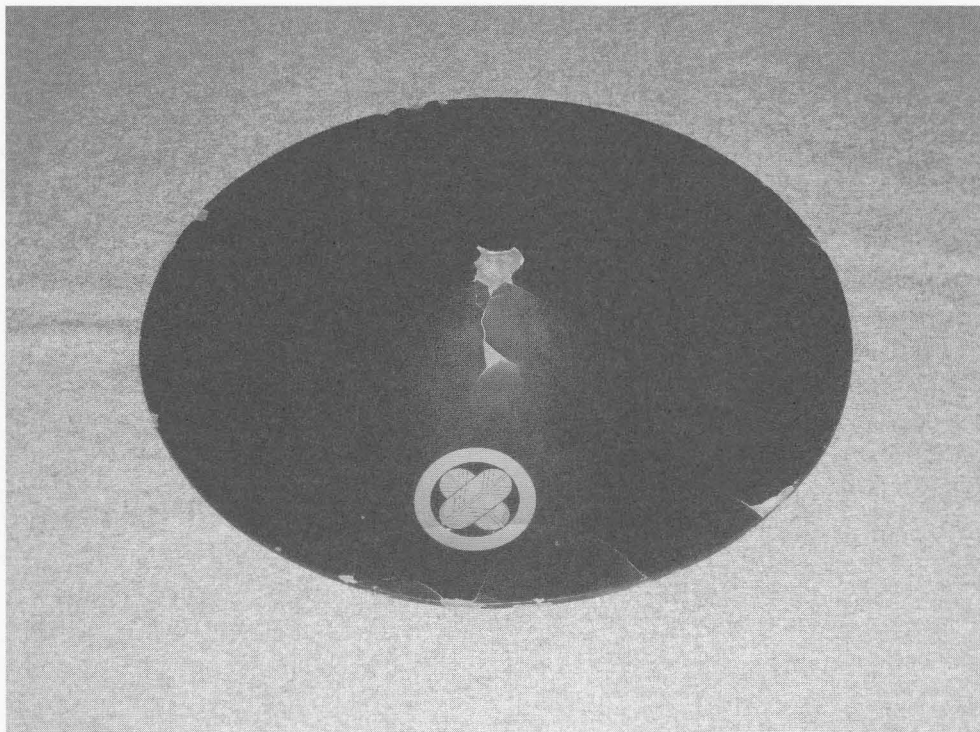
総会出席者

秋間 実	朝岡 洋子	石川 清一	敬称略
伊能 洋	伊能 陽子	猪原 紘太	伊藤 浩史*
植田 浩一	鶴飼 隆雄	江口 俊子	今村 恵二
荻原 哲夫	柏木 隆雄	加藤 忠三	大沼 晃
川上 清	河島 悦子	喜多 昭一	香取 禧良
齊藤 サダ	斎藤 仁	坂本 義親	窪谷 悌二郎
新沢 義博	鈴木 純子	首藤 郁夫	清水 靖夫
永野 達代	成家 淑子	丹羽 菊乃	中川 幸子
原田 照男	平岡 佳子	藤岡 健夫	馬場 良平
星埜 由尚	前田 幸子	松宮 輝明	藤田 淑子
矢能 彰	山本 公之	渡辺 一郎	宮内 敏

43名

※ゲスト参加 齊藤重則さん
*伊藤浩史さん（日本ウォーキング協会）は木谷道宣さんの代理

特別展に初出展される伊能家の陣笠



『御手洗測量之図』
(部分)入船山記念館蔵

黒漆塗陣笠 (径 42 cm 高 5 cm) 年代、墨書なし

両面とも黒漆塗で、外側に伊能家の家紋が施されている。天頂部や縁の漆がはげ落ち、ひび割れも多く見られる。内側の頭に当たる部分の綿入れ布や紐などは残念ながらほとんど残っていない。

広島県呉市入船山記念館蔵『御手洗測量之図』の付箋には「黒陣笠御召被遊候、是か伊能勘解由様也」と書かれており、肖像画以外では伊能忠敬を特定できる唯一の資料であるが、本品がその時の陣笠かどうかは不明である。しかし伊能家歴代の人物で黒漆の陣笠をかぶることができた者は忠敬のみと想像され、彼の陣笠ではないかとの期待を含みつつ、今後の調査の進展が待たれる。いずれにしても、伊能家やかかわりのある人々によって大切に伝えられてきた貴重な資料であり、展示されるのは今回の特別展が初めてである。(資料・画像 伊能忠敬記念館提供)

伊能忠敬記念館 特別展 (平成 20 年 9 月 9 日～11 月 9 日)

伊能図と人物としての忠敬の評価、また資料を守り伝えた伊能家について紹介する。【詳細 72 頁】

収蔵品展 (平成 20 年 11 月 11 日～平成 21 年 1 月 18 日) 伊能図：伊豆七島 垂揺球儀

伊能測量の詳細記録発見！『測量方御用諸事覚帳』

唐津藩で異国船警備や物流従事



伊能忠敬の測量船など詳細に

名護屋城博物館 1000点以上確認

伊能忠敬の測量記録（手前）が確認された「船手」の史料は19日午後、県立名護屋城博物館で公開された。

船手 知る資料

唐津藩船の記録は伊能忠敬（一七四七～一八二〇）の「測量方御用諸事覚帳」に記されている。伊能忠敬は、異国船警備や物流に従事し、船の測量や航海の記録を残した。この史料は、伊能忠敬が唐津藩で船長の職務に就いた際に、船の測量や航海の記録を残した。この史料は、伊能忠敬が唐津藩で船長の職務に就いた際に、船の測量や航海の記録を残した。

近世の海運に詳しい伊能忠敬の「測量方御用諸事覚帳」に記されている。伊能忠敬は、異国船警備や物流に従事し、船の測量や航海の記録を残した。この史料は、伊能忠敬が唐津藩で船長の職務に就いた際に、船の測量や航海の記録を残した。

当時の海運業 検証でき貴重

唐津藩の海運業は、伊能忠敬の「測量方御用諸事覚帳」に記されている。伊能忠敬は、異国船警備や物流に従事し、船の測量や航海の記録を残した。この史料は、伊能忠敬が唐津藩で船長の職務に就いた際に、船の測量や航海の記録を残した。

唐津藩「船手」史料を名護屋城博物館が確認

「九州大学デジタル・アーカイブ（左頁）」で公開中

「船手」は藩の船舶関係の役人の総称。今回発見された「測量方御用諸事覚帳」には、伊能忠敬が唐津の海岸線を測量した際に乗った船や乗員の名前などが詳細に記されている。2008年8月19日 佐賀新聞

西日本新聞

2008年(平成20年)8月20日 水曜日

16版

社会・行政

28

唐津藩の海運担当部署

「船手」史料150点確認



伊能忠敬の測量記録（手前）が確認された「船手」の史料は19日午後、県立名護屋城博物館で公開された。

伊能忠敬の測量記録も

史料の目録は同大総資料館の「データベース」にアップされている。伊能忠敬の測量記録（手前）が確認された「船手」の史料は19日午後、県立名護屋城博物館で公開された。

唐津市は、唐津藩で海運を担当していた。伊能忠敬は、異国船警備や物流に従事し、船の測量や航海の記録を残した。この史料は、伊能忠敬が唐津藩で船長の職務に就いた際に、船の測量や航海の記録を残した。

唐津市の名護屋城博物館

佐賀県立名護屋城博物館（同県唐津市鎮西町）への寄贈文書から、江戸時代に唐津藩の海運業を担った行政部署「船手」にまつわる史料約百五十点が見つかった。国内初の実用日本地図を作製した地志孝伊能忠敬（一七四七～一八二〇）が、唐津藩で測量を実施した記録も含まれている。調査に当たった九州大学総合研究博物館の宮崎と副准教授（日本史）は、「唐津藩の海運業は江戸の海運を担った船手の史料が、これだけ大量に確認されたのは珍しい」としている。

KYUSHU NEWS 九州

九州・山口の主な取材網

- ▽北九州支社 ☎093(561)1131 FAX 093(561)7793
- ▽京豊総局 ☎0948(22)3500 FAX 0948(22)3503
- ▽久留米総局 ☎0942(32)5361 FAX 0942(32)5363
- ▽佐賀総局 ☎0952(26)7181 FAX 0952(26)7187
- ▽長崎総局 ☎095(822)0125 FAX 095(822)0126
- ▽熊本総局 ☎096(362)5111 FAX 096(362)5113
- ▽大分総局 ☎097(536)0111 FAX 097(536)0112
- ▽宮崎総局 ☎0985(25)1331 FAX 0985(25)1339
- ▽鹿児島総局 ☎099(222)9255 FAX 099(222)9257
- ▽山口支局 ☎083(922)1106 FAX 083(922)1402

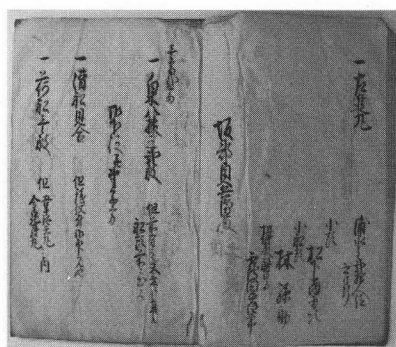
「測量方御用諸事覚帳」（1812年）には唐津を訪れた伊能が海岸線の測量に使った船の名前「右進丸」や船員名などが克明に記録されている。西日本新聞 九州版 2008年8月20日

『測量方御用諸事覚帳』九州大学デジタルアーカイブ詳細情報

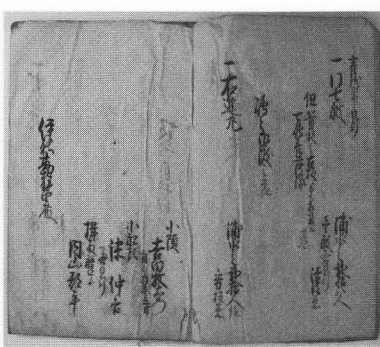
詳細情報

所蔵機関	佐賀県立名護屋城博物館
文書名	岩下家史料
史料番号	13
枝番号	
表題	測量方御用諸事覚帳
年代	文化九年壬申八月
作成	
宛名	
形態	竖帖1冊
縦	25.6
横	17.5
丁数	31
内容	測量方の伊能忠敬一行が唐津領内に入り測量するにあたって、その対応を記している。
旧番号	228
分類	

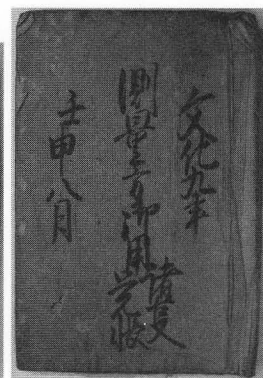
「岩下家文書」は、唐津藩に仕えた松下家に関する文書群である。松下家は、「船手」（＝藩の所有する船を管理し、物資の海上輸送・沿岸警備にあたった）で「大船頭」などの役職を代々勤めた。（中略）のち本文書は岩下家に譲られ、平成6年に佐賀県立名護屋城博物館に寄贈された。総点数は1097点で、船手に関する簿冊類が100点余り含まれている。（中略）また船の難破、幕府巡検使、測量方として訪れた伊能忠敬一行などへの対応の記録も残る。（以下略）（同アーカイブ詳細解説より）



坂部貞兵衛殿 左進丸



伊能勘解由殿 右進丸



『文化九年測量方御用諸事覚帳』表紙

【九州大学デジタルアーカイブ】で検索してください。原文が参照できます。
<http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/search/details.html?seq=26>

『石井記録』新聞発表―新しい忠敬像が全国に―

二〇〇八年六月一九日の木曜日、本会の事務所がある目黒区の日本地図センターで「新史料『石井記録』発見」の記者発表が行われた。

『石井記録』は会報第五二号でお知らせしたように、鳥取市青谷町在住の石井洋氏が所有する古文書で、三代・約百年にわたって書き記された石井家の記録。その一部に石井家の先祖「石井世左衛門」と、同家に宿泊した伊能忠敬とのやりとりが詳細に記録されていた。忠敬をはじめ測量隊と地元との交流が具体的に記載されており、従来言われてきた「きまじめ」「愚直なほどの忍耐強さ」というイメージとは一味違った忠敬先生の実像を垣間見ることができる。今回の『石井記録』の「発見」は、本会顧問で伊能忠敬研究家の佐久間達夫氏が、長年の



新史料を前にした記者発表の様子

知人である福嶋泰夫・千恵子夫妻と石井家の親戚にあたる小椋凱夫氏との連携プレイにより文書の写しを入手したことが発端となった。

この文書の存在は地元では以前から知られていたが、記録の内容が貴重であることは知られていなかったため、今まで世に出ることがなかったらしい。これがきっかけで各地に埋もれている新史料の発見に繋がることが期待される。

『石井記録』掲載後日誌

「石井記録解題」筆者・佐久間達夫

研究会誌第五二号に掲載した『石井記録』の原本所蔵者石井洋様から丁寧な礼状がまいり、そのなかに、「石井記録中、仮亭主露谷半兵衛を通じて、ご一行に甥世左衛門のことをお願いしている件がありますが、（中略）世左衛門は露谷半兵衛の甥にあたりまして、夷屋世左衛門は、即、世左衛門のことです」

と、記してありました。したがって、筆者記述の「石井記録解題」は、左のように訂正いたします。

（会報五二号二六頁上段後ろから七行目）

訂正後 石井世左衛門は、仮亭主露谷半兵衛に取り次ぎを依頼して、坂部貞兵衛から天文測量について聞きたい旨を願った。坂部は、快く引き受け夜半を越える迄示教して下さった。

（左頁）『石井記録』を報道した各社の新聞記事。MSN産経ニュースをはじめ各社のインターネット新聞にも掲載され話題となった。）

「測量の日」関連イベント

各地で「伊能大図」フロア展開催

六月三日の「測量の日」（国土交通省・主唱）にちなんで、全国各地で伊能大図展が開催されました。東京・新宿では「くらしと測量・地図展」として、新宿駅西口イベントコーナーで伊能大図のフロア展、伊能忠敬関係資料のパネル展、新旧測量機器の展示が行われました。

取材当日は平日の昼間にもかかわらず大勢のサラリーマン、学生、主婦と思しき人々が訪れ、伊能大図や江戸府内図、富士山が描かれた床面などを熱心に鑑賞していました。壁面には伊能忠敬の生涯と測量のあらましをイラスト入りで書いたパネルが展示され、こちらも横ばいに歩きながら、時間をかけて読んでいる人々の姿が見られました。とかく数値的・機械的な印象を与えがちな「地図と測量」の分野ですが、この伊能図と忠敬のコーナーには手作りの地図のオーラと、地図作りにかけた人生のロマンが横溢して、人々をひきつけていました。



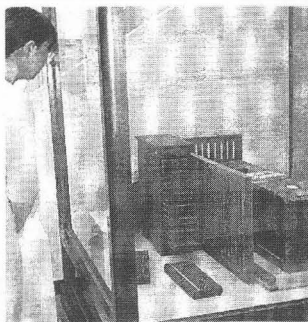
しばし仕事を忘れて大図に見入る



喧騒の新宿駅でこの一角は無言

佐原で和算文化の企画展—忠敬の測量道具も

開館三〇周年を迎えた香取市佐原の県立中央博物館大利根分館で、五月三一日から六月二九日まで企画展「利根川流域の和算文化」が開催されました。和算を応用した伊能忠敬の天体観測や測量道具など、実際に活用された和算文化が紹介され、伊能図のほか成田山に奉納された算額、和算に関する本や小説など一二〇点が展示されました。河川水運で栄えていた利根川流域では取引等で日常的に算術が用いられていましたが、さらに高度な分野に関心を持つ人も多くおり、忠敬もその一人でした。



和算文化に焦点
香取で企画展

今年は和算家・関孝和の没後 300 年にあたることもあり、在野の和算家を中心に、地域文化としての和算に焦点をあてた展示が行われた。

2008年5月31日 朝日新聞 千葉版

開館30周年を迎えた香取市佐原の県立中央博物館大利根分館で、企画展「利根川下流域の和算文化」が開かれ、今年には和算家、関孝和の没後300年にあたることもあって、在野の和算家を中心に、地域文化としての和算に焦点をあてた。

多くの知識人が訪れたが、山口和や剣持章行などの和算家もまた、地方の格別の商家などに滞在しながら、和算を教え、門人を育てた。伊能忠敬の地図など測量に活用された道具、成田山に奉納された算額、和算に関する本など一二〇点の資料が展示されている。

分館から展示品の解説もある。問い合わせは同分館（☎0478・56・0101）へ。

江戸時代、河川・水・交通の発達した利根川下流域には

29日まで無休。7日と21日の土曜日には、11時と13時30

二〇〇八年度総会講演

「再現！海上引縄測量」―唐丹で実演ロケ

渡辺 一郎

◇伊能測量隊が三陸海岸で行った海上引縄測量の様子を地元テレビが実演ロケ・撮影しました。本稿はそのロケを監修した渡辺一郎氏の講演内容をレジメ及び資料をもとに再構成したものです。(編集部) ◇

はじめに

岩手県の三陸海岸はリアス式的地形で陸上からは測量ができず、伊能測量では海上に縄を引いて苦労して測量した場所。釜石市唐丹町大石浜にはこれを記念した「海上引縄碑」が立っている。同町は「測量之碑」「星座石」と共に、伊能測量には御縁が深い土地である。

今回の「海上引縄測量」実演ロケは、岩手「めんこいTV」がフジ系列のコンテストで入賞し、予算を獲得して計画されたもの。

担当ディレクターは現地に二回足を運んで打ち合わせ、渡辺との打ち合わせも二回行った。用意すべき資料、実施要領は図解して指示し、ディレクターが取りまとめた。

実際のロケでは、平成二〇年六月六日に、打合わせ、資料の準備、作業説明ならびに地上演習を二回行い、翌六月七日に実演と撮影を行った。ロケ現場は大石浜―仏ヶ崎の海上。地図上の距離は二・一kmだった。

資料と要員

伊能忠敬が三陸測量時に、どれほどの船団の協力を得たかは記録が

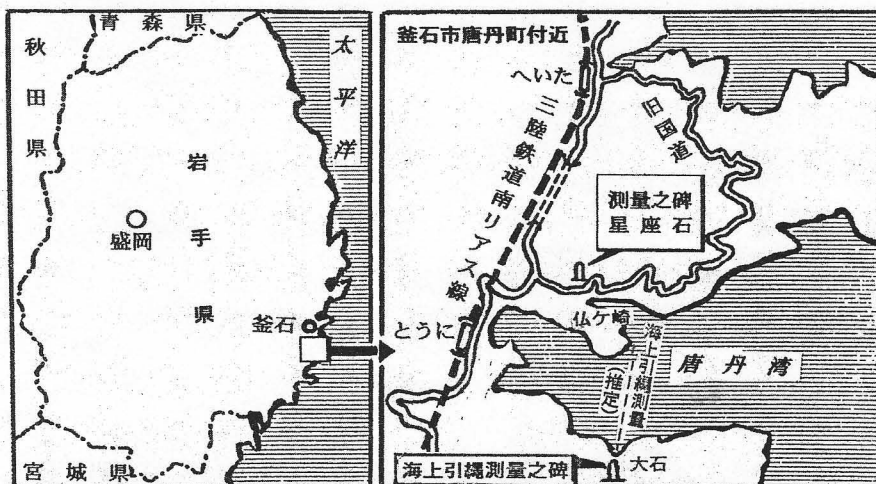
ないが、長崎在住の入江正利会員が解読した『対馬藩宗家文書』のなかに測量船隊の名称が出てくるので、それを参考にして必要な船と器材を用意した。

○船

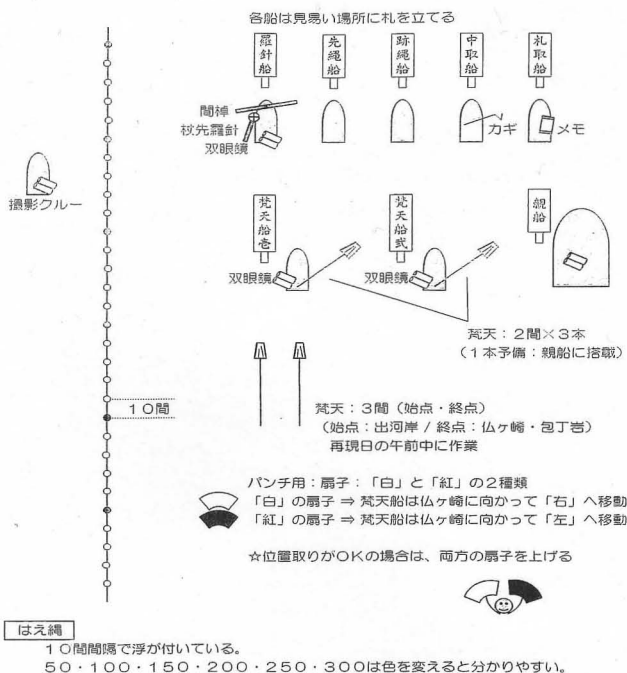
梵天船	二
先縄船	一
跡縄船	一
羅針船	一
札取船	一
中取船	一
親船	一
計	八隻

これらの船には対馬藩が行ったように、役割名の立て札を立てた。ちなみに、宗家の記録ではこの船隊を二組用意している。

それぞれの船の役割を記すと、梵天船は梵天を高く掲げて位置の目印となる船、先縄船は間縄を引く船、跡縄船は先縄船が引く間縄の末端を保持して距離測定の出点となる船、



海上引縄測量 使用機材・小道具



羅針船は杖先羅針を装備して方角を測る船、札取船は測定結果を記録した札を回収する船、中取船は長柄付の手カギで間縄が直線になるように補助する船、親船は船隊全体の指揮をとる船である。

これらの船のうち、梵天船と羅針船、親船は双眼鏡を装備しており、お互いの位置を確認しながら作業を進めていくことにした。

○梵天 三間以上のものを四本用意。梵天船用二本、仏ヶ崎一本、大石浜の測量記念碑の傍らに一本を立てた。梵天竹は近くの山から切り出して自作した。

○間縄：現在実際に漁で使用しているまぐる縄に一〇間(一八m)ごとに浮(うき)をつけ、一〇個ごとに浮の色を変えた。また浮に数字を書き込んで距離を直読できるよう準備した。全長は三一〇間(五五八m)である。

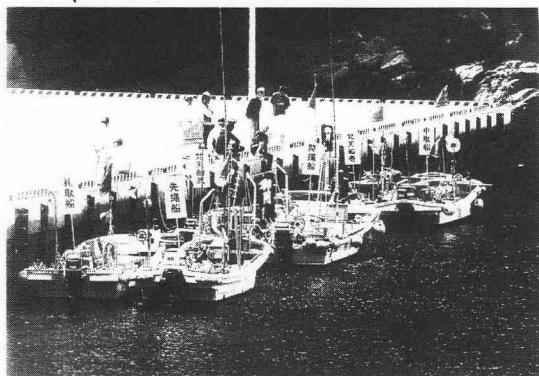
○羅針：今回のコースは直線部のみで、方位は直線の維持のみであったが、漁船用コンパスを杖先に取り付けて確認に使用した。

○小梵天：船間の連絡手段は初めから懸案だったが、小梵天を各船に用意し、終了は丸を描き、了解は縦に上下することとした。進路維持のため、陸からも観測者(パンチ佐藤)が大扇でサインを送ることとしたが、これを確認できる双眼鏡を梵天船上に用意し、小中学生が観測員として乗り込んだ。

○要員：乗組員は少ない船で三名、多い船は四名だった。

別に撮影機材として、カメラ船二隻、陸上カメラ一台を用意した。以上の膨大な準備は看板など一部を除いては、地元大石集落の住民ボランティアの協力であった。

番組の出演者は、進行役として元野球選手でタレントのパンチ佐藤氏を迎えた。自身は神奈川出身だが、パンチ氏の親が岩手の出身というご縁。その他の出演者はすべて地元の有志。大人三〇数名、小中学生四名の参加だった。



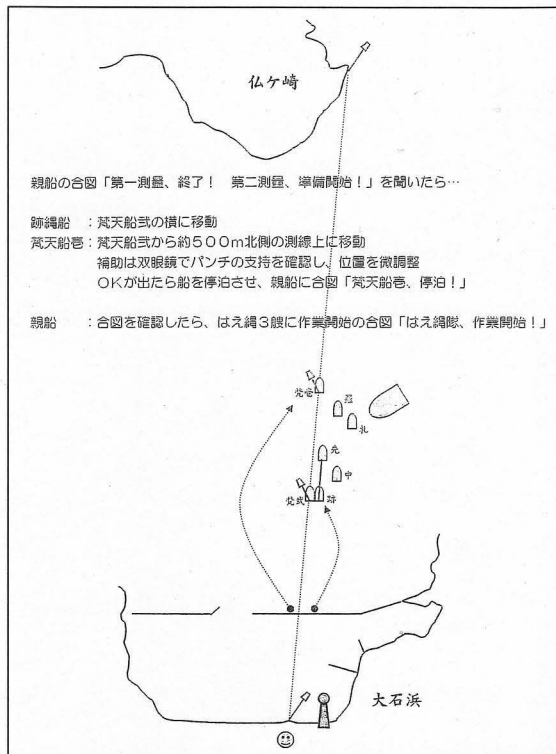
船には役割名を書いた立札を立てた

海上測量の実際

ロケは一三時三〇分に開始、一四時四五分に終了した。当日、海上は晴れ、好天で風だった、それでも船はかなり揺れた。漁船の大きさは、長さ三間（五・四m）、幅一間（二・八m）くらい。ヤマハカーンマーのエンジンがついていて結構速い。三〇キロくらいは出そう、モーターボートのように走る。船尾でも船首でも操船できて、横にも動ける。測量の実演は概ね次のようであった。

（１）まず大石浜と対岸の仏ヶ崎の両岸に梵天を立てる。この二点を結ぶ線が海上の測線となる。

（２）測量の基点である大石浜近くの海上に「梵天船一」と跡縄船が停泊している。「第一測量、開始！」という親船の合図で先縄船が北側約五〇〇mの測線上にいる「梵天船二」をめざして次々に浮をつけた



間縄を海に投入しながら移動する。中取船は投入された間縄がたるまないように手カギを使って補助。羅針船からは、その方位を確認。跡縄船は間縄の末端を保持したまま、定位位置に留まっている。

（３）先縄船は五〇〇m移動したら停泊し、「梵天船二」がその位置に移動する。そして測定数値を記録、「第一測量終了！」を合図する。先縄船は投入した間縄を巻き取り第二測量に備える。その間に跡縄船は「梵天船二」の横に移動、「梵天船一」は「梵天船二」の約五〇〇m北側測線上に移動する。

間縄を回収した先縄船は今度は「梵天船二」を起点に「梵天船一」めざして間縄を落としていく。測定値を記録するのは梵天船に乗っている記録係。梵天船は先に進みながら入れ替わるので、札取船が順番にその数値を回収・整理する。

この繰り返しで仏ヶ崎までの距離を測った。これら船隊の動きは、大石の浜で紅白扇子を振るパンチ佐藤氏の指令に従って行われたことは言うまでもない。

各船に乗り込んだ観測員は双眼鏡でパンチ氏の指示を確認し、位置を微調整。O・Kが出たら船を停泊させ、親船に合図。親船は合図を確認して指示を出す。以上が海上引縄測量ロケの全貌である。

実演の感想と反省

（１）三間（五・四m）以上の梵天に初めてお目にかかったが壮観である。それでも2km先の対岸に立てると小さすぎる感じである。記録



空高く見えるのは梵天 祭半纏で指揮

に出てくる梵天の寸法は三間が最大であるが、実際にはもっと高い梵天が使われたかも知れない。

(2) 縄船はどちらが縄をくりだすのか、わからなかったが、地上演習で漁師さんの一言で解消した。「縄は引けないよ、先縄船が落としてゆかなければだめだ」といわれ了解して、そのとおりとした。この縄を巻き取るのがまた大変であった。縄端を保持している跡縄も縄をたぐれないか、と指示したが、難しいようだ。

先縄がスピードを出して、同じ速度で縄を手繰りながら戻るのがいいらしい。先縄船の漁師さんはやかましかったが、よくわかっていて、予め若手を二人船に乗せており、彼らに縄手繰りさせていた。実際にも先縄が一番活躍した。

時間的にロスがあるが、解消にはもう一隻予備の縄船を出せばいいという結論だった。

(3) 札取船にはテーブルを積んで作業しやすくし、歴史研究家、元小学校校長さんなどが乗り込んだ。そのテーブルはわざわざ作ったのかと聞いてみたら、鮭の定置網漁で必要なのだという。それぞれに工夫しながら資材を持ち寄ってくれたのは大変よかった。

(4) 扇を振つての合図は、浦島測量の図に出てくるので、行われたところはあるかも知れないが、長距離の海上引き縄では一般的でないのはわかっていたが、タレントの役割として設けられた。

(5) 各船の役割、運用はすべて筆者の判断である。詳しい記録がないので、他の地域の情報など考慮して推定した。

(6) 筆者の親船は全体が見える位置にいて若干の指導をしたが、ほとんどは地上演習通行行われたのでトラブルは全くなかったといっている。しいて言えば、最初はとまどいがあって動きが鈍かったので、

前に出るとか、もっと近寄れ、という必要があったが、二区間目あたりからは、さすがに動きがよかった。

そこで、気がついたのだが、親船は乗って作業するものではなく、作業休憩、あるいは昼食など 隊員の休憩用だと分かった。隊員は羅針船、札取船、先縄船などに乗って自ら作業し、あるいは補助作業の指導をしていたと思われる。

(7) 予想外のトラブルの場合、全部中止、やり直し、まで考えていたが、大きな

トラブルがなかったのは幸いだった。途中、一度縄の上を他の漁船に走り抜けられ、縄を切られたかと心配したが、引っかかって大きく引っ張られた程度で済んで幸いだった。逆に浮きがあっても縄はそれほど沈むということもなかった。

湾内では帆立貝の養殖をしており、その籠の上を縄引きしているのが籠に引っかかった例があったが、直ぐ外して終わり。親船に同船していた長老は「心配ないよ」と言ってくれたので気にならなかった。

また、作業ミスとしては、二区間目で方位が大きくズレて問題になったが、陸からの合図ですぐ修正された。



抜群のチームワークを発揮した地元ボランティア

測量の精度

今回の計測結果は目測した最終部分二〇間を含め一、二三間、二〇六〇mであった。国土地理院の地図上では二、一〇〇m、伊能忠散の地図上では二、〇八八mだったから、いい成績だったと考える。

精度を問題にするなら無理だよ。形だけ整えばよしとせねばなるまい、といいつて始めた仕事だったが、こんなにいい結果が出て、関係者は驚いていた。「こんなことで結構合うんだな」という感想でした。最終の岬部分が波が高く、難しいので札取船の判断で目測としたが、キチンと測ればよかった、という反省がしきりだった。

伊能隊がここを計測したときは、仙台領で散々引き縄を行ってきており、隊員はベテランだった。数字の一致は誤差が打ち消しあった偶然の結果であろう。しかし、苦勞してくれた地元の人々には嬉しい結果だった。

大石浜の人々

大石集落は戸数約五〇戸。ほとんどが漁業者。ホタテ、わかめ、昆布の養殖と、少し沖合にある鮭の定置網漁に従事している。一部で牡蠣とムール貝の養殖もおこなっているが、仕事としてはホタテ、わかめ、昆布が主力と。定置網は漁協の事業で、シーズンには給与をもらう。ホタテは稚貝の採取は共同事業、養殖は個人事業で海面が割り当てられている。生活は安定していて、農業者よりは楽という。ただ、我々には危険があるとは町内会長の弁。救命胴衣を着けていないと、事故があっても保険が出ないなど、安全対策はシビアである。漁船は安全対策で高い竿の先に赤い旗を立てて走っている。

この集落によく海上引き縄記念碑が出来たと感心するが、唐丹自体、昔から良港で繁栄しており、文化度も高く、明治五年に小学校ができ

た直後、釜石には一校しかなかったが、唐丹には三校もあったという。

葛西昌正の伊能測量記念碑が有名だが、伊能測量を受け入れる文化的土壌があったのだろう。今回の徹底的な協力も、これまでNHKでもやらなかったことに、挑戦してみようという風土かと思われる。優良漁村としての誇りを感じた。

残念ながら子供は高校生一人、中学生一人、小学生三人だという。その一方で、この集落にはピカピカの消防自動車一台が配備されている。みんな消防団員だともいっていた。昨今めずらしい集落共同体生活的基盤があり、今回のロケへの対応も集落全体がすぐまとまったという。二百年前の伊能測量隊の海上引縄実測の際も、この浦の漁民の助けが大いに力を発揮したことであろう。

(わたなべ いちろう・名誉代表)

岩手めんこいTV 9月5日(金) 19:00～
北海道文化放送 9月6日(土) 13:30～
秋田テレビ 9月6日(土) 13:30～
福島テレビ 9月6日(土) 13:00～
さくらんぼTV 9月7日(日) 15:00～
仙台放送 9月13日(土) 13:00～
フジテレビ(深夜) 9月27日(土) 26:55～
その他のフジ系列局 10月～独自時間帯



大石浜に立つ「海上引縄測量碑」

伊能大図総覧の地名と景觀(七)

星 埜 由 尚

平塚から厚木

平塚から厚木周辺は、第九次の測量による成果である。忠敬は、高齡のため参加しなかった。従って、弟子達のみによる測量である。測量日記には毎日の行程が詳しく書かれており、特に社寺の記載は詳しい。弟子達による測量も忠敬同様に几帳面に記録が付けられている。第1～5図は、厚木付近の大図で、平塚を出立して八王子に向かうまでの測線が描かれている。

第1図は、平塚付近を拡大した図である。平塚には、○印と☆印が付けられている。東海道に沿った宿場の様子が家並みでもって表されている。平塚新宿で測線が分岐し、測量日記²によれば、文化一三年(一八一六年)三月一日平塚を出立した測量隊は、北へ向かつて厚木道を進んでいた。厚



第1図 大図第99号 平塚

木道にはいると等寛院がある。等寛院は日記には記録されているが、大図には記載されていない。しかし大図には八幡社の表示があり、青い屋根と赤い破風の薨

佐久間達夫「伊能忠敬測量日記伊豆七島測量篇」

が描かれ、その手前には同じような薨の絵があり、これが等寛院であろう。

八幡村から四宮村を通し、田村に達する。日記に

は、泉蔵院、

高林寺、北向観音堂、山王之社、大念寺、四之宮大明神、前取神社、鏡智院、妙楽寺と社寺が順番に記載されている。四之宮大明神が即ち前取神社であろうか。御朱印十石と測量日記にはある。妙楽寺は、大図にも表示されていて薨が描かれている。測量日記によれば御朱印十石である。

さらに北

上すると、

大神村に達

する。真芳

寺があり、薨

の絵が描かれ

ている。測線

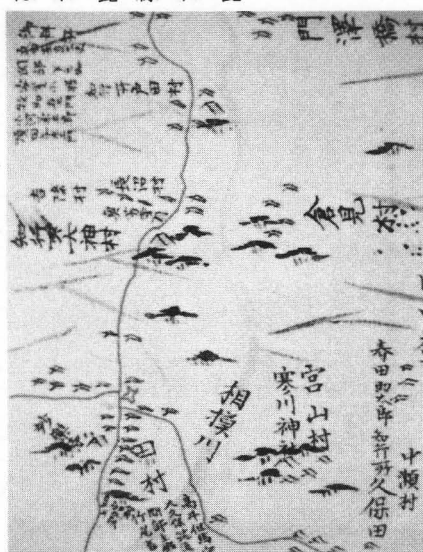
の東側にも薨

が描かれてお

り、日記には



第2図 大図第93号 田村
(第5図の一部 左下方部分)



第3図 大図93号 大神村
(第5図の一部 左中央部分)

「右に寄
木大明神、
右に観音
寺。左の
方四十間
許引込曹
洞宗、津
久井県功
雲寺末大
上山真芳



第4図 大図第93号 岡田村
(第5図の一部 左中央部分)

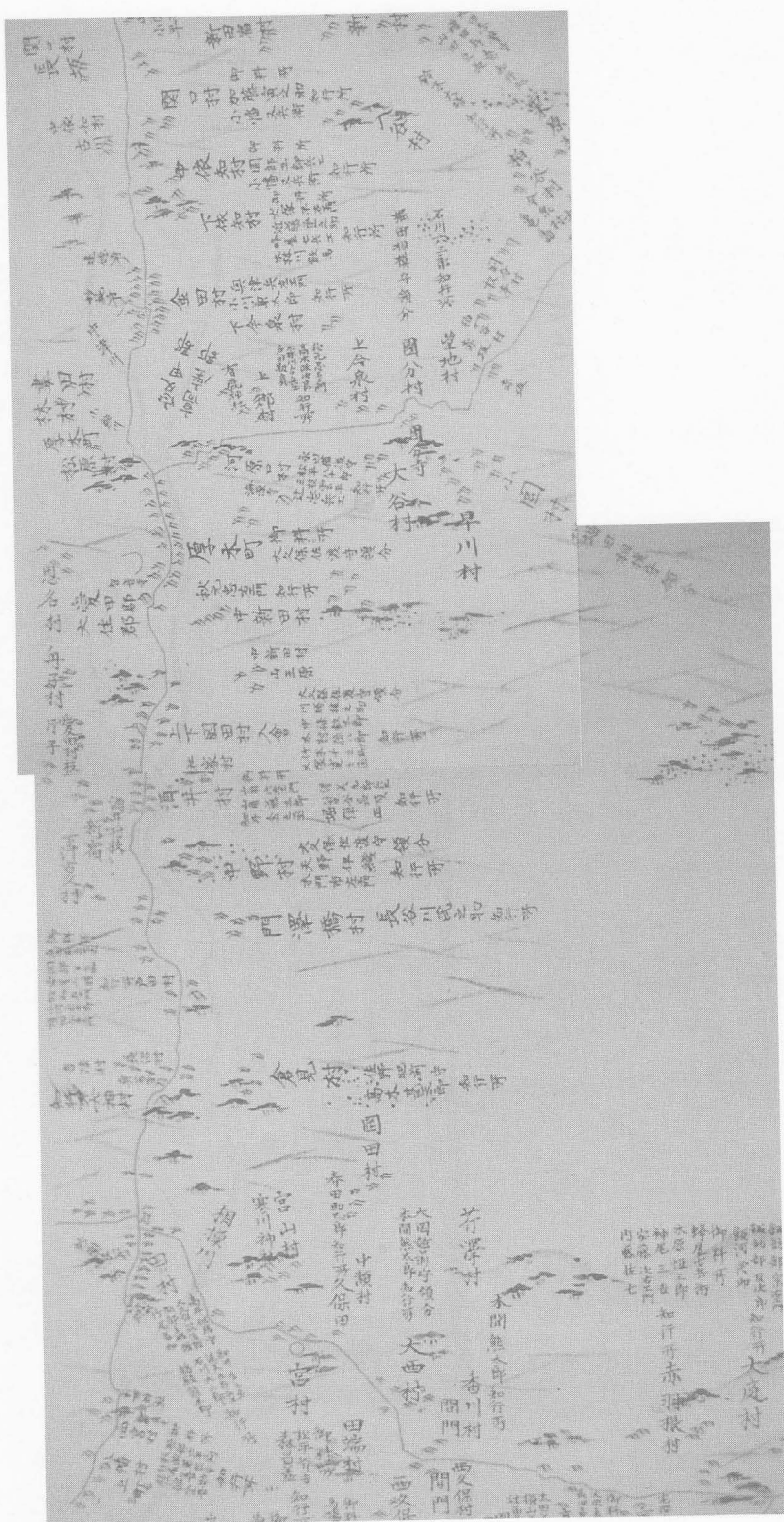
寺。御朱印高十石」とある。戸田村にも麓が描かれているが、日記には、「右一町許引込八幡宮。御朱印八石。別当等寛院末延命寺。」とある。戸田村は、江川太郎左衛門支配の御料所、六名の旗本相給の村である。酒井村字下置で恩増(曾)川小田原橋を渡る。酒井村も御料所のほか、旗本の相給の地であるが、この辺りの御料所は、すべて江川太郎左衛門支配である。そして第4図を見ると相模川に注ぐ支流が酒井村には二本描かれている。現在の地形図には、恩曾川と玉川と注記のある川がある。酒井村では、大山道の分岐で測量の印を残したと測量日記にはあるが、大図には分岐する測線は描かれていない。岡田村でも小田原橋を渡ったように測量日記には出ており、酒井村と岡田村に同名の橋があったのであろうか。岡田村では、「左十二間許引込東本願寺末寿永山長徳寺。御朱印十石。」とあり、測線の左に見られる麓が長徳寺であろう。長徳寺は、「坊中二ヶ寺、境内千二百五十六坪」とあり、大きな寺であったようである。現在も厚木市岡田に長徳寺がある。

測量隊は、愛甲郡に入り、厚木町に到着する。厚木町は、江川太郎左衛門支配の御料所と大久保佐渡守の領分となっている。大久保佐渡

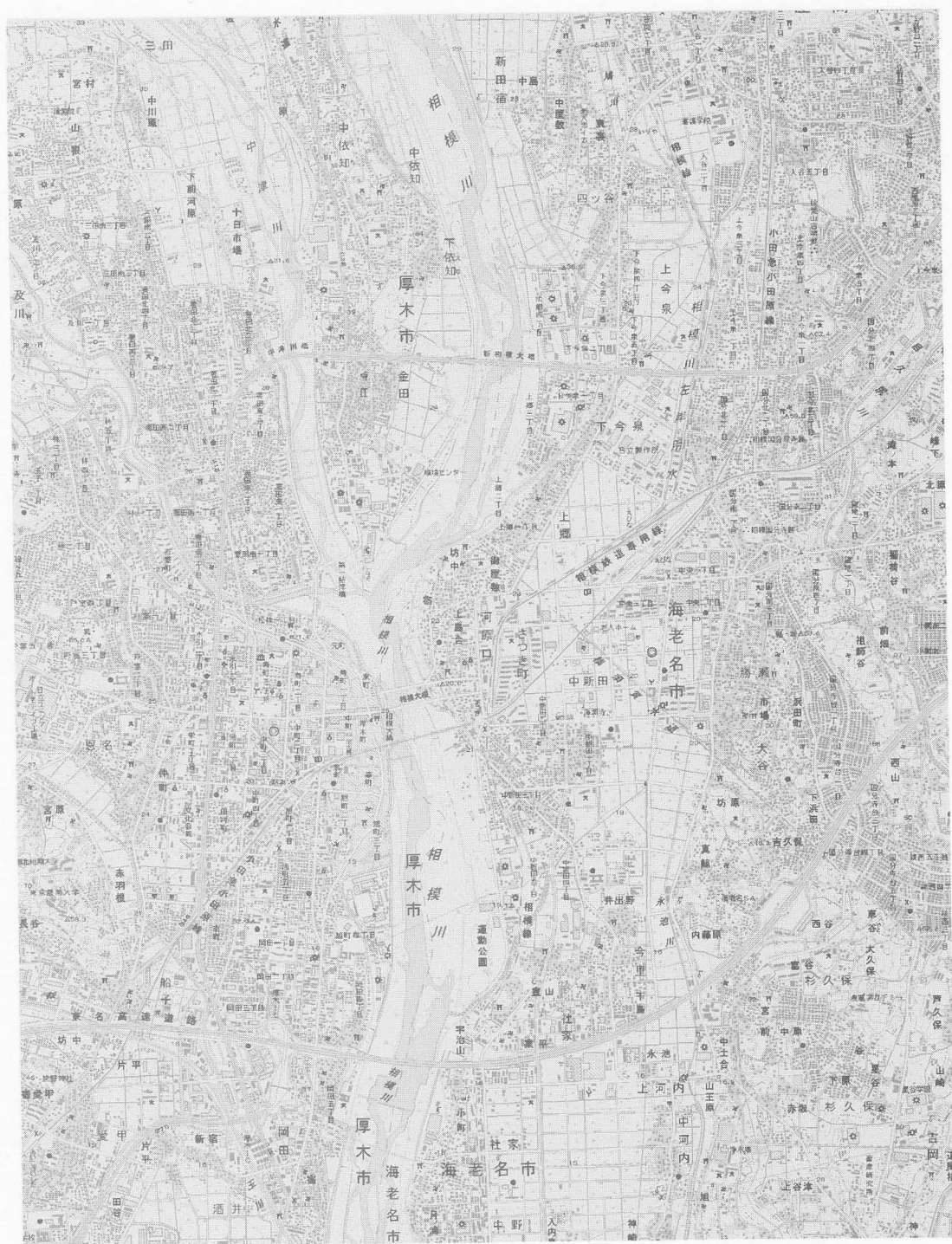
守とは、下野国烏山藩主大久保佐渡守忠成である。大久保家には本流の小田原藩大久保家があるが、厚木は、小田原に近いとは言え、大久保家支流の烏山藩が相模に一万石の領地をもち、厚木陣屋を設けて支配していた。厚木町は、下町、中町、天王町と分かれており、天王町で宿所の前に「王」印を残した。大図を見ると、厚木町の北端近くで測線が分岐するが、ここがその分岐点に当たるものと思われる。厚木町には、智音寺という寺院が描かれているが、真言宗海老名惣持院末撰光山智音寺と言い、御朱印三石である。智音寺は、厚木市旭町二丁目に現存し、地元では竜舌蘭の寺として有名で、室町時代には厚木氏の館があったと言われている。

三月一二日厚木町を出立し、酒井村の分岐の印に戻って、大山道を西に向かった。この分岐の測線は、前述したように大図第93号には描かれていない。図の端であるところから、おそらく内務省が模写したときに脱落したのであろう。大図第99号(第5図)にはそのつながりが明瞭に描かれている。三月一二日には、大山道を上糟屋村子易まで測量している。愛甲村(第7図右中央)には、樹木に囲まれ、大きな麓の見える家並みが描かれているが、測量日記には、測線右側に熊野権現、大蔵院、宝積寺、長福寺、愛甲三郎古城跡があると記されており、大図には記載されていないが、大きな麓はこれらの寺社等を示しているものと思われる。同じように、石田村(愛甲村の南)には、青い屋根と赤い破風の麓が描かれ、日記には、測線左側に松林の中に子安明神、西本願寺末金林山長竜寺と記されている。

高森村を過ぎ、下糟屋村に入る。上下合わせて糟屋村はかなり広い。現在も伊勢原市の大字として上粕谷、下粕谷がある。下糟屋村に入ると「歌川石橋中二間」と日記にあり、第7図の下糟屋付近の流れが現在の歌川である。現在では改修が進んで河道が直線状になっている。

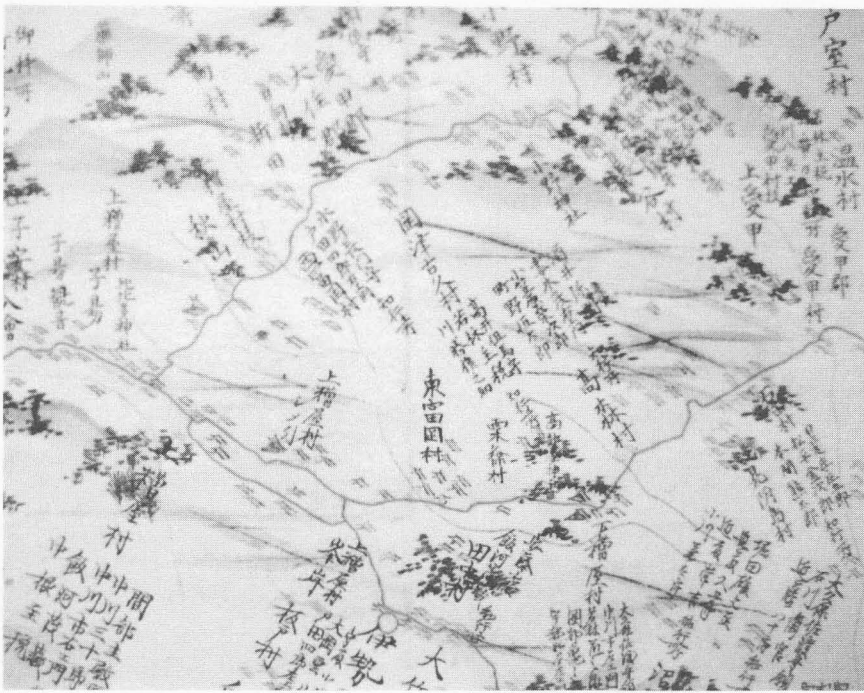


第5図 大図93号 平塚、厚木道



第6図 2万5千分1地形図 「厚木」「座間」の一部

日記には、右に普濟寺、左に大慈寺、さらに右に式内高部屋神社とあり、大図に描かれている麓がそれぞれに相当するのであろう。高部屋神社は、社殿のように描かれ、大図にも注記されており、「祭神五座、応神天皇、仁徳天皇、神功皇后、住吉大明神、姫大神。祭礼八月十五



第7図 大図 99号 愛甲郡（第11図の一部 下方部分）

日」と日記に記され、当時は地域住民の信仰を集める大きな神社であったようである。現在は、地形図にも記載がない由緒ある神社である。下糟屋村を過ぎ、渋田川を渡る。渋田川は、地形図（第12図）では下糟屋を挟み南側を流れる小河川である。上糟屋村に入り、「嶺岸」（大図では峯岸）、「辻」、「山王原」、「石倉」と通過する。これらの字地名は地形図にも見られる。大図（第7図）に見られる地名「シメ引」も地形図には表示されている。石倉では、文化八年（二八一年）第二次九州測量の藤沢から大山への測線につないでいる。上糟屋村シメ引には大きな麓が描かれているが、日記にある山王権現がこれに当たるのではないかと思う。石倉にて「旧測の当り不動石碑に繋ぐ」とあり、不動尊の石碑を測量基準点としたようである。



第8図 大図 99号 小野村から荻野山中
（第11図の一部 上方部分）

荻野道の測線の南、渋田川の支流の脇に高部屋神社と同様の社殿を描いたと思われる絵記号があり、これが熊野権現であろう。また、秋山の手前に大きな甍が描かれているが、日記には「左に一の牛王堂あり」となっており、このことも知れない。秋山では、日向村の薬師道が分岐する。日記によると日向山霊山寺薬師御朱印六十四石で日本三薬師のひとつであるとされている。大図には日向薬師の記載はないが、

「薬師山」の注記が見られる。因みに日本三薬師とは、越後米山薬師、

参州鳳来寺薬師、当国霊山寺薬師であると日記には書かれている。

地形図には日向薬師と表示されており、日向山霊山寺と言い行基が開いたと言われる古刹である。かつては多数の坊もあり大変栄えた霊場であったが、廃仏毀釈により多くの堂舎が破却の憂き目にあった。しかし、現在も多数の文化財が残り信仰を集めている。現在では、三大

薬師は、鳳来寺薬師ではなく高知県の豊楽寺柴折薬師(国宝薬師堂あ

り)となっているようである。^{*2}

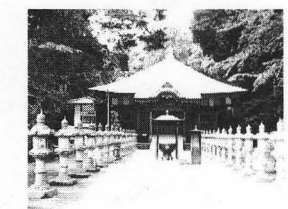
測量隊は日向薬師には行っていないが、西富岡村、日向村、岡津古久村を通り小野村に達する。日記には、小野村から左一里ばかりの所に「天台宗上野陵雲院末無常山淨発願寺山内御朱印十六石五千六百坪」

^{*3}と書かれている。また、「右三十町山裾に曹洞宗(中略)医王山石雲

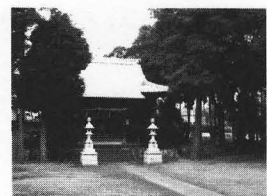
^{*2}日向薬師については、Wikipediaの記事を参考にした。

^{*3}佐久間達夫「伊能忠敬測量日記伊豆七島測量篇」では、「淨發願寺、

寺」とあり、右三十町が理解できないが、現代の地形図を見る



第9図 長谷寺
坂東六番札所



第10図 小野神社

と日向薬師の奥に淨發願寺、さらに奥に石雲寺がある。西富岡村、日向村、岡津古久村など、現在もそれらの地名は地形図上に見られる。第8図には聞修寺と書かれた寺院が描かれているが、日記には聞修寺となっており、図の写し誤りである。聞修寺は、南北朝あるいは室町時代に遡る古刹で、現在山門が残り、厚木市の指定文化財となっている。

測量隊は、小野村、長谷村、相名村、飯山村、及川村、荻野村と通過し荻野村に止宿している。この測線に沿っては、多数の立派な甍が描かれており、その幾つかには小野神社、長谷寺、竜蔵院、坂東六番観音堂の注記がある。小野神社については、測量日記では「(前略)閑香

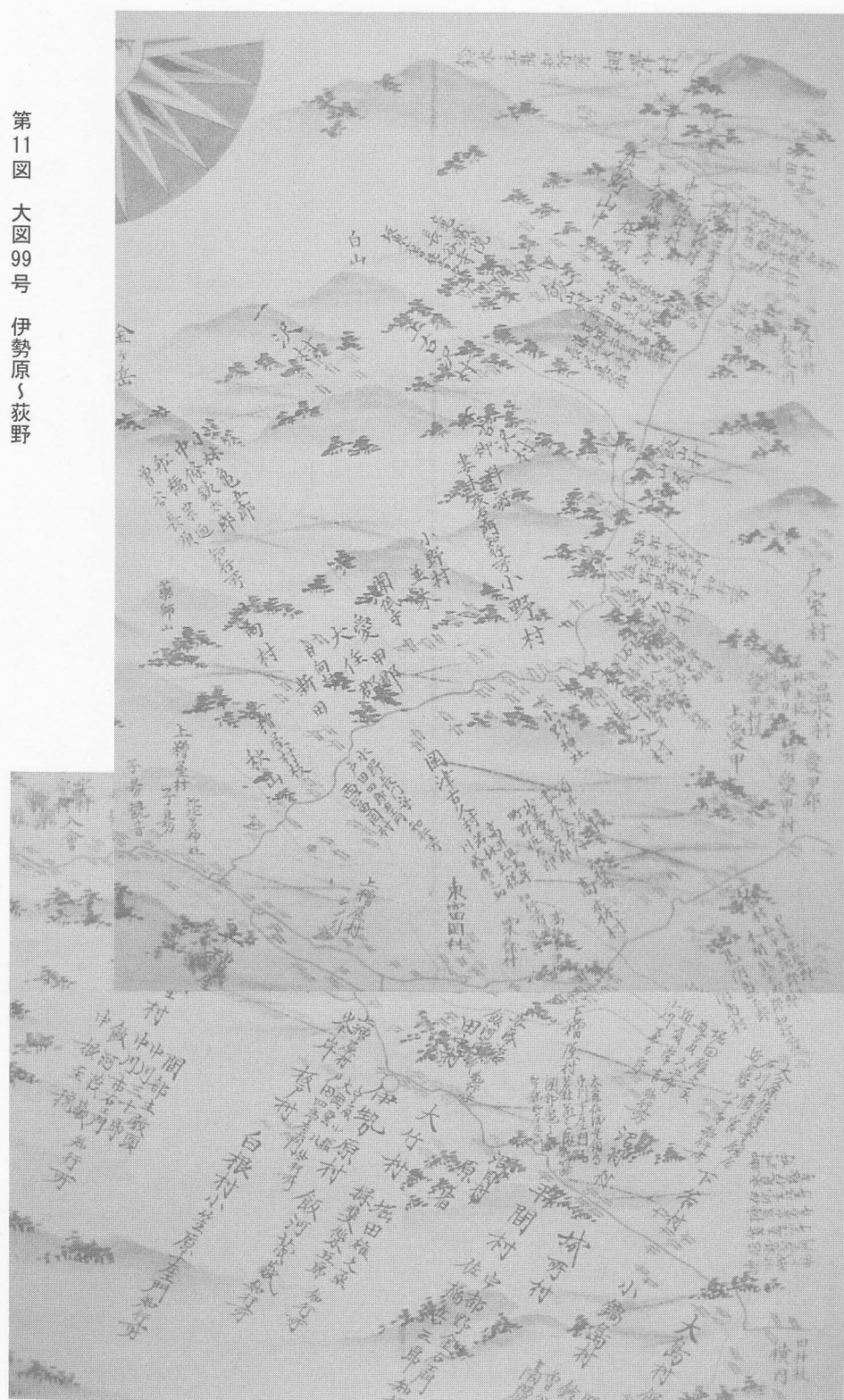
明神の社、式内小野神社、祭神下 春 尊」となっている。長谷寺は、

真言宗の古刹で坂東六番札所として信仰を集めている。第8図には、白山と書かれた山が長谷寺の背後に描かれているが、地形図でも、白山(一八三・九四)の山裾に長谷寺がある。竜蔵院は、飯山竜蔵権現がこれに当たるのであろう。

このほか、妙昌寺、諏訪明神社、本禅寺、白山社、金剛寺、光福寺、

十六万五千六百坪」となっているが、訂正した。

第11図 大図99号 伊勢原、荻野

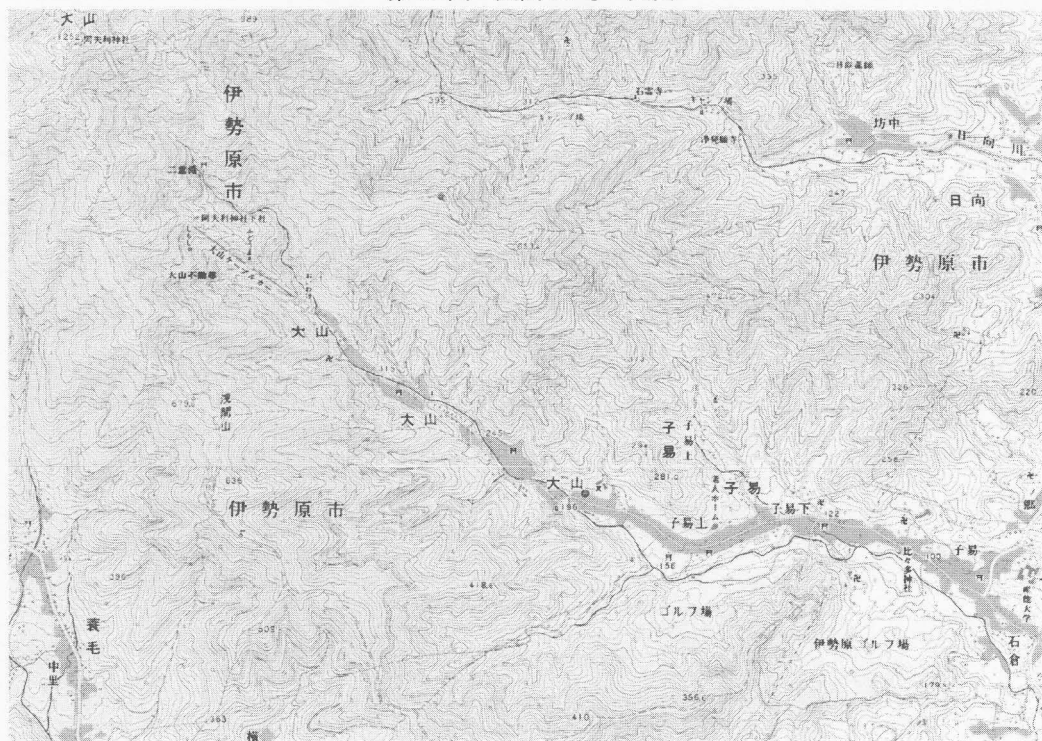




第12図 2万5千分1地形図 「伊勢原」の一部



第13図 大図99号 大山



第14図 2万51千分1地形図 「厚木」「伊勢原」「大山」「秦野」の一部

弘法寺、弥陀八幡宮と言った寺社が測量日記の中で名を連ねている。これら描かれた麓に対応しているのであろう。

荻野村は、下荻野村、中荻野村とあり、荻野山中という地名もある。

下荻野村には○印が付いており、宿駅であり、伊能測量隊も止宿している。荻野山中は、小田原藩の支藩であり、当時の藩主は大久保出雲

守教孝のりたかと言った。大図にも、大久保出雲守在所と記されている。この

殿様は、藩主在任四九年に達し、大阪定番、奏者番を務めた。「養蚕要略」を刊行して養蚕の振興を図ったと言われている。[＊]

大山道

伊能忠敬本人の最後の測量となった第八次九州第二次測量は、文化八年（一八一一年）十一月二五日に江戸を出立して、二八日に大山町に到着した。藤沢から田村（平塚市田村）、伊勢原村を経て、子安村を通り大山町に達している。大山への入口野上糟屋村子易には、比比多神社があり、祭神は、木花咲耶姫命で子易明神とも言われ安産の神様である。神木のなぎの木があり、伊勢原市の指定保存木となっている。創立は天平年間と伝えられ、現在の本殿は、享保二年（一七一七年）に再建されたものである。日記には、「此村（子安村）に子安地藏、子安観音あり」と書かれ、また、子安村には、江川太郎左衛門代官所があると書かれているが、大図に子易観音の記載がある他は、その所在は分からない。

＊工藤寛正編「江戸時代全大名事典」による。

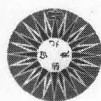
大山町は、大山寺領、御朱印百五十七石と日記には記されており、

大山寺は、天平勝宝七年（七五五年）に東大寺の開山良弁ろうべんが開いた古刹で雨降山大山寺と言ひ、大山不動とも言われる。本尊は、鉄造の不動明王で、国の重要文化財に指定されている。徳川家光が伽藍を整備し、春日局も家光の世継ぎになることを祈願して大山不動に祈ったそうである。江戸時代には、大山詣が盛んとなり江戸周辺の一大観光地となっていた。大山は江戸から近く、大山修験者から転じた御師が各地の大山講を手引きし、講中宿が賑わったと言われている。[＊]大山は、

大山寺と阿夫利神社の神仏習合の聖地であつたが、明治初年には廃仏毀釈の嵐が吹き荒れて伽藍や宝物の破壊が行われた。地形図に記載されている阿夫利神社下社の位置にかつては大山寺があつた。大図には、大山寺、不動堂と思われる麓が描かれその背後には、阿夫利神社と書かれた山が描かれている。

掲載した伊能大図は、すべて国会図書館所蔵のもの的一部であり、「伊能大図総覧」から引用した。地形図は、第6図が国土地理院の地形図の一部であり、その他は（財）日本地図センターの彩色地形図の一部を引用した。

（ほしの よしひさ・代表理事・（社）日本測量協会副会長）



＊神崎宣武「江戸の旅文化」岩波新書による。

「綾部のバカ息子」 麻田剛立の生家を訪ねて

河島悦子

大分県杵築市に行く。松平三万二千石の城下町は、町屋を中心に両側の高台が武家屋敷で占められ、今も江戸期そのままの形態で残っていた。剛立生家跡が観光マップに載っていないので市立図書館に行く。若い女性職員に聞くと「知らない。この土地で麻田姓は聞かない」という。でもパソコンで調べてくれて厚い本を三冊出し、ご自分で調べてくださいとのたまう。「これでは麻田剛立が可哀想すぎる」と思わず声に出すと、「この前も大阪から調べに来た人が同じ言葉を云われ、大阪では麻田剛立といえど大人物なんです、知らないんですかと、かなり大憤慨されていた」と屈託ない。

話にならないので市役所観光課に行く。窓口の若い職員は奥の方に向かって、生家はどこかと尋ねてくれた。「旧庁舎」と答えが返り、観光マップに印をつけてくれた。

数年前まで市庁舎だった敷地全部が生家跡で、杵築城下町博物館の学芸員が、やや詳しいと教えてくれる。太陽の高いうちに写真を撮りたいので旧庁舎を探す。が案内の土地なのでまごつく。地元の人と思われる老人に聞くと「空き家の旧庁舎に何の用事がある？」と問われ、麻田剛立の生家跡だからという、しばらく考えていたが、「ああ、綾部のバカ息子のことだね。親父は偉い人だったけどね」



杵築市旧庁舎

云いつつ指差して教えてくれた。三百坪程の敷地で隣がカトリック教会、武家屋敷をそのまま教会の門として使っていて楽しくなる。どの家も江戸時代にタイムスリップしたようなたたずまい、中で侍が暮らしているのは・・・とすら思わせる。

博物館学芸員の話では、以前に麻田剛立展を開いたが不評だったという。

綾部家の子孫が持っている文書を中心に、展示した内容を見せていただく。祖先由来書には、京の綾部より中世、大友氏に仕官、大友氏滅亡後、麻田郷で郷土暮らし、近世、松平氏に百石郡奉行職を得たこと。

享保大飢饉（一七三二年）の折、農民救済法で上層部と対立、職を辞し、綾部塾を開いたこと。

（註・享保大飢饉 享保十四年（一七二九）より連年の不作、十七年の大蝗害に薩摩、長崎を除く西国諸藩は領民の三分の一を病餓死させたという。）

天明（一七八一年）まで藩校がなく、生徒が多数集まったこと、そのころ剛立は儒学者綾部綱斎の四男坊・妥彰（やすあき）として部屋住み身分ながら医学を修め、長崎御用役の藩主に付き長崎や江戸を往復したことなどがあり、大谷亮吉著『伊能忠敬』の麻田剛立編の原典らしきものだった。

医家時代の処方箋の切れ端に「肥満の人は酒、肴の膏、血、肉に入りて血塞る故に・・・（略）」漢方薬の処方書が書いてある。断片で申し訳ないが「附子（トリカブト）・甘草・センナ□□□を用ふ」どうやら



杵築カトリック教会



近刊紹介

◇『月のえくぼを見た男―麻田剛立』

くもん出版 二〇〇八年四月刊
鹿毛敏夫著・関屋敏隆画

江戸時代に反射望遠鏡で月を見て日本初の月面観測図を書いた男。独学で天文学を学び、日食を見事的中させ、ケプラーの第三法則をも見つけていた。大坂に天文塾「先事館」を開き、日本の近代天文学の礎となった麻田剛立の生涯を描く。

下剤らしきものようだ。彼が辞職願を出しても許さなかった藩主はきつと肥満に悩んでいたにちがいない。脱藩後、大阪に住んでいると分かったときも「捨ておけ」といい、長兄を百石で郡奉行に取立て、弟に送金するよう申し付けたと、兄嫁の証言が残っているという。脱藩お手討ちの時代である。



「綾部塾跡」・「麻田剛立生誕の地」

(かわしま えつこ・「歴史街道を歩く会」代表)

忠敬さん大健闘！！ 秀吉・家康抜いて第10位

日本の歴史上の人物はどんな業績を残したか。社会科学の理解度を調べるために文科省が全国の小6生と中3生を対象に実施した調査の結果、伊能忠敬は正答率84・9%で第10位だった。正答率トップは「邪馬台国の女王になった」卑弥呼で99%。わが忠敬先生は確固たる業績によって小中学生にも認知度が高かった。

(朝日新聞6月28日朝)

順位	人物	正答率(%)	順位	人物	正答率(%)	順位	人物	正答率(%)
1	卑弥呼	99.0	15	紫式部	80.4	29	北条時宗	63.6
2	ザビエル	97.7	16	鑑真	79.6	30	中大兄皇子	54.9
3	ペリー	95.1	17	徳川家康	79.4	31	中臣鎌足	54.1
4	野口英世	91.7	18	徳川家光	78.5	32	東郷平八郎	51.9
5	雪舟	90.1	19	清少納言	78.4	33	西郷隆盛	50.0
6	杉田玄白	89.6	20	藤原道長	77.9	34	板垣退助	47.3
7	福沢諭吉	88.8	21	行基	75.8	35	陸奥宗光	40.2
8	織田信長	87.1	22	歌川広重	72.8	36	伊藤博文	40.1
9	聖徳太子	86.2	23	本居宣長	72.3	37	勝海舟	38.2
10	伊能忠敬	84.9	24	聖武天皇	72.1	38	明治天皇	37.8
11	足利義満	84.3	25	近松門左衛門	72.0	39	小村寿太郎	33.8
12	足利義政	83.8	26	平清盛	65.0	40	大隈重信	28.7
13	小野妹子	82.1	27	源頼朝	64.8	41	木戸孝允	25.4
14	豊臣秀吉	81.5	28	源義経	64.0	42	大久保利通	23.5

◇『江戸の天文学者 星空を翔ける―幕府天文方、渋川春海から伊能忠敬まで―』技術評論社 中村土著 二〇〇八年七月刊



観念的な陰陽道の宇宙観から、科学としての天文学へ。渋川春海、高橋至時、伊能忠敬と、生涯をかけて宇宙の真理を探求し、天文に情熱を注いだ人たち。いつの時代も変わらない、星空へのロマン。

芳名録より

— 佐原伊能家を訪れた人々 —

伊能陽子

日本人科學的
天材能力之徵證
大正十五年初夏
上杉慎吉

日本人科學的
天材能力之徵證

大正十五年初夏

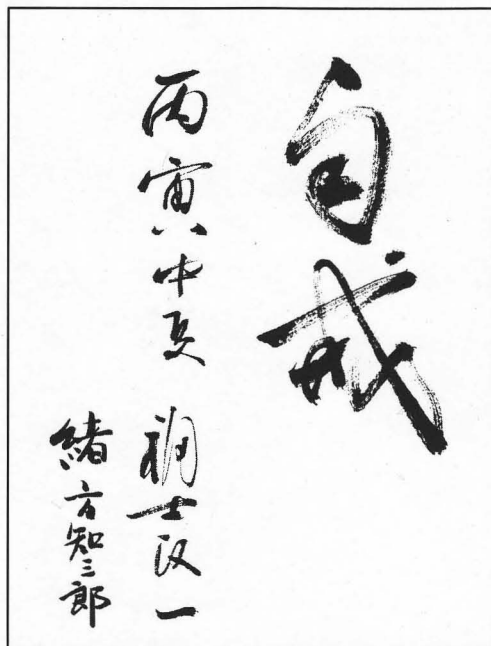
上杉慎吉

上杉 慎吉

うえすぎ しんきち (一八七八—一九二九)

憲法學者。福島県出身。東大教授。穂積八束の弟子で、
極端な君權絶対主義を唱え、天皇機關説の美濃部達吉と
激しく論争した。七生社、建国会など右翼団体の思想的
支柱ともなった。主著「新稿帝國憲法」「新稿憲法述義」

(百科事典マイペディア)



自戒

丙寅中夏

福士政一

緒方知三郎

福士 政一

ふくし まさいち (一八七八～一九五六)

病理学者。日本医科大学、東大教授。山口県生まれ。刺青の収集でも知られ、著書「刺青」がある。

(日本著者名・人名典拠録他)

緒方知三郎

おがた ともさぶろう (一八八三～一九七三)

病理学者。東大教授。唾液腺内分泌、老化機構などを研究。共著「病理学総論」など。文化勲章。(広辞苑)

筆跡からみて、揮毫なさったのは福士博士でしょうか。日本病理学会の会長は昭和九年度が緒方知三郎氏で、昭和十二年度が福士政一氏です。丙寅・大正十五年、お二人とも四十代半ば位、研究仲間のご旅行中のお立ち寄りだったのでしよう。

(いのう ようこ・伊能忠敬研究会顧問)

伊能忠敬測量隊 東大寺の諸堂や宝物拝覧

佐久間 達夫

大和国の測量を開始（文化五年十一月二十八日）してから十日目の十二月七日に、伊能測量隊の一行は、東大寺の八幡堂、三月堂、二月堂、四月堂、鐘樓大鐘、大仏殿大仏、戒壇堂を拝覧し、勧進所龍松院にて、東大寺所有の宝物を閲覧した。

この後、興福寺を一覧して、九ツ頃宿泊宅の南都（奈良）の樽井町の池田屋庄左衛門の家に着。

●『大和国寺社霊宝録』（伊能忠敬記念館所蔵）に記述されている東大寺 文化五年十二月書上提出。

南都東大寺

東大寺本願、聖武天皇天平年中為鎮護国家御建立。八宗伝来之本寺、本朝四箇大寺之第一歴代公武御願寺也。

寺領

高 二千石

和州添上郡榎本庄

高 二百十石余

寺中境内

右御代々御朱印頂戴

高 千石

防州佐波郡国衙之内。

右従往古領地。

高 百石

真言院領

和州添上郡法華寺村、肘塚村、

法蓮村之内。

高 三十石 観音寺領 同国同郡般若寺村之内。

高 二十八石余 三倉役人、八幡宮神人、並、公人等居屋敷。

右御代々御朱印別に頂戴。

坊舎学侶 十七ヶ院、堂方九ヶ院、律宗三ヶ院。

鎮守八幡宮 西向

大宮 南北十一間 東西二間半

幣殿 拝殿 御廊 樓門

若宮

拜殿 御廊 神楽所

末社数箇所 祭祠有之。

右天平勝宝元年十一月 依勅請自宇佐奉勸請。

宝蔵 一字

十三重塔 聖武天皇御受戒後、御冠御衣等奉納之。

護摩堂 本尊 五大明王

右為長日御祈祷護摩供勸修之。

新造屋

八幡御本地堂 集会所 経蔵

右長日御祈祷參籠所也。

法華堂 南正面 東西九間半 南北十四間余

本尊 不空羼索観音 御長一丈二尺

脇土 梵天 帝釈 四天王等

後門執 金剛神 秘仏

右天平五年 当寺最初御建立之堂也。

二月堂 東西十四間 南北十一間半

登廊十九間余

本尊 十一面観音 秘仏



御厨子 十一面観音 秘仏

右天平勝宝四年開山良辨僧正弟子実忠和尚開基。毎年自二月朔日
至十四日 二七夜御祈祷修法有之。

鎮守

飯道明神社 遠敷明神社 興成明神社

閼伽井屋 東西三間半 南北一間半

仏餉屋 東西二間半 南北六間半

食堂並宿所 東西四間余 南北十二間余

湯屋 東西三間余 南北十間余

右二月堂一類八ヶ所、從公儀御修理被成下候。

開山良辨僧正影堂

三昧堂 本尊 阿弥陀如来

念仏堂 本尊 地藏菩薩

鐘楼 四間四面

鐘高 一丈三尺六寸 胴廻三丈 口径九尺一寸三分

厚さ 八寸。

行基菩薩影堂

浴室

俊乘上人影堂

大仏殿

金銅 廬遮那仏 坐像 御長五丈三尺五寸

金銅 蓮華坐 五十六葉 高一丈 廻廿九間余

石坐 廿八角 高七尺 廻五十一間余

後光 高八丈三尺 横七丈八尺

二脇士 左 如意輪観音

右 虚空蔵菩薩 坐像 御長各二丈五尺

堂間敷 東西廿八間六尺二寸 南北廿五間四尺三寸

高廿四間余。

金銅 八角大灯籠 一基 高一丈三尺

手水屋 一字

中門 東西十一間三尺余 南北三間六尺

二天王像 東 多聞天

西 持国天

廻廊 南面 東西七十七間三尺七寸 梁間三間

同西側 五十五間

同東側 五十五間

東西登廊 各二十一間一尺

東西樂門 五間一尺余宛

後囲封疆 東西七十九間余

東側 四十間余 西側 四十間余

右大仏殿、元禄年中御再建被成下了。

講堂 三面僧坊 食堂 竈殿

東塔 西塔

右炎焼以来礎石也。

勸化所 号龍松院

本願 聖武天皇御殿

拜殿 但當時、東照宮御相殿也。

経蔵

阿弥陀堂

鐘楼 庫裡 方丈等

東南院殿 境内 東西四十八間 南北百間余

東照宮並拜殿 御殿等

右宝曆三年焼失礎石也。

二荒権現社

經藏 一字

三社宮

三社池 自此池託宣文出現也。

南大門 東西十四間四尺 南北五間三尺五寸

二王御長 各二丈六尺五寸

右正治元年六月建立。

真言院 又号南院

灌頂堂 地藏堂 神護殿 闕伽井

戒壇院

受戒堂 千手觀音堂

右天平勝宝六年伝戒根本、鑑真和尚依勅建立。日本最初戒壇律宗本处也。享保年中再建之。

三倉 又、号正倉院

御倉 南北十七間 梁間五間、

聖武天皇御遺財奉納之。

鎮守藏王権現

右公儀御修理所

尊勝院

右永禄年中炎上、經藏一字相殘。

転害門 南北八間余 梁間四間

国分門 中之門 南門等、炎上後礎石。

御拝石

右准天竺祇園精舍例、聖武天皇入御東大寺之時、於此所拜大殿廬遮那仏給。

宝物

十字額 金光明四天王護国之寺

額内 長五尺五寸 横三尺七寸五分

四方に造、梵天 帝釈 四天王之像

仏舍利 婆羅門僧正将来（持ち來たる）

二月堂 牛玉、並、朱宝板木

同 尊勝院羅尼板木

右寛文七年二月堂炎焼之時、火中相殘。

須真天子經 三卷 聖武天皇宸翰

大愛道比丘尼經 二卷 光明皇后直筆

聖武天皇御袈裟 鑑真和尚将来

頼朝卿御書 俊乘上人江御書

大仏殿古瓦 防州鯖川より上る。

俊乘上人所持勸進柄杓

同 鉦鼓

同 脇息

鑑真和尚将来仏舍利、金塔者、後嵯峨院御寄進也。

釈迦三尊並十六羅漢 各幅 顔輝筆

十六羅漢 各幅 牧溪筆

右両筆羅漢者、將軍、普広院義教公御寄附。御水尾法皇、東福門院

御所覧之時、表具等御修補被為成下候。

已上

辰十二月

東大寺

年預 見性院

役者 北林院

●『第六次四国沿岸測量日記』 佐久間達夫校訂

文化五年十二月七日 朝より晴天。五ツ前、売曆師山村左門、中尾主膳干菓子持て見舞に出る。それより袴を着し、春日社拝謁（奉納の鎧甲三両を見る）水谷社（牛頭天皇）三笠山の麓を過、東大寺の八幡宮、三月堂、二月堂、四月堂、鐘樓大鐘（南都次郎という）大仏殿大仏、東大寺勸進所龍松院にて宝物拝覧。開壇堂（戒壇堂）を拝し、興福寺の中院屋にて宝物拝覧。（両寺宝物別に記す）食堂、東金堂、五重塔、南園堂、北園堂を拝し、九ツ頃帰宿（南都・池田屋庄左衛門宅）此夜曇天。

家族四人で、昭和四十五年（一九七〇）に大阪で開催された「万国博覧会」を見学しての帰路、京都・奈良の名所旧跡を散策した。奈良の三笠温泉で一泊し、次の日、奈良の大仏を見たとき、子供たちが、「大きいなあ」と言った言葉が今でも忘れられない。

南都であった奈良には、東大寺、法隆寺、興福寺、春日大社など、たくさん神社寺院があり、そこには国宝や国の重要文化財に指定されている建築物や仏像などが建立され、安置されている。それも太平洋戦争での本土爆撃から免れて、建設当時の姿をそのままに残し、伊能忠敬が記録した『大和国寺社霊宝録』のなかに記述されている寺社も数多く存在している。

「奈良七重、七堂伽藍、八重桜」と歌われている奈良を、忠敬の測量経路に沿って、ゆっくりと散策することもよいと思う。

（さくま たつお・伊能忠敬研究家）

◆第8回「地図力検定試験」より◆

うてだめし



問題 伊能図の利用について述べた文のうち適当なものを、次の①

④のうちから一つ選べ。

① 明治政府が輯製（輯成）二十万分の一図などの編集に使用した。

② 外国船打ち払いのため、海岸部に領地を持つ大名に配られた。

③ 日米和親条約により提供を受けたペリー提督が日本沿岸の海図作成に使用した。

④ 長崎奉行からオランダ商館の医師シーボルトに与えられ、ヨーロッパで日本全図が作られた。

解説 江戸幕府は、伊能図を幕府内にとどめておき、原則として外部に出すことはありませんでした。シーボルトが伊能図（小図）を入手したのは、伊能忠敬の師である高橋景保からです。シーボルトは国禁のこの図を国外に持ち出そうとして発覚してしまいます（シーボルト事件）。しかし、彼は、写図を持ち出すことに成功し、これを編集した日本全図が後にヨーロッパで刊行されました。幕府から伊能小図の提供を受けたのは、イギリス人の測量艦隊です。この図が正確であることから、艦隊は日本沿岸の測量を中止しています。イギリス海軍水路部はこれを編集して日本近海の海図を改訂しました。伊能図を引き継いだ明治政府は、各種の地図の作成にこれを大いに活用しました。答①（財）日本地図センター「月刊JMJニュース」より

『伊能忠敬測量日記』に見る地震

辻 本 元 博

はじめに

佐久間達夫校注『伊能忠敬測量日記』記載の地震の記述に付いて、今後の地震予知や地層判断史料、その他郷土史の史料等々に役立つものと思い、他の地震史料との照合を試みた。本年三月十八日大阪で開催の某会合での外部講師としての講演で初めて若干触れたが、本稿で詳述する。尚、照合資料は左記の三点である。本稿はこれら照合資料には無い初見かと思われる地震を含め、記録の間隙を補う結果となった。

- A. 『日本の歴史地震史料拾遺』、同拾遺二、同拾遺三 宇佐美龍夫編
- B. 『日本被害地震年表』日本地震学会ホームページ
- C. 『地震噴火災害全史』災害情報センター・日外アソシエーツ編
日外アソシエーツ・(株) 紀伊国屋書店

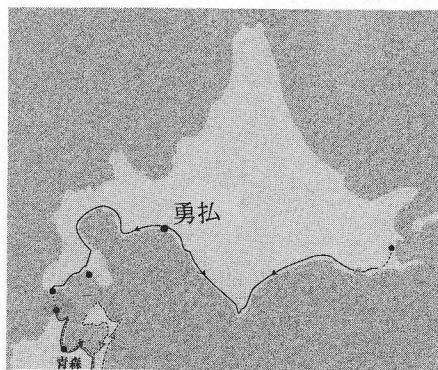
照合結果の概要

下記(1)の蝦夷勇払での地震及び(3)の房総半島岡本村での地震はA、B、Cいずれにも記述の無い初見の地震である。他はA、B、Cの記述を補足する結果となった。(2)の三浦半島の上宮田での地震は江戸でも大地震で、上総の久留里ではお城の塀が崩れ民家が倒れる被害を出した大地震である。また(4)の薩摩半島の山川湊での地震は九州の南北に及ぶ規模の大きな地震であることが初めて判明した。いずれも大きな地震ではあるが、被害が甚大な巨大地震でもなさそうに思われる。以下年代順に述べる。

各地震別の照合内容と所見

(1) 蝦夷ユウブツ(勇払 現苫小牧市)での地震

『測量日記』記述「寛政十二年六月二十二日(一八〇〇年八月十二日) 朝 晴、五つ後地震それより薄曇、七つ頃より中晴、夜も同じ」 蝦夷ユウブツ
資料A、B、Cに記述が無く初見の地震と思われる。



(1) 蝦夷勇払における地震 (1800. 8. 12)

(2) 三浦半島上宮田(現三浦市)での地震

『測量日記』記述「寛政十三年(享和元年) 四月十五日(一八〇一年五月二十七日) 朝七つ半頃大地震
上宮田村(三浦市) 止宿 名主 丹蔵 六ツ後出立」

(尚、『測量日記』中の寛政十三年は改元で享和元年になるので併記した。)

資料Aの拾遺二、拾遺三に江戸での地震記録が有り、資料B及び資料Cにも記述がある。

この地震は大きな地震にある特徴であろうか、前後の江戸での有感地震の記録から取れば資料記述は資料A『日本の歴史地震史料』拾遺の享和元年四月十日(五月二十二日)の『浅草寺日記』及び常陸(茨城県)鹿島に於ける『日記』から始まり資料A『日本の歴史地震史料』拾遺に掲載の四十二日目の『萩原家日記』の江戸享和元年五月二十三日(一八〇一年七月三日)以降なくなる一連の群発地震の記録を伴っている。尚、資料A『日本の歴史地震史料』拾遺の鹿島の『日記』に

は著者及び所蔵先等の詳細記述は無い。

①四月十五日の地震に付いては資料A『日本の歴史地震史料』の同拾遺二で江戸の『浅草寺日記』、同拾遺三で江戸の『萩原家日記』(萩原家文書)、『中井家日記』(播磨屋中井家文書)、『内桜田日記』(館林藩家中福井家文書)に記録されている。

以下時系列を試みた。

四月十日(一八〇一年五月二十二日)

江戸 八過雷同刻地震

『浅草寺日記』

常陸鹿島 八時頃大地震在之近年覚不申候大地震也

『日記』

四月十一日(五月二十三日) 常陸鹿島 夜中地震昨日同し

『日記』

四月十四日(五月二十六日)

江戸 未下刻此地志ん夜中地震凡十七八度

※出頃の
あか空欄

内一度明ケ七ツ半頃至て強

『萩原家日記』

江戸 今夜八ツ半過より六ツ前迄地震大小七ケ度震申候中井家日記

四月十五日(五月二十七日)

江戸 已刻頃より地震少々づつ、度々有之

夜中も度々地志ん有之

『萩原家日記』

江戸 昼九ツ過ぎニ地震有之候

『中井家日記』

江戸 度々地震ニ付御小人目付見廻り有之

今晩度々地震ニ付為見廻

『内桜田日記』

江戸 昨夜中より度々地震

『浅草寺日記』

四月十六日(五月二十八日) 江戸 昼後より・度々地震『萩原家日記』

四月十九日(五月三十一日) 江戸 卯刻此地志ん

『萩原家日記』

四月二十一日(六月二日) 江戸 未刻過地震

『萩原家日記』

四月二十六日(六月七日) 江戸 卯刻過地震

『萩原家日記』

五月朔日(六月十一日) 江戸 已刻過地震

『萩原家日記』

五月十三日(六月二十三日) 江戸 未刻此少地志ん・・申中刻地震

『萩原家日記』

五月十六日(六月二十六日) 江戸

未刻前地志ん 『萩原家日記』

五月二十三日(七月三日) 江戸

子刻過此地震 『萩原家日記』

②資料B『日本被害地震年表』

(日本地震学会ホームページ)

の記述との対比。

「享和元年四月十五日(一八〇

一年五月二十七日)の地震は上

総久留里城の塀など破損、民家

の潰れるもの多かった。江戸で

有感。震央は北緯三十五・三度、

東経百四十・一度」とあり、こ

れは現君津市久留里付近になる。

③資料C『地震噴火災害全史』

(災害情報センター)に「享和

元年(一八〇一年五月二十六日)

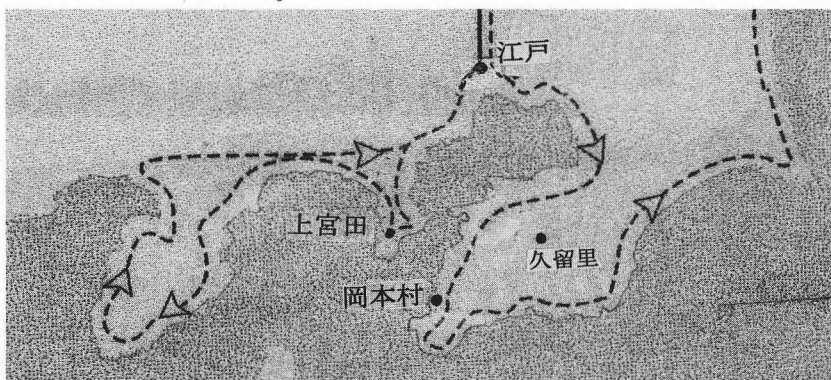
上総地方で地震があつた。マグ

ニチュード六・五。久留里城内

の塀などが破損、民家が多数倒

壊した。」との記述あり。

〈疑問点〉B『日本被害地震年表』(日本地震学会ホームページ)とC



(2) 上宮田における地震 (1801. 5. 27)

(3) 岡本村における地震 (1801. 8. 9)

『地震噴火災害全史』(災害情報センター)とではどうしたことか、月日が一日異なるが、私見を後述する。

④伊能測量隊の行程

江戸での地震記録の日と伊能測量隊の行程を辿る。日中の測量隊は屋外作業が続くが四月十五日以外も通過地点では有感の地震が続いていたのではなからうか。

四月十日(一八〇一年五月二十二日)には伊能忠敬測量隊は町屋村(横浜市)を出立し現在の金沢八景方面を浦郷村(横須賀市)へ向かっている。

四月十一日(一八〇一年五月二十三日) 浦郷村を出立し横須賀村泊

四月十四日西浦賀出立し上宮田村(三浦市)泊

四月十五日(一八〇一年五月二十七日) 朝七時半頃大地震 上宮田村

(三浦市) 止宿 名主 丹藏 六ツ後出立 三崎町泊

資料 B 資料 C の久留里の地震と考えられる。『萩原家日記』では四月十四日(五月二十六日)に「内一度明ヶ七ツ半頃至て強」とあるが、測量日記の記述と照合する限りでは資料 C も含めこれは四月十五日(一八〇一年五月二十七日)の朝の七時半(不定時法では午前四時頃であろうか)と捉えるべきが妥当といえる。

四月十六日(下宮田村泊)、十九日(佐島村泊)、二十一日(江ノ島泊)、二十六日伊能測量隊は一路相模湾岸を吉浜村から熱海に向かって西へ。五月一日(熱海滞在)、十三日、十六日(下田滞在)、二十三日(田子村滞在)。江戸では余震が続くが、五月二十三日には伊能測量隊は伊豆半島西岸の井田子村に逗留中である。

(3)房総半島岡本村(南房総市富浦町)での地震

『測量日記』の記述「寛政十三年(享和元年)七月朔日(一八〇一年八月九日)岡本村朝六ツ二・三分頃 大地震 此日晴曇 止宿浄土宗金池山西方寺 六ツ半後出立 夜晴(夜は那古村)」この地震に付いては資料 A、B、C いずれにも記述が無く初見の地震であろうか。

(4)薩摩半島山川湊での地震

『測量日記』の記述「文化九年三月二十日(一八二二年五月一日) 此夜七時半頃 大地震山川湊(鹿児島県山川町)

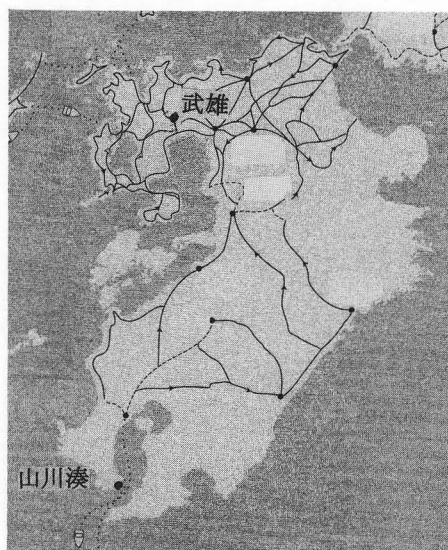
止宿 助市(逗留中) 朝より雨、南風、或は止、又雨」

A 『日本の歴史地震史料』拾遺二の同日の肥前武雄(佐賀県武雄市)の記録 『武雄鍋島家文書 御日記草書』

「小雨四過より雨八より風雨強七半より雨・夜雨五より曇九より薄晴曇七半地震強七半過より曇」

この地震は強く揺れた九州南端の薩摩半島山川から直線距離で約二百二十七キロ離れた九州北部の肥前武雄でも全く同時に強く揺れた大きな地震であつたことが初めて判明した。

『武雄鍋島家文書御日記草書』は前後の記録を辿ると地震の揺れ方のレベ



(4)山川湊における地震(1812.5.1)

ルを「強」・「中位」・「軽」に分けて記録しており、他に「不軽」カルラズ・「幽」カスカという表現もある。

偶然気付いたこと

武雄から比較的近くの佐賀では文化九年三月十日（一八一二一年四月二十一日）晴夜五ツ時比大地震の記述が有る。（『神代鍋島家文書』十九三七七七）（A『日本の歴史地震史料』拾遺二より）一方、B『日本被害地震年表』（日本地震学会ホームページ）には文化九年三月十日（一八一二一年四月二十一日）は土佐（高知県）高知でも土蔵が崩れる地震が記載されている。震央は北緯三十三・五度、東経百三十三・五度（地図を見ると概略土佐湾須崎沖になる）。

C『地震噴火災害全史』（災害情報センター編）でも「一八一二一年（文化九年）四月二十一日四国地方、中国地方四月二十一日土佐で地震があった。マグニチュード六・九 土佐、因幡（鳥取県）でも強く感じた」とある。（もし佐賀と高知の地震の時刻が同時刻なら同一の地震である可能性が出てくる。九州地方では文化九年三月十日と二十日と続けて大きな地震があったことになる。）ところで、この日文化九年三月十日（一八一二一年四月二十一日）の伊能測量隊は九ツ頃（真昼の九ツか）鹿児島止宿の呉服町会所から屋久島行き荷物を積み込んだ船へ乗船し、山川湊を目指そうとするが南風（鹿児島から南の山川湊へは逆風）で船中泊。同日の『伊能忠敬測量日記』に地震の記述が無いが、鹿児島では有感ではなかったのか、それとも乗船済みの為、波に揺られていたのであらうか。

(5) 今後の説明すべき課題

1. 寛政十二年六月二十二日（一八〇〇年八月十二日）蝦夷・勇払の地

震の記録は他に無いか。

2. 寛政十三年（享和元年）七月朔日（一八〇一年八月九日）岡本村（南房総市富浦町）朝六ツ二・三分頃 大地震の地震記録は他に無いか。

3. 上宮田での地震とその前後の関東での地震と房総の岡本村での地震との関連性の有無。

4. 文化九年三月二十日（一八一二一年五月一日）山川湊・武雄で共通の大地震の震央はどこになるのか、震央が不明である。

5. 伊能忠敬には直接関係は無いが文化九年三月十日（一八一二一年四月二十一日）の高知、佐賀、因幡での各大地震は同一時刻のものであるのか。三月二十日の山川湊で遭遇の地震と同様に鹿児島近辺の陸上では有感地震であったのか。

6. 文化九年三月十日の佐賀、高知、因幡の地震と三月二十日の山川湊、武雄の両地震の関連性の有無。

(6) 閑話休題

ところで、今回の中国の四川省の地震の現地では地震の前に墓蛙が一斉に移動したとの話がインターネットで流れていたと伝えられる。

二〇〇七年三月二十五日の能登半島沖地震の前夜、佐渡島小木での調査行で墓蛙が二十四ぐらいであったろうか、道路を横断しているのに出くわした。民宿で聞くと、「雨も降ったし、墓蛙の开始出现でしょう」とのことであった。冬眠明け頃の墓蛙は雨の夜に群れを為して移動する習性があるのでしょうか。それとも能登半島の地震と関係があるのででしょうか。どなたかご存知の方はご意見をお寄せください。

（つじもと もとひろ・日本国際地図学会会員）

研究レポート『伊能忠敬』(三)

伊能忠敬の測量と私の実験

石谷 春香

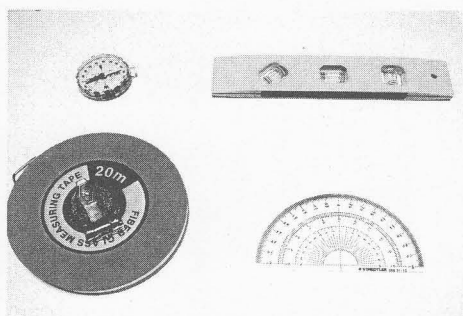
第四章 伊能忠敬の測量と私の実験(つづき)

四 地図の作成

伊能忠敬のように実際に測量して地図を作ってみます。広い地図を作るのは大変なので、私が小学校のときにかよっていた学校の地図を作ります。

《用意する物》

水平器 分度器 画用紙
方位磁石(コンパス) 巻尺



井田小学校正門

私の通っていた井田小学校は、だいたい四角形です。

私の家に近い角の所から測量します。

初めに角から学校がどのくらい北の方向からずれているかを測ります。

学校にそって画用紙を置き、方位磁石を使って角度を測ります。

(図1)・・・角度A

次に西門まで巻尺で測量します。

(図2)・・・①

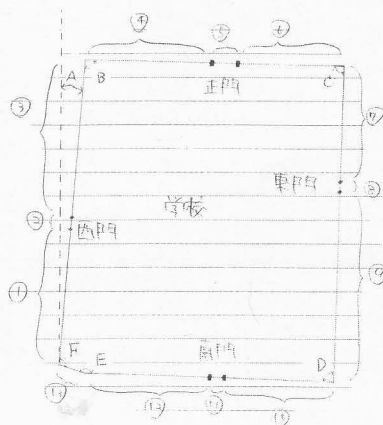
西門の幅を測量します。・・・②

西門から角まで測量。・・・③

角で学校の角度を測ります。

(図3)・・・角度B

角から正門まで(④)と、正門の幅(⑤)と正門



全体図

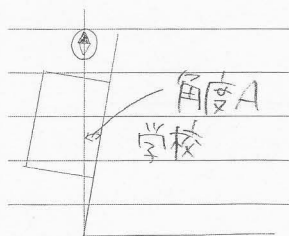


図1

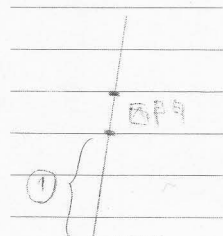


図2

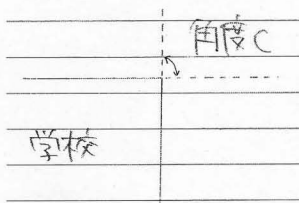


図5

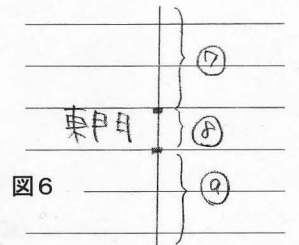


図6

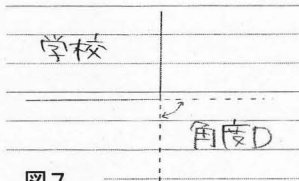


図7

角から南門まで(10)と、南門の幅(11)と南門から角まで(12)、

角のところの角度を測量(図7)・・・角度D

角から東門まで(7)と、東門の幅(8)と、東門から角までを測量(図6)

角から東門まで

角のところの角度を測量(図5)・・・角度C

から角まで(6)を測量(図4)

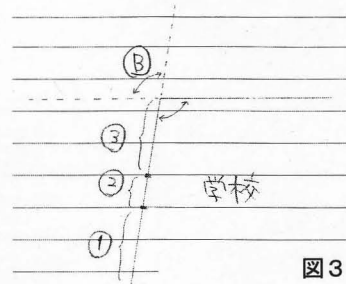


図3

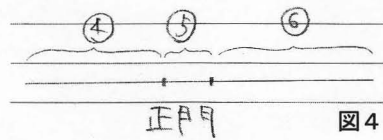


図4

<距離>

1	5,893 cm
2	495 cm
3	6,670 cm
4	5,385 cm
5	990 cm
6	4,464 cm
7	4,935 cm
8	365 cm
9	8,066 cm
10	4,597 cm
11	503 cm
12	5,286 cm
13	1,083 cm

<角度>

A	5°
B	93°
C	90°
D	90°
E	163°
F	102°

【測量の結果】

角から角まで(13)を測量。
二か所の交わっているところの角度E・角度Fを測量(図8)
これで小学校を一周したことになります。

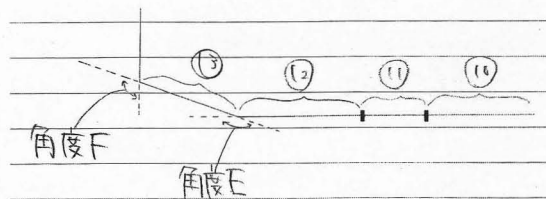


図8

次に測量の結果をもとに地図を作ります。

実際の距離の三〇mが地図上で二八・五cmの地図を作ります。
実際の測量の結果を地図上の距離に直します。

【地図上の距離】

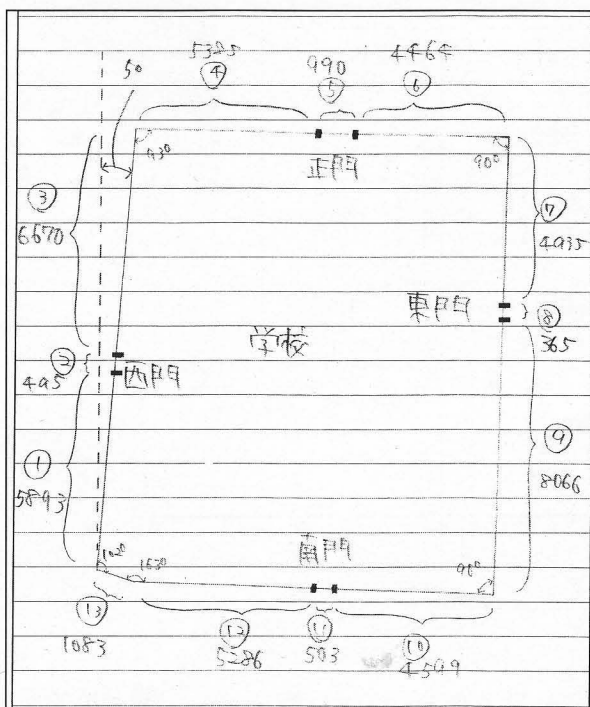
<距離の計算>

- 1 $5,893 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 55.9835 \text{ cm}$
- 2 $495 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 4.7025 \text{ cm}$
- 3 $6,670 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 63.365 \text{ cm}$
- 4 $5,385 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 51.1575 \text{ cm}$
- 5 $990 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 9.405 \text{ cm}$
- 6 $4,464 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 42.405 \text{ cm}$
- 7 $4,935 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 46.8825 \text{ cm}$
- 8 $365 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 3.4675 \text{ cm}$
- 9 $8,066 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 76.627 \text{ cm}$
- 10 $4,597 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 43.6715 \text{ cm}$
- 11 $503 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 4.7785 \text{ cm}$
- 12 $5,286 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 50.217 \text{ cm}$
- 13 $1,083 \text{ cm} \times 28.5 \text{ cm} \div 3,000 \text{ cm} = 10.2885 \text{ cm}$

角度は地図上でも同じものです。

そして作ったのが次の地図です。地図で比較すると、ほとんど同じです。

【私が作った地図の下書】



しかし！

地図と私の地図を重ねてみました。

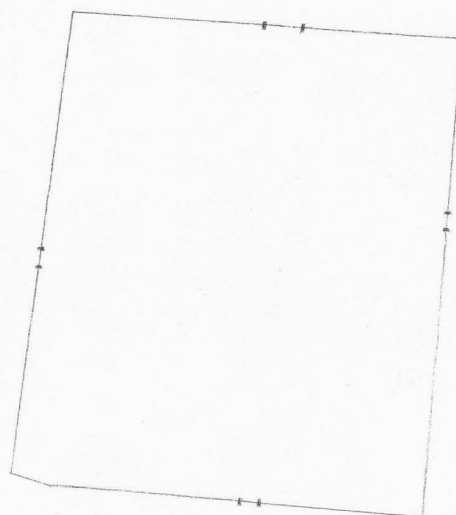
すると、ずれているのです。

なんででしょうか？

最初の測量したスタートの地点を合わせて紙をずらすと、ぴったり一致します。

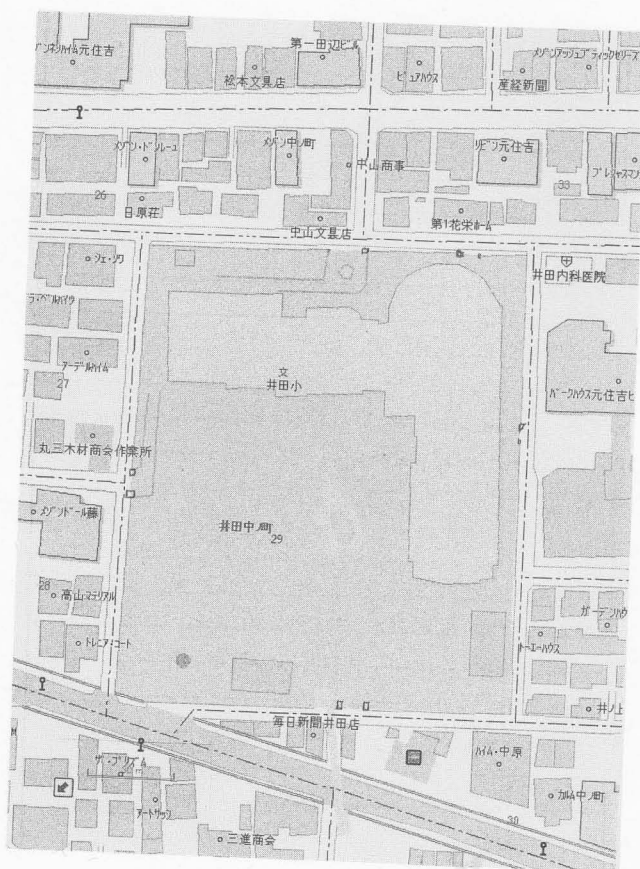
つまり最初に測った角度Aがずれていたのです。

測量はほんの少しのずれでも、
大きく影響してしまいます。
やはり難しいです。



つまり最初に測った角度 Δ がずれていたのです。
それから門もずれています。
しかし私は実際に巻き尺で正確に測量したので、
門の位置は私のほうが正確だと思います。

完成した私の測量による地図



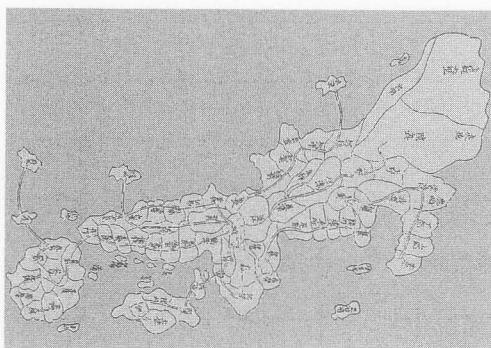
インターネットの goo 地図

第五章 伊能忠敬の地図

一 それまでの日本地図

日本最古の地図は行基という僧が一三〇〇年ほど前にえがいた「行基図」です。それぞれの国の形をならべて地図にしたものです。

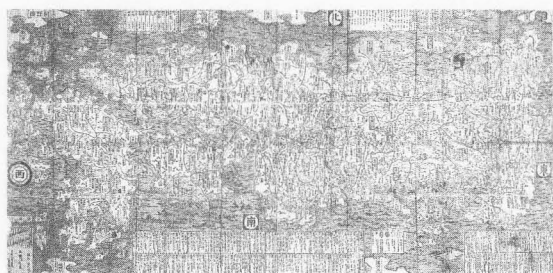
江戸時代には測量の技術はかなり進んできました。藩の大名は農民から年貢をとりたてるためにも領地の田畑をきちんと測量しなければなりません。幕府もそれぞれの大名の土地の大きさや地名などを知っておく必要がありました。そこで幕府はそれぞれの藩の情報をえるために四回にわたって国絵図を作らせました。縮尺は一里（約四km）を六寸（約一八cm）でえがくようにきめました。このように縮尺をきめ



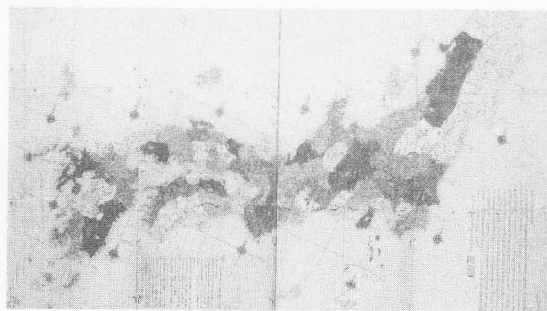
行基図



正保国絵図



「大日本国絵図」(流宣図)

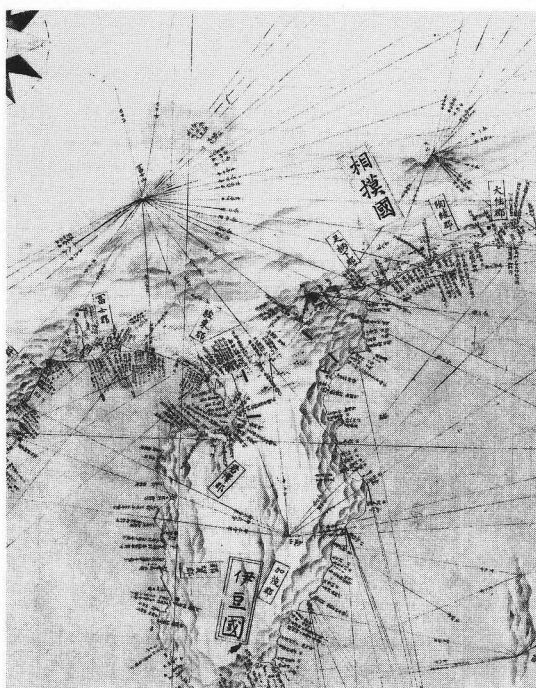


「改正日本輿地路程全図」(赤水図)

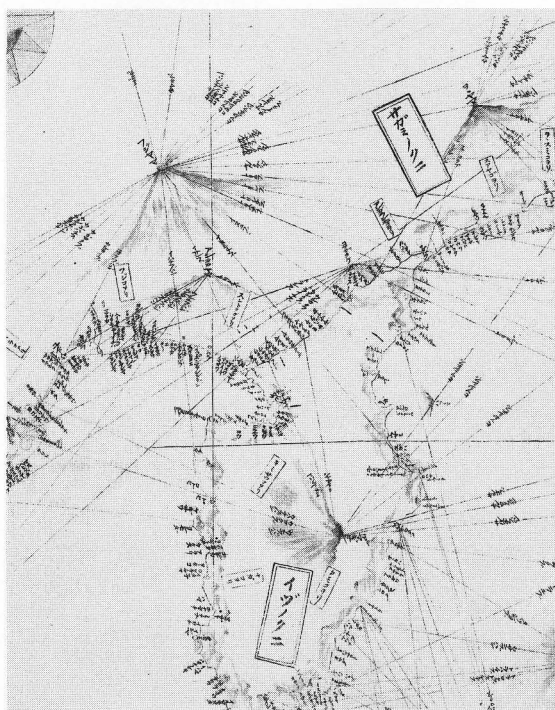
てつくられた地図を、当時は分間図（ぶんけんず）とよんでいました。一六四四年（正保元年）幕府は日本全国の藩に命じて国絵図を提出させました。「正保国絵図」が完成したのはそれから一〇年後のことです。江戸時代を代表する浮世絵師の石川流宣も「大日本国絵図」をえがきました。一七九九年（安永八年）長久保赤水が「改正日本輿地路程全図」をつくりました。この地図には緯度と経度の線がえがかれていますが、国絵図をはじめさまざまな地図をみて作りましたが全国に渡って測量してつくった実測図ではありません。伊能忠敬が測量をはじめ二二〇年ほど前の地図です。

二 伊能図

長久保赤水の「改正日本輿地路程全図」がつくられてから四二年後の一八二一年（文政四年）に伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図」が完成しました。これは大図二四枚、中図八枚、小図三枚からなります。それぞれの地図の縦の長さが約一七〇cmもあるので、北から南まで七mもの巨大な地図になります。伊能図は今の日本地図とほとんどかわりがないほど正確なものです。地図は国指定の重要文化財になっています。大図の縮尺は三六〇〇〇分の一、中図は大図の六分の一で縮尺は二二六〇〇〇分の一、小図は中図の二分の一で縮尺は四三二〇〇分の一です。幕府に届けられた伊能図は「正本」とよばれています。



伊能図（伊豆）



カナ書き伊能図（伊豆）

残念なことにこれらはすべて失われてしまっています。伊能家のひかえの地図は「副本」とよばれています。江戸時代に手書きで複製されたものは「写本」というように区別されています。このため同じ伊能図でもさまざまな種類に地図があることになります。それから伊能図には奄美大島や沖縄は測量していないのでのっぺいしてます。同じ場所の伊能図でもいろいろなものがあります。色が違っていたり、地名を漢字やカタカナで書いたものがあります。

三 地図の作り方

①測量した記録はその日のうちに野帳という帳面にきちんと整理します。そのとき一人で測った距離や方向に違いがあればその平均をとりました。坂の距離は「割田八線対数表」を使って地図で表わす距離に修正します。

②野帳の記録をもとに下図を作ります。下図では一〇町（一〇九二m）に対して一寸（約三cm）の割合で縮小し、記録どおりの方角の角度で測線をひきます。下図はそのまま大図の大きさです。

③つぎに天体観測の結果をもとに、さらに測線を正確にしていきますが、そのままでは大きすぎるので中図でいどの大きさに縮小して必要な修正をおこないます。

④下図が完成したら、下図を地図にする用紙の上において測線の折れるところ（梵天を立てた地点）に針をさして小さな穴をあけます。何枚か重ねておいて同時に針穴をつけておきます。地図用紙の針穴を朱



伊能図の地図記号

色の墨で線をひきつないでいくと測線だけの地図になります。重ねた紙も針穴をたどれば同じ地図が何枚かつくれます。

⑤測量した現地スケッチした「あら絵図」という風景画をもとに、海岸の様子、野山などの風景、建造物などの絵を美しく書きこみます。また現地で調べた地名も書きいれます。

⑥地図の記号を決めて小さな印をつくり、それらを所在地にを押します。「地図合印」といいます。

⑦地形がくわしく測量できなかったところは測線が切れています。そこには「測量できず」と記入しました。

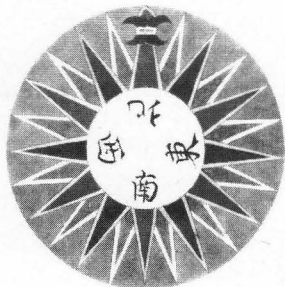
四 伊能図の地図記号

伊能図には「地図合印（あいじるし）」という地図の記号がついているものがあります。国名、郡界、駅町、港、方位線、海と川、郡名、城、神社、道路、天体観測地、田や畑、国境、陣屋、寺、緯度や経度、山、砂浜などの記号があります。

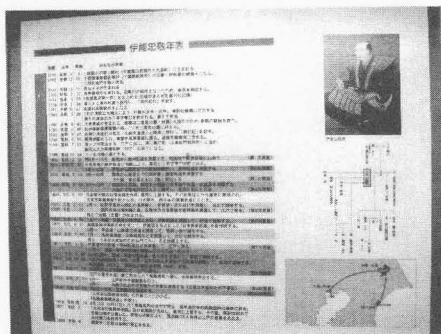
☆印は伊能隊が天体観測をした場所です。伊能図の地図の位置を合わせるために「コンパスローズ」といわれる接合記号もあります。

五 「くらしと測量・地図」展

六月三日は測量の日です。「測量法」が昭和二十四年三月三日に制定されたことによります。六月五日から三日間、新宿で「くらしと測量・地図」展が開かれたので見学に行きました。場所は新宿駅西口広場イベントコーナーです。夜六時こ



コンパスローズ



上：伊能忠敬の年表 下：測量機械



ろ行きましたが、JR新宿駅はものすごい人です。改札を出て少しくと会場があります。入口のところパンプレットが入っている青い袋をもらいました。中を見るといろいろなパンプレットや立体に見える地図などが入っていました。奥に行くと床に伊能図がありました。伊能図の上にとうめいのビニールがひかれていますので歩くことができます。とても大きな地図です。関東地方が展示されていました。見学している人もたくさんいました。鎌倉の八幡宮や伊能忠敬が測量をスタートした富岡八幡宮もありました。壁には伊能忠敬の年表や測量機械が書かれていました。それから立体に見える大きな地図も伊能図のように床にありました。青と赤のメガネをかけて見ると富士山などが立体にみえます。測量に使う機械もあります。望遠鏡のようなものを見せてもらいました。中を見ると遠くのものがよく見えます。そして、

そこにいた人が親切に教えてくれました。その機械は遠くのものを見るだけでなく、リーダーでその距離と角度を知ることができるそうです。実際に遠くにある柱までの距離をかんたんに行うことができました。測量の機械のパンプレットと記念品をもらいました。帰りにアンケートをしたら日本地図のパズルがもらえました。新宿駅は本当にすごい人です。



現代の測量機械

六 変化する日本

伊能図ができた二〇〇年前と、今の日本の地形や海岸線とはずいぶん変わったところがあります。秋田県の大湯では地震によって入り江が隆起して陸地になってしまったり、鹿児島県の桜島は一九一四年（大正三年）の大噴火でつもった溶岩で大隅半島と地続きとなりました。東京湾では埋め立てがすすんで、忠敬が測量したところとまるで違った海岸線となってしまいました。お台場にある、東京みなと館で埋め立ての様子を知ることができます。伊能図は二〇〇年前の日本列島のようなす伝えてくれる貴重な資料です。

(いしやはるか・文教大学付属中学校三年)

伊能忠敬と米沢街道（二）

松宮輝明

伊能忠敬と大塩村の塩井

旧暦七月二日塩川を六ツ後（午前六時）に出立し、下小出村、上利根川村、宮の目村、中ノ目村（塩川村）。舞田村熊倉宿に五ツ半（午前九時）着、天氣が良くなる。四ツ頃（午前一〇時）に立つ。出口に大塩川あり。昼休み（昼食）、高柳村、館村、関谷村（塩川村）、樟村（北塩原村）を通り八ツ前（午後二時）大塩村に着いた。止宿は穴沢源吉と云う芦名一族の係累で旧家なり。谷合に沸井戸があり釜六、七ツで塩を作る家があり。塩師の話では一釜に塩水二石（一石は約一八〇リットル）を入れ、五釜に一〇石（一八〇リットル）の水を入れると塩五斗（九〇リットル）が得られると云う。大塩村は石高千石斗。家百五十軒余。郡役所の物書き服部善内見回りに来る。翌朝も同じく見舞いに来る。大塩入口に亀甲坂と云あり。左右石亀甲なり。伊能忠敬は大塩村で産出する山塩について『その塩は甚白く味は甘鹹である。塩は会津侯の用意で売買はせず。』と記している。

北塩原村商工会の経営指導員・須藤仁一氏に大塩村を案内して頂いた。「本村の大塩温泉から湧き出す塩井より塩水を汲み上げ塩を取っております。現在は村起こし事業として温泉水を煮詰め山塩を作っております。温泉は現在五軒あり、温泉水は塩分を含んでおり赤い色をしております。四〇度を越える温水です。穴沢源吉の子孫の方は源七氏でその長男が健史氏と思われまます。訪ねてみて下さい。」と住宅地図を用意して下さい。検断穴沢源吉宅は高橋橋の麓にあった。伊能忠敬が泊まったことを話すと健史氏は「初めて知りました。大変名誉な

ことです。塩は第二次大戦中まで取っていました。子供の時の記憶ですが、自宅の前を流れる大塩川に塩井があり、ここから湧き出す塩水を煮詰め塩作りをしていたことを覚えております」と来訪を歓待して下さい。

文化六年（一八〇九）の『新編会津風土記』によると、「穴沢源吉、この村の検断にて中島美濃某が後なり系図によると美濃は其の先鎌倉幕府和田義盛の出、建保年中新左衛門常盛が子幸若三歳になるを乳母抱いて家難をさけ、会津に來り成長して中島鞆負義仲と称し、大塩村の地頭となる。美濃は其八世の孫なりとぞ、子なかりしゆえ檜原の穴沢加賀信徳五男左馬信清と言うものを養子とす。左馬後の源左衛門貞利と称し伊達氏ここを襲いし時穴沢等と力を合わせ防守す、此ほとり其遺徒多し、檜原村の條下を参見すべし、芦名氏滅て後源左衛門上杉氏に仕え氏を穴沢と称す源吉貞英に至るまで九代なりと言う。」と記している。伊能忠敬は房総九十九里の生まれである。筆海の塩と山の塩を比べ興味を持ち丹念に調べ味わったのであろう。筆者も大塩村の甘みのある山塩を口に含みながら遠い昔にタイムスリップした。



穴沢氏一族の墓（檜原五輪の塔）

『新編会津風土記』の大塩村の塩井

『新編会津風土記』に「村中に塩井あり。故名けりと云、府城の北に当たり行程六里 家数八十八軒、東西六町 南北三十五間 大塩川を挟み山間にあり、米沢街道駅所にて村中に官より命じられる捷條目の制札（高札場）あり、塩井二 村中大塩川の北大橋の東西にあり、東ノ井筒周一丈三尺（約三・九メートル）、西ノ井筒周一丈五尺（約四・六メートル）、共に井戸の深一丈（約三メートル）余、梁盆塩井の類なり、相伝で弘仁三年（八一二年）空海この村に来て老婆の家に宿し、塩の欠きを患うを見て、これが為に護摩を修すること十七日、塩水岩中より湧き出すと言う、今も塩を焼いて生業とするものあり。西行が詠めるなりとて二首の歌を伝ふ。

海士もなく 浦ならずして 陸奥の山かつのくむ大塩のさと
浦遠きこの山里に いつよりかたえず今まで 塩やみちのく

江戸中期の地理学者古川古松軒も天明八年（一七八八）幕府の公の巡見役に随行して、出羽・陸奥及び松前・蝦夷地の境まで視察して見聞録『東遊雜記』を書き表した。古松軒は大塩村の所在を詳しく説明し、自分が立ち寄れなかったことを残念がっている。太田蜀山人は『半日間和』で、この塩は珍しく貴重なもので会津守護から幕府に献上されたと述べている。『新編会津風土記』には老婆屋敷跡について、「村中大橋の南側にあり、農夫ここに居る。この家に空海成り雛が像を安置、手が像は空海の作という。また、村西一町、米沢街道の側には、空海の腰掛石もあると伝えられる。亀甲坂は村より未申の方五町にあり、米沢に通る会合街道なり、此地一町余の中に石理折れ亀甲のごとき文をなすもの多いし故名付けし言う。」と記している。大塩川に

ついて「上流を小塩川と言う、檜原村の境内より来り、北より南に注ぎ西に折れ村中を経て未申の方に流れること凡二里二十町計、上川前村の南をすぎ樟村の界に入る。怪石きそい秀で水勢端急なり。」と記している。大塩宿検断穴沢家屋敷跡の、向かって右側（東側）山中に温泉神社がある。

その登り口に文化八年（一八一二）の已待供養塔には「右ハいなわしろ道、左ハよねざわ道」と刻まれている。米沢街道の大塩村より萱峠（大塩峠）の間には会津藩によって植えられた赤松並木が十数本残っている。萱峠付近の山々は塩をつくるために大量の樹木が伐採され一面萱が密集する山肌となってしまった。萱峠には茶店があり、この茶屋は昭和二〇年ころまで営業していた。大塩の一里塚は大塩宿の北、坂を上ったところにある。

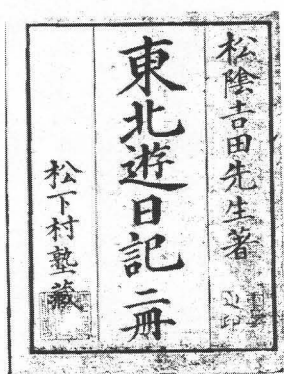


復元された大塩村の塩井

吉田松陰と米沢街道の旅

幕末維新期に、米沢街道を長州藩の尊王攘夷の志士・吉田松陰が旅をした。二二歳の松陰の東北遊歴は嘉永四年（一八五二）旧暦十二月十四日から嘉永五（一八五三）年四月五日までである。江戸を立ち、水戸から白河・会津若松・新潟・佐渡・庄内・本庄・久保田（秋田）と經由して、日本海側を碇ヶ関に出て弘前・小泊へ至り津軽三厓に着いた。帰路は奥州街道を南下し盛岡・石巻・仙台・米沢・会津に入り南山通りを通じて江戸に戻った。

松陰は嘉永五（一八五二）年旧暦三月二七日米沢を立ち、網木から檜原峠を経て大塩村に泊る。松陰『東北遊日記』によると（原文）「檜原嶺々上奥州界也。下嶺則檜原駅也。山中多出椀皿材。樹名謂不奈、仮填以撫字。造椀操為生者。山間自為部落。是謂集小屋々々云。嶺上望磐梯山。即向至会津。勢至堂所望也。宿大潮（大塩）。檜原大潮之間二里余。亦皆峻坂。而坂上残雪尚多。仙台白石。桃桜大半飄零。新緑陰々。而此間桜花盛開。而桃未開。樹葉夫新。滑津以往往來。嚴未生。多用濁活（うど）為羹（煮物の意）。大潮有塩井二。地中湧出。以手試之。則温泉試之千日。則誠。而其色赤黃。每年四月至九月煎之。率得六百苞。苞容（藁などで包む）四斗二升（二〇ハリットル）。但以費薪多。不能常煎々。此日行程九里。八日発駅。至熊倉田此始為平地。至塩川。有二皆架橋。川発源迄猪苗代湖水。流入津川。至若松。」と記している。松陰日記の中で檜原村・大塩村について檜原村はブナ材を材料として木地師がお椀



吉田松陰「旅日記」

皿材を多く産出していること、檜原と大塩の間は険しい坂道で、坂の上に雪が多く残っていたこと、そして、大塩村には塩の井戸が二箇所あり塩水が地中から湧き出していること。温泉水は赤黄色をしていて毎年四月から九月まで薪を用い煮詰めて作ること。収穫量は六〇〇包で、一包は四斗二升である。この日は三六キロ歩いたことを記している。この時代檜原・早稲沢・細野で産出された木地は総て会津領の小荒井・塚原・清治袋・村松新田、太郎丸など喜多方地方の塗師のもとに出されたと、「喜多方漆器業の歩み」に記録されている。松陰の東北遊歴は藩の許可なく東北の旅に出、多くの識者に会ったことが脱藩とみなされ帰国を命じられた。松陰が大塩村に滞在したのは嘉永五年のことである。翌年嘉永六（一八五三）年六月に浦賀に黒船が来航し国中が大騒ぎとなる。安政元年（一八五四）深夜伊豆、下田沖に停泊していたペリー提督のアメリカ艦隊を目標して小舟で乗り出す二人の若者がいた。松陰と金子重之助であった。松陰は「下田踏海事件」により幽閉となり、その後『安政の大獄』で死罪となる。この偉大な思想家にもつとゆつくりとした時間を与えてやりたかったとの思いを強く抱いた。

福島県内の山塩

伊能忠敬や吉田松陰の大塩村での塩井の記録から、福島県内の山塩はどのように生産されていたのか。『たばこと塩の博物館』学芸員高梨浩樹氏に伺った。高梨氏は「日本の内陸製塩として『温泉製塩』が知られている。特に福島県会津地方を中心に山が多く、新潟県、栃木県にまたがる地域には温泉製塩の記録がある。南西会津地方、南会津郡伊北村（南会津郡只見町）では僅かではあるが、明治末まで塩泉から製塩していた。温泉水を何回も砂にまき、乾燥させて鹼砂を得、それ

を溶出して鹼水（濃度の濃い塩水）を作り、煎じて結晶を取り出していた。会津の西方十八里の塩沢村（南会津郡只見町塩沢）には『塵塚物語』に塩井の場所、数、大きさとともに、塩焼小屋六軒、村民が農業の合間に製塩していたこと、他の村まで供給していたこと、味が軽く白い塩だったことが記載されている。福島県史の『津川廻り御囲塩駄送人夫代御免願』によると従来から大塩組十一ヶ村と黒谷組の地域では、峠越で運ばれた尾道塩と、地塩（塩沢で生まれた山塩）だけで需要が賄われていたこと、塩沢産の山塩の供給圏が村外（奥只見大塩十一ヶ村）に広がっていたことが読みとれる。」

『塩専売史』の明治三六年の塩生産地一覧によると「南会津郡伊北村、塩田二畝五歩、釜数五、製塩場数一、塩生産高十八石」との記録がある。伊北郡大塩（沼郡金山町大塩）でも近世には製塩が行われた記録がある。『倭訓栞』に記すところの伊北郡大塩とは『塵塚物語』に登場する塩沢村のことであろうと思われる。明治来まで製塩が行われ、『製塩専史』には「生産高が十八石（明治三六年）」との記録がある。塩沢村の塩は、『新編会津風土記』で塩沢村山中塩沢川岸の洞窟から塩水が噴出し、塩焼小屋六軒もあり、村人は塩を造り隣の村まで塩を売り歩いたと言う。この製塩は明治末期まで続き、明治三六年の主計調査報告には生産高十八石と記載されている。北会津地方熱塩加納村（福島県耶麻郡熱塩加納村）は第二次大戦末期、陸、海軍が製塩した。陸軍は塩泉直煮、海軍が枝条架濃縮を行った後、煎したと言われている。耶麻郡の大塩村は第二次大戦末期、陸、海軍が製塩。陸軍が温泉直煮。海軍は枝条架濃縮を行った後煎じた。藩政時代の製塩は、藩の指示によるものであったが、藩内の需要を満たすもので、村民の需要も総て賄えたようであり、「地元の塩」で塩適応できていた希有な例と言える。特に価格の面に例がないのではないのか。明治初頭の製塩廃止後も、



『新編会津風土記』に掲載されている大塩村の塩井

塩湯を樽で持ち帰るという形で脈々と温泉利用が続いていたと思われる。耶麻郡塩川町塩川は近世に製塩が行われた記録がある。『塵塚物語』には弘法大師が湧き出した伝説が記載されている。」と話された。

伊能測量隊大塩峠を行く

旧暦七月三日伊能測量隊は大塩村を出立する。『測量日記』には「七月三日朝霧深し、五ツ前（午前六時三〇分前）大塩を出立、一里四丁二〇間、檜原宿境に至る。これより一里四丁四〇間、合二里九丁、檜原宿（会津領）四ツ半後（午前一〇時三〇分）に着く。此の日兩駅の間山道に而、佐原より湯殿山参詣の者に出逢。佐原に書簡を遣わす。測量者は九ツ後（午後十二時）に着く。服部善内、止宿に見廻に来る。

兩駅宿の間山中に而、峠谷合、又大塩川流に添、左右共高山多し。此の村に溪間に而田畑なし。若松城下へ梶他挽物の下地をなして家業とす。一同家作よし。泊屋も余程あり。止宿問屋喜兵衛。」と記している。

伊能忠敬測量隊は大塩峠（別名萱峠、茶店があった）、蘭（あららぎ）峠の難所を越えて測量を続けてゆく。途中伊能忠敬の実家のある佐原より山形の湯殿山詣での一行に出会い、書簡を届けるように遣わした。忠敬はどこでこの書簡を同郷の者に託したのだろうか。大塩峠には茶店があった。この茶店で一休みし湯殿山参りをした佐原の顔見知りの者に、筆立を取り出し、「元気で測量を続けている。家業に怠りがないよう。」と一筆したため書き送ったものと思われる。この書簡について、伊能忠敬記念館の青木氏は「書簡を探しましたが、現在未発見です。」との返答だった。

蘭峠は分水嶺で大塩川と檜原川に分かれる。萱峠を下ると大塩川にかかる境橋がある。この橋は大塩村と檜原村の境界をなし、境界を北に進と、中ノ七里の手前に中ノ七里の一里塚跡があった。この一里塚

は昭和五三年頃、林道工事のため二基とも破壊された。『新編会津風土記』によると「蘭峠には、深さ一間径八尺余の石窟があり昔山賊がここに隠れ、往来の者を脅し所なりとぞ。この辺り谷深く極めて幽玄なり。されば山に沿い岩をつたえて斜めに板橋を渡し、経路を通す。故に岩弗と名が付く、この辺にて時々鷄声を聞くとあり、ここより西の方数町に一里塚あり、檜原村は昔は檜原谷地と言う。四方に大山峠があり朝夕日光を隠し霜雪早く降り風氣温が低く、境内は広いけれども茅原で不毛の地である。村民は自ら木地を引き望陀の皮を剥ぎ、あるいは旅店をもうけ駄馬を追って生計をなす。それゆえ歳入常額の地にて租税丁役なく村と称すれども諸組に属さず。耶麻郡に隸するのみなり。家数は五九軒出羽国

米沢に通る街道にある。

村中に官より令せられる掟條目の制札（高札場）を掲げる。」と記してい

る。伊能測量隊は檜原宿の間屋嘉兵衛宅に泊った。ここは若松城下に漆梶生地を作っている家であった。「一同宿よし」の記述がある。檜原村は江戸時代に課税が無く住民の生活は豊かであったのだろうか。それとも雪深い山里では太い柱の家作であったのだろうか。



檜原村検断屋敷（現会津米沢街道歴史館）

伊能測量隊檜原峠を行く

旧暦七月四日朝曇り、六ツ半(午前七時)檜原出発、この朝も会津藩の物書き服部善内泊宿・問屋嘉兵衛宅へ見回りに来る。止宿・問屋嘉兵衛宅について北塩原村商工会の須藤仁一氏に調べていただいた。

「檜原村は磐梯山の噴火後湖面の下に水没した。村には検断の松本家と問屋があった。検断屋敷は水没前に檜原村の金山に移築し現在は北塩原村の歴史史料館として、昔の姿をとどめている。問屋嘉兵衛の子孫の方は須賀川に移られたと聞いている。」と話された。伊能測量隊は問屋嘉兵衛宅を出発し、金山より大川の川沿いを北上した。道幅一間ほどの米沢街道には鷹巢の一里塚、会津藩の口留番所がある。『測量日記』には「一里十九丁、奥州、羽州の境則檜原峠に至る。ここまでは問屋奥州耶麻郡なり。服部善内並びに桧原村宿御役人送り来る。これより則出羽国置賜郡にて米沢領なり。

同宿網木宿、役人も檜原峠領界迄出迎え、網木村(米沢領初)へ、四ツ半前(午前十一時)に着く」と記している。

筆者も檜原村金山より長井川沿い米沢街道を歩いてみた。金山は江戸時代に銀山があった。長井川の川岸には会津藩は人や物資の流れを監視した「口留番所」があった。街道の道幅は約一間鷹巢の一里塚を過ぎ、林道を進むと「史跡旧米沢街道檜原峠別」の標識が見えてくる。七〇メートル先が桧原峠になるが、街道には倒木が重なり、



史蹟 旧米沢街道桧原峠別

川水で道が分断され米沢藩との藩境塚のある桧原峠に行き着くことができなかった。伊能隊は檜原峠を越えて米沢、上山、新庄、秋田・青森へと測量を続ける。伊能測量隊は一日平均十二キロを徒歩で歩き測量をした。街道の距離は麻縄を使い正確に計った。朝早く出発し宿泊地ではただちに観測機器を設定し、夕食後星が出ると直ちに天体観測を始めた。三、七五四日の測量の旅の中で天体観測は八四〇日にもなった。夜遅くまでデータを整理し翌日の出発の準備にとりかかる。大変な苦労があったと思われる。伊能測量隊は北は蝦夷地(北海道)、東は伊豆七島、西は佐渡島、対馬、竹島、南は種子島、屋久島を測量し日本全図を完成させた。伊能忠敬は七三歳で没したが、五六歳より足掛け十七年かけ第一〇次測量まで行った。そのエネルギーに感服する。そして、五一冊の日記と多くの書簡を書き残した。平成に生きる我々は真面目に努力した先人の教えに学ぶ処が多いと思う。(了)

(まつみや てるあき あさかの学園大学講師・化学専攻・陶芸家)



辰砂窯変壺
松宮輝明氏作

忠敬墓碑銘・十七歳の書者―關研

植田 浩一

忠敬墓碑にかかわった人々

東京・東上野の源空寺の忠敬さんのお墓には、佐藤一斎が文をつくった立派な銘文が刻まれてある。この墓碑銘は、大谷亮吉『伊能忠敬』と保柳睦美『伊能忠敬の科学的業績』の二大名著に全文掲載されているし、本誌34号の見事な拓本によって紹介されているので、これらによって忠敬さんの業績の大体は知ることができる。その墓碑銘の最後尾の行には、

文政五年壬午嘉平月下澣淡海關研書

とある。

忠敬さんが亡くなったのは、文政元年四月十三日午後三時ごろだそうである。文政元年と書いたが、この年、文化十五年は四月二十二日になって文政と改元されたのだそうで、忠敬さんが亡くなったのは、文化十五年四月十三日と書くべきだったかもしれない。ただ、その死は秘せられていたし、喪が明けるのは当然、文政になってからだから、数えるのに便利な立年称元法によったまでである。

忠敬さんの死後も作業は続けられ、「大日本沿海輿地全図」が完成、文政四年（一八二二）七月十日に幕閣上覧、忠敬さんの死も公表され（同年九月四日）、墓碑銘の準備が始められたのが文政五年（一八二三）というわけで、忠敬死後四年が経っている。壬午（じんご）は文政五年の干支（えと）で、ミズノエ、ウマと読み、この干支は朝鮮、中国も共通である。嘉平月は十二月の異称で、師走、極月、臘月、晩冬な

どともいう。下澣は下旬ということ。澣の訓はアラフ、僧衣は十日毎に衣についた垢をあらう去ることから上澣は上旬、中旬は中澣という。淡海は近江のこと。琵琶湖はアワツウミであり、琵琶湖畔の大津を都とした天智天皇は淡海聖帝といわれた。關研は墓碑銘の第一行にある「一斎佐藤坦」の「爲文（文章をつくる）」した文に中国の白楽天の『立碑』という詩の中に「爲文彼何人（誰が書くんだ）」という句があり、文章をつくる時に、「爲文」という字句を使うものらしいを紙に書いた人。この場合は書丹（しよたん）石に丹（あか）で字を下書きすること）せずに、銘文を書いた紙を直接に石に貼りつけて字を彫ったものか。書丹した時は、書丹した人の名を書くのが普通である。

墓碑銘の最後のところは、

孝孫忠誨立

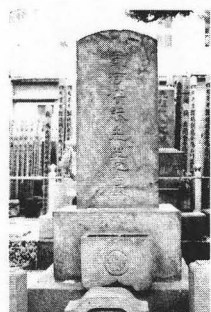
廣群鶴鐫

とある。

忠敬さんの長男・景敬は忠敬の第二次九州測量中の文化十年（一八一三）六月七日に四十七歳で亡くなっているので、文化三年（一八〇六）生れの景敬の子が、林大学頭（述斎）から忠誨（ただのり）の名を貰い、忠敬の仕事を嗣ぐことになる。忠敬さんの孫になるわけである。

その忠誨の日記の文政六年（一八二三）四月十四日の項（『伊能忠敬研究第38号』）に、

源空寺へ行く。祖父石碑出来立つ故に、源空寺へ御布施を上げる・・・



源空寺・伊能忠敬墓塔
三面に墓碑銘を刻む

とある。

いま源空寺墓地にある忠敬墓塔は、この時、文政六年四月十四日に立つたもので、忠敬さんの六周忌にあたる。忠敬さんの墓塔は、今は隣りに立っている先生の高橋至時（よしとき）のそれより大きい。「お目見え」以上の役職にあつた至時の墓より「お目見え」以下の役でしかなかった忠敬の墓の方が大きいことを寺僧が難じると、景保（至時の後嗣）は、「かまわん、忠敬さんのなしとげた仕事は、親父（至時のこと）のした事より大きいのだから」と、そのまゝ作業を続けさせたという。後にシーボルト事件で「存命候はば死罪（実際には判決が出る前に獄死していた）」となる高橋景保だが「国のためになることをした（未知の洋書を手入したいがため、代償として伊能図を渡した）」との信念は枉（ま）げなかったという。その景保の亡骸は、罪人として捨てられたらしく残っていない。いま源空寺墓地にある追悼碑は、開国後に許されて来日したシーボルトが景保を悼んで述べた言葉を勒（ろく）したもので、昭和十年に有志が立てたものだという。

廣群鶴は、徳川時代中期から明治、大正にかけ、代々、廣群鶴を名乗った字彫り石工で、赤坂の大久保公哀悼碑や、いま大田区の洗足池畔にある 南洲詩碑を彫るなど、維新の二大英傑の記念碑にかかわり盛業だったが、その後、いまま上野の谷中六丁目の一乗寺門前の駐車場はそのあと地という。鐫の音はセンだが、訓でホリと読ませたいのか

もしれない。鐫の代わりに鐫の字体を使っている場合もあった。

關研と岡啓次の謎

『忠誨日記』の文政六年（一八二三）一月三日



忠敬墓碑・正面拓本

の項（前の引用と同じ号）に、

・・・飛脚を以て佐藤氏へ差上候趣。又、佐藤へは御礼、且御肴代五百疋拜呈。右認候仁、岡啓次へ式百疋進上。・・・

とある。

江戸から佐原に帰っている忠誨に、江戸から、忠敬の墓碑銘の原稿が出来（しゅつたい）したと知らせがあり、飛脚でお礼を届ける。「佐藤」とあるは佐藤一斎のこと。「右」は忠敬墓碑銘の原稿のこと。これをメモ代りに日記に書き入れた。墓碑銘の原稿にはハッキリと「關研書」とあるのに、どうして忠誨は日記に「認（したため）候仁、岡啓次」と書き残したのか。關研と岡啓次―長い間の悩みのタネだった。ある日、フと気がついた。岡と關は似ている字だ。岡啓次とあるは關研の見誤（みあやまり）りではないか。早速『忠誨日記』の原文を保管する佐原の記念館に電話する。古文書に精（くわ）しい職員の話――

岡か關かはつきりとは分らないが、どちらかというと、關と書いたつもりかもしれない。その次の啓か研か、これもどちらも読める。最後の次はハッキリしている。

という。

『忠誨日記』は、小さな字で読みづらいものだそう。日記はもとも他人に読ませるものでなく、あとで本人が分ればよいものだから關研次と書いたのを岡啓次にとられても仕方ない。

岩波書店の『国書人名辞典』で検索すると、研↓藍梁、通称研次と辿れるし、『忠誨日記』に出てくる「岡啓次」なる人物は、忠誨が日記に「關研次」と書いたのを後人が見誤ったことは完全に解決した。

東河伊能君墓銘并叙

江都 一齊佐藤坦爲文

君諱忠敬字子齊伊能氏號東河稱三郎右衛門晚稱勘解由北總香取郡佐原村人本姓神保氏南總武射郡小堤村神保貞恒之第三子出冒伊能氏伊能氏世爲閭右族其先出於大和高市郡西田鄉大同中有諱景能者知北總香取郡大須賀莊居伊能村因以氏焉子孫蟬聯占其地至永祿中有諱景久者始徙佐原天正中爲居民開肆廬貿易君九世祖也高祖諱景利曾祖諱昌雄祖諱景慶考諱長由長由無子其配神保氏君之從祖姑也因丐君爲嗣長由不幸蚤歿產頗荒君既來嗣慨然以幹蠱爲志昕夕黽勉務儉素禁奢靡家衆百口以躬率先之天明三年關東大饑君爲發私儲賑貸鄉里施及旁近村落多所全活六年又饑救之如初地頭津田田州君並優賞之君好星曆至寬政六年委家事於子景敬躬獨來江都耑從事曆學當時所傳曆法君疑其

忠敬墓碑銘の文頭部分（第一面）

及度數譜行程記至文政元年齡七十有四罹病其四月十三日劇殆不起至
四年七月輿地全圖等成進呈以其九月四日歿官追賞其功賜廩米宅地
於痛忠誨以旌之君為人真率不修邊幅精力絕人每測量命下輒喜見顏
色不日而發乃躬歷險阻凌海濤奔走數十里風雨寒暑未嘗少沮喪何其
氣之邁而事之勤也哉所著有國郡晝夜時刻對數表紀源術并用法割圓
入線表紀源法地球測遠術問答凡若干卷皆藏於家君先配長由之女繼配
桑原氏皆先歿得三男二女昆季並殤仲子景敬嗣亦先歿孫忠誨嗣君之葬
在城北淺草源空寺東岡君之塋域從遺囑也忠誨以狀來請余銘乃畧叙之
為銘曰源深以遠流長以疏善積之厚慶則有餘叩天之閭極坤之輿瘴烟毒
霧不能為瘡祈寒暑雨不能為痛乃如之人能有幾與貞珉可泐跡則不渝
至政五年壬午嘉平月下澣淡海關研書 孝孫忠誨立 廣群鶴銘

忠敬墓碑銘の文末部分（第三面）

ここで忠誨の生涯について触れておくと、父景敬は先きに記したように文化十年（一八一三）、八歳の時に亡くし、母は文政元年（一八一八）六月十三日に、弟鉄之助も同年十一月二十五日に亡く、忠敬なきあと指導してくれた伯母の妙薫（忠敬の長女稲）も文政五年八月二十四日に亡く、文政九年六月六日に妻クニとの間に生まれた長女・テイが翌七月二十六日に早死にすると、本人も翌文政十年（一八二七）二月二十一日に二十二歳で病死、妻クニは生家に復縁。日本を实地測量するという大事業をなしとげた忠敬さんの血縁子孫はここに絶えた。約三十年後の安政年間に姻戚の男に嗣がせたのが現在の伊能家である。

英才・關研の事績

先きに引用した『国書人名辞典』によると、關研の出身地は「近江高島郡万木村」とある。会社の大先輩で、重役を退いてから、郷里の琵琶湖畔の町長を何期かつとめ、高齢で健在なことを聞いたことを思い出した。その名は万木（ゆるぎ）英一郎さんという。關研の出身地・万木村というのは、ユルギ村と読むのかもしれない。もしかしたら、万木英一郎さんの系累の方かもしれない。早速、問い合わせの手紙を出した。

何回かのやりとりは略すが、次のような貴重な地元情報を得た。

關藍梁 名は關研字は克精、藍梁又は湖西と號し晩に專靜と號す、通稱研次、青柳村大字青柳字東萬木の庄屋八右衛門の子なり。文化二年四月七日生る。九歳の時祖父宗善に従ひて京畿に遊ぶ。妙齡にして能書の譽あり。後江戸に遊び鹿兒島の教授兒島志堅に學び、志堅歿せしかば、文政五年三月林大學頭に師事し尋で昌平黌に入り、業大に進む。天保二年十月膳所侯世子の侍講となり、十一年十月同藩に仕へ、表小姓組となりて文學を典り、明年正月膳所へ移る。文

久二年五月特に進められて鎗奉行に班せらる。藍梁、才學多能、殊に詩及び書に長じ、名聲府下に囂しく朝野の子弟、贊を其門に執るもの多し。安政元年米艦來航の際林大學頭に從ひて應接の事に當り、書記に任ず、幕府銀若干を賜ひて其の勞を賞す。異數なり。時に清人羅森、提督ペルリに從つて米艦に在り、七律を賦して和を求む。藍梁席上和韻して之に酬ゆ。使命を終へて後、藩侯に見る所を建言し、開港貿易の爲め、國産を奨勵するの必要を説き即ち膳所町の園山^{別邸}に茶園を開く。文久二年閏八月十六日歿す、年五十八。江戸下谷西徳寺に葬り、墓碑に大學頭林昇の撰文を勒せり。藍梁人と爲り渾厚溫籍絶えて崖岸なく、少より學を嗜み詩に長し、書札を善くす、名聲一時に噪しく業を受けし者多かりき。著はす所駢題詩哀及遺稿若干卷あり。子機、維新後膳所に居り遵義堂に教授たりしが、廢藩の後東京に移れり。

（昭和四十七年増補『高島郡誌』）

【参考】關研の出身地略図



安曇川（あどかわ）は中江藤樹の出身地、伊能測量を推進した堀田正敦・摂津守は堅田（かただ）藩主だったし、穴太（あのう）は石工集団の出身地。

最初に出てくる大学頭は林述斎（第八代）、二回目の大学頭は述斎の四男復斎（第十一代）、三回目の大学頭林昇とあるは復斎の次子で二代。遵義堂は膳所（ぜぜ）藩の藩校、廃藩とは明治四年のことか。

十七歳で忠敬墓碑銘を書す

地元からの情報は、江戸に遊学する前から「能書の譽」があり文政五年（一八二二）三月からは林大学頭に師事したとある。この大学頭とは林述斎のことで、四歳下で莫逆の友である佐藤一斎に家塾のことは任（まか）せ、自分の方は官学の昌平坂学問所の拡充に努めた。述斎と一斎の友情は終生かわらずという。關研は一斎の指導も受けたはずである。關研の文化二年（一八〇五）生れということは、『国書人名辞典』記載の情報とも一致しているので、忠敬墓碑銘を書した時（文政五年末）には十七歳である。十七歳で、これだけの長文の銘を書せるとは、漢籍につぐ重要な教科である書道の、まことに英才といえる。

關研の更なる情報を求めて西徳寺に行ってみる。いまは京都・仏光寺の東京別院になっているそうで、西徳寺住職は京の本寺の部長として出張中。その在京都の住職と電話がつながる——大正十二年の大震災で寺は灰燼に帰し、その後復興。今あるのはすべて昭和三年以降のもの。留守僧に過去帳を見せられる。

法名不詳 文久二年

関 流木

八月十六日

研次

とある。

『高島郡誌』の伝える林大学頭（家禄三千五百石）撰文のついた藍梁の墓塔もない。この大学頭とは、ペリーとの日米交渉を纏めた林復斎が安政六年（一八五九）九月十七日に死去、その後を嗣いだ復斎の

次子・昇で、幕府瓦解で最後の大学頭となった。
西徳寺の資料では、關研の没年は、

過去帳（西徳寺）

文久二年八月十六日

高島郡誌

文久二年閏八月十六日

国書人名辞典

文久三年八月十六日

となっている。歴史を繙（ひもど）くと、会津藩主松平容保が京都守護職に任命されたのが文久二年閏八月一日とあるから、文久二年八月にはたしかに閏があつた。

關研と佐藤一斎

關研は若くから江戸に遊学、佐藤一斎の指導を受けた。一斎は安永元年（一七七二）生れだそうで、文化二年（一八〇五）生れの關研の三十三、年上になる。

一斎の墓所にお参りした。東京麻布・六本木交差点近くの深広寺というお寺で、本堂と庫裏と一斎の墓苑だけ。

私事にわたるが一斎は幕末の大学者というより身近かな先達だった。われわれの受験生時代、漢文は入試科目だったので、中学でも漢文教育に力をいれ、二・三年に『十八史略』、四年に頼山陽の『日本外史』、五年に一斎の『言志四録』が漢文の副読本だった。『言志録』は内容がむずかしく素通りが多かったが、現実には入試に出題されることがあり、悩みの種だった。後年、西郷隆盛の事績を取材するうち、彼が二度目に島流しになった沖永良部島には一斎の『言志録』だけを持参、拳々服膺（けんけんふくよう）につとめたと知った。

深広寺の一斎の墓塔は一きわ大きく二メートル高くらいあり、正面に「惟一先生佐藤府君之墓」とあり、左、背、右の三面にビッシリ銘

文が刻まれてある。府君とは敬称。銘文を拾い読みしていくと、一斎は安政六年（一八五九）九月二十四日亡（これは大学頭林復斎が亡くなった七日後である）。初婚片岡氏先歿、次阪本氏離縁、三婚中根氏、銘文の書は市河三鼎。三鼎は米庵の長女の子で米庵の嗣子。谷中・御殿坂の本行寺を探访した時、米庵寿藏碑（生前に建立する墓塔）があったことを思い出した。当代一の漢学者・一斎と貫名海屋、巻菱湖とともに幕末の三筆の一人とされる米庵の間では（両者とも安永年間の生れ）、墓誌の口約束があつたのではないか。「オレが死んだら、オマエ墓誌を頼むぞ」と。米庵寿藏碑（安政二年十月建立）の撰文を一斎、その一斎が安政六年に八十八歳で亡くなると、米庵はその一年前の安政五年七月十八日に八十歳で亡くなっているので、米庵の後継者の三鼎が一斎の墓誌を書するという図である。

一斎・研・群鶴

一斎の墓塔の右となりに中根氏の墓がある。源空寺の忠敬墓塔と同じくらいの大きさで、正面に「梅閨孺子中根氏之墓」とある。一斎後妻の中根庸の墓で、儒者の夫人は号の次に孺子のことばをそえるものらしい。左、背面の二面に刻まれてある三百字近い墓誌を拾い読みする——文化四年（一八〇七）、二十九歳で一斎の継配となり、先妻の子を含め三男十女を育て、一斎に四十六年、連れ添い、一斎より先に嘉永五年（一八五二）一月二十九日に亡くなる。開研は、この一斎の後妻に随分、世話になったんだらうなと思って、墓碑銘の最後の行を読むと、

嘉永五年壬子二月下澣 夫佐藤坦記 開研書 廣群鶴鐫

とあり、「夫佐藤坦記 開研書 廣群鶴鐫」に驚いた。忠敬墓碑銘と同じ、一斎・研・群鶴の三点セットに再会したわけである。数えて

みると、忠敬墓碑銘は文政五年（一八二二）の銘があつた。梅閨夫人銘は嘉永五年（一八五二）だから、この間、三十年となる。字彫りの群鶴の方は代々、同じ名義だそうだが、「爲文」の一斎が長寿なること（八十八歳で没）と書の研が若年だったこと（忠敬墓碑銘を書いたのは十七歳の時）から、こういうことになるのだろう。何年かぶりに会う三点セットの内、一番、なつかしかったのは開研だった。深広寺探访のかえりがけ、開研書の部分拓本をとった。（左掲）

彼の姓セキの字は、今の常用字体は関だが、本字は『高島郡誌』で使っている関で、研は忠敬墓碑銘を書いた十七歳の時も、三十年後に一斎夫人をおくる時も関という字体であつた。関は関の略字だそうである。

（うえだ こういち・元朝日新聞）



「開研書」の部分拓本
（麻布・深広寺 中根氏墓）



江戸時代の多摩を歩く

伊能忠敬測量隊の東京多摩地区測量(一)

佐久間 達夫

【編集部注】本稿は平成十九年十一月に『多摩のあゆみ』一二八号に掲載されたものです。多くの会員が関心をもつ東京多摩地区における測量行についての貴重な論文ですので、著者ならびに『多摩のあゆみ』発行者である財団法人たましん地域文化財団の許可を得て紹介いたします。佐久間氏とたましん文化財団のご厚意に厚くお礼申し上げます。なお、「伊能忠敬の略譜」の前半部分につきましては会員諸氏には既知の内容ですので省略させていただきます。

一 伊能忠敬の略譜

(前略) 武蔵国多摩郡には、江戸幕府にとって重要な街道である「甲州街道」「大山道・江戸道」「八王子道」があり、伊能測量隊にとっても精密な地図作製に「本州の太平洋側から日本海側までの横切り測量」が必要であったので文化八年(一八一、第七次測量)と、文化一三年(第九次測量)の二回に分けて測量している。

二 甲州街道の測量

甲州街道の測量は、第七次九州一回目測量の帰路、武蔵国小仏駅

(文化八年五月五日出生) から八王子宿、府中宿、下高井戸宿を経て、江戸内藤新宿へと測量する。

忠敬はその時の様子を「測量日記」に記している。以下、測量日記には適宜句読点・送り仮名を付した。固有名詞は原文のままである。

○第七次九州一回目、中山道、山陽道、中国内陸部、甲州街道測量・期間

文化六年(一八〇九)八月二十七日 江戸出生

文化八年(一八一)五月八日 江戸帰着

・測量隊員

伊能勘解由(忠敬)

坂部貞兵衛(天文方手付下役)

下河辺政五郎(天文方手付下役)

青木勝次郎(天文方手付下役)

永井甚左衛門(天文方手付下役)

内弟子/植田文助、梁田栄蔵、箱田良助

供侍/成田豊作、黒田藤吉、松井沢次

竿取/平助、長蔵

従者 五人

・伊能忠敬測量日記(佐久間達夫校訂)

文化八年五月五日武蔵国小仏駅出生

五月五日 曇天、先後手六ツ後小仏駅出生。後手我等下河辺・青木・

永井・長蔵、武州多摩郡伊奈助右衛門御代官所上長房村内小仏宿より

初、制札迄一丁二十七間。字播差、高尾山細道、上長房村内駒木野、

字新井、高尾山追分(高)印を残。駒木野駅制札迄二十四丁二十七間。

五丁五十四間、御関所。日小仏御関所、字小名次村、高尾山追分。伊

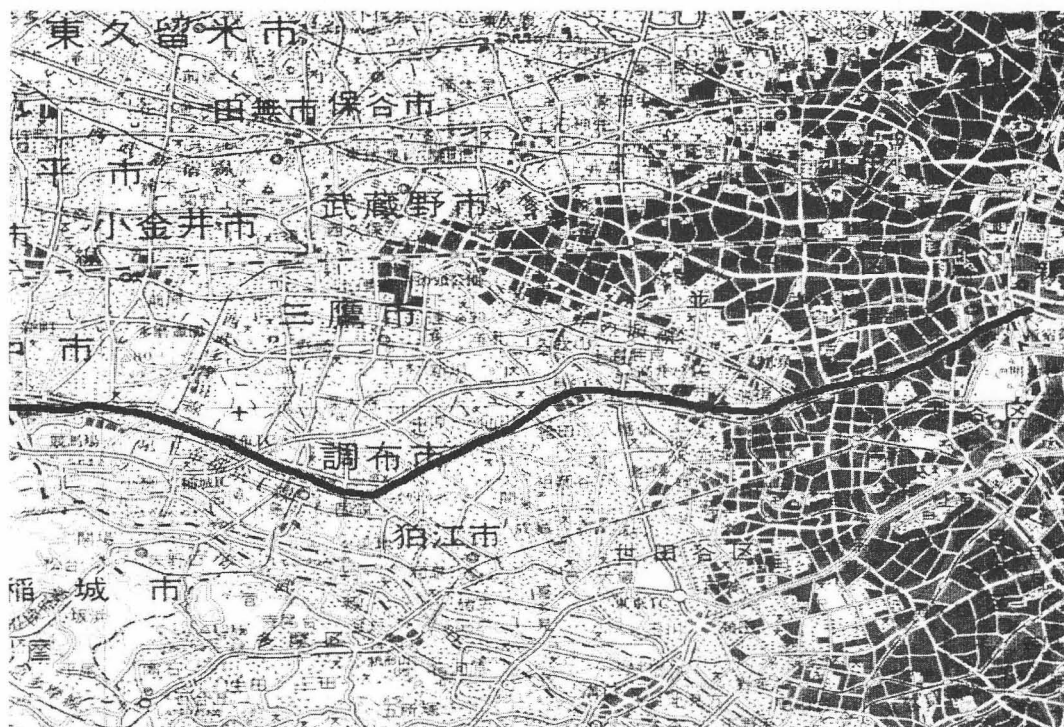
奈御代官所上欄田村字河原宿、字原宿、字新地。田安殿領長沢直治郎



だいにつぽんえんかいよ ち ぜん ず
 図1 大日本沿海輿地全図（伊能中図 重要文化財）の多摩周辺部
 （東京国立博物館蔵 Image: TNM Image Archives）

知行散田村字新地。伊奈御代官所八王子十五組内、本郷宿、千人町、八木宿、八幡宿、八日市場、日光街道追分、横山宿、相州川越追分制札前一里二十七丁八間四尺。制札より本陣まで百五間。横二十二間。二口メ外、横山宿・八日市湯宿一ヶ月代に駅。外に仕越新町限迄八丁三十間、合二里二十五丁三十二間四尺。先手坂部・梁田・上田・箱田・平助、小仏駅より無測にて上櫛田村へ行、高尾山を測る。高尾山有喜寺薬王院御朱印七十五石。本尊薬師、護摩堂、経堂、鐘楼、飯細大権現、本地不動明王、末社六ヶ所、唐銅五重塔、元亀元年北条氏康建立。中興破却江戸赤坂某再建。坊中十八院、山中に浄土院あり。余は山下に在。境内大本多し。仏法僧と云鳥啼と云。右寺の中門より測初、**高**印迄測繋ぐ。一十二丁二十間二尺。後手は九ツ前、先手は九ツ後八王子横山宿へ着。止宿本陣川口七郎兵衛、脇鯛屋勘治。八ツ半頃より雨。深更より大雨朝に至る。

同六日 朝先手七ツ半後出立。無程大雨。後手見合六ツ半頃八王子横山宿出立。後手我等青木・永井・梁田・平助。昨日測留新町限りより初。左 大沢右膳知行所元横山村、右建部六右衛門・高井但馬守知行子安村。久松忠治郎・前田繁之助知行所大和田村。川渡十二間、伊奈助右衛門・川崎平右衛門御代官所栗須新田・日野新田入会、川崎平右衛門御代官所日野宿、郷名日野本郷、二十五丁四十七間、先手の初繋ぐ。又日野宿**一**印より初、一ノ宮測る。伊奈助右衛門御代官所・志村文一郎知行所宮村・上田村、松平亀五郎知行所高幡村、新義真言宗御朱印三十石高幡山金剛寺、神保喜内知行所三沢村、同真言宗御朱印六石六斗八谷山医王寺、大久保矢九郎知行所上落川村、松平図書知行所下落川村、同真言宗御朱印六石清谷山真照寺、中山勘解由・桑島助右衛門・曾家七兵衛知行所一ノ宮村、一ノ宮社、御朱印十五石、祭



分の1地勢図「東京」平成10年発行に加筆）丸数字部分詳細図あり

神天下春命、社人新田主水・大田左門迄測る。一里十七丁十六間。先手坂部・下河辺・上田・箱田・長蔵。栗須新田・日野新田入会・日野宿界より初。牛頭天王御朱印十四石、別当新義真言宗土淵山普門寺。日野宿制札迄測る。二十六丁三十三間。同一宮街道○印まで三丁三間、字常安寺家一軒、玉川河原幅三百三間、内水二十九間舟渡。伊奈助右衛門御代官所柴崎村字下和田、立場中食年寄元右衛門、字角家二軒。川崎平右衛門代官所青柳村・石田新田入会、同上谷保村、御朱印十石臨濟宗谷保山南養寺、同上谷保村・下谷保村入会、天満宮御朱印三十石別当天台宗梅香山安樂寺、同四ツ谷村、同本宿村字小野宮、同屋敷分村、同府中番場宿字片町、御朱印十五石臨濟宗竜門出高安寺、番場駅本陣前迄測る。日野宿制札より二里九丁二十七間、合三里。先手九ツ頃、後手八ツ頃府中番場宿本町着、止宿本町本陣。東町、高橋三郎右衛門、坂（坂部）宿松屋忠治郎、下青永（下河辺・青木・永井）宿嶋屋鉄五郎。此夜大曇。

同七日 朝雨。先手六ツ、後手六ツ後府中本町雨中に出立。後手我等青木・永井・箱田・平助、多摩郡本町より初。惣社六所宮御朱印五百石。鎮座大巳貴命・素戔鳴尊・布留乃神・伊弉冊尊・瓊々杵尊・大宮比売命。延喜武内、大麻乃豆大神・小野神社兩宮一社、慶長十一年御建立、御普請奉行大久保石見守。正保三年悉焼失、寛文五年嚴有院殿御再建。今猶存。東照神君、神主沢渡（猿渡）左衛門佐、於帝鑑間、御目見御時服二拝領、已来正月六日独礼。八幡宮、八幡宿にあり。旧は八幡村なるべし。六所宮と同じ朱印。川崎平右衛門御代官所是政村枝間屋塚、同常久村、同上染屋村、同車返村、同下染屋村、車返村地先、伊奈助右衛門御代官所上飛田給村、同布田五ヶ宿の内上石原宿、府中本町より一里九丁。同下石原宿、上石原より六丁四十八間。上布田宿の内小島分村、上布田宿、下石原より七丁六間、上下布

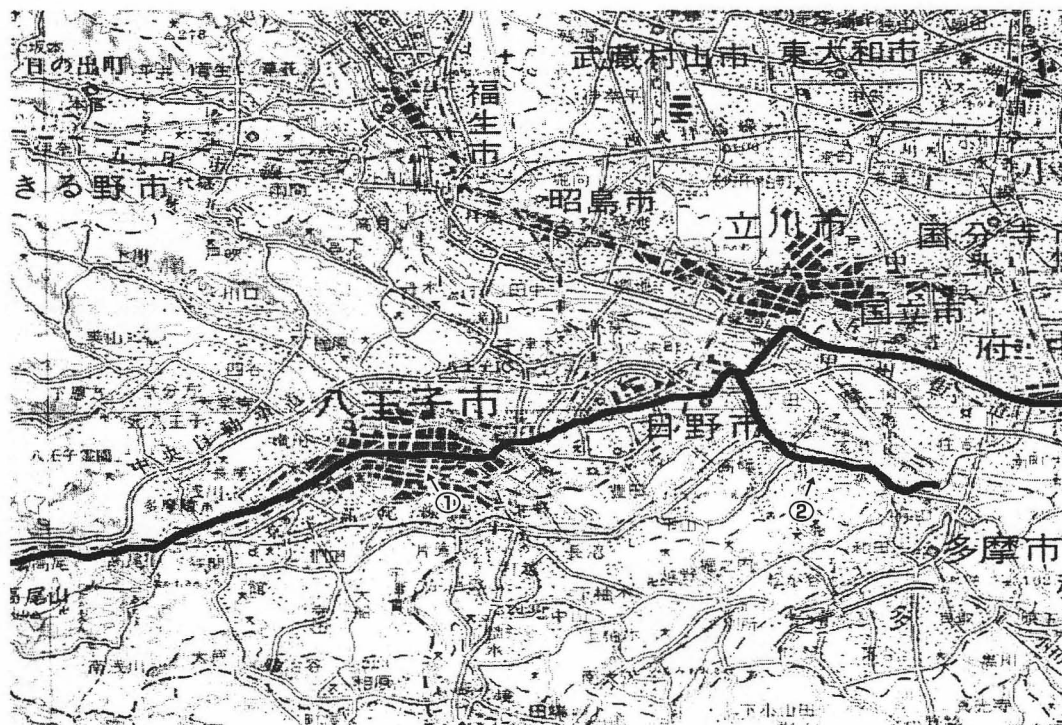


図3 第七次測量、小仏—内藤新宿間の行程（国土地理院20万

田境、先手の初繋ぐ。上布田制札より二丁二尺、下布田制札まで一丁九間、先手測る。合一里二四丁五十四間二尺。布田五ヶ宿は駅を一宿六日宛相勤、所謂五ヶ宿は上石原宿・下石原宿・上布田宿・下布田宿・国領宿、此一宿は先手測る。先手坂部・下河辺・梁田・上田・長蔵。多摩郡布田五宿の内、伊奈御代官所、五ヶ宿共地方にては村、上下布田境より初、制札一丁九間。国領宿制札迄、測初より四丁二十四間。下布田宿飛地、国領宿、近隣云下国領、左佐橋左源太知行・右伊奈助右衛門御代官所柴崎・金子村。それより柴崎村字間橋、左右金子村、右側深大寺村地先、街道四十八間三尺、人家一軒出。左側五十五間三尺、御朱印十三石四斗曹洞宗深谷山金竜寺境内、右石谷主水知行・左伊奈助右衛門支配所入間村・金子村、左伊奈御代官所中仙川村字滝沢、左右入間村字滝坂、左飯高弥五兵衛知行所下仙川村、右石谷主水知行所入間村、右伊奈御代官北野村飛地、左右下仙川村、品川追分あり、四里ほど。天台宗大慈山昌翁寺御朱印十四石。右伊奈御代官所・三浦久五郎・五郎三郎知行所給田村、左下仙川村、左右給田村、伊奈御代官所鳥山村、同上高井土宿制札迄、国領より一里十八丁十八間。中食武蔵屋伊兵衛・後手は名主三左衛門。増上寺御仏殿領、北沢村、伊奈助右衛門御代官所下高井土宿。上高井土より十三丁三十三間、合二里一丁二十四間迄測る。本陣玉屋吉右衛門、坂（坂部）宿角屋伊左衛門、三人宿名主五右衛門、両手共九ツ前着。此夜曇。

五月八日 朝曇、四ツ後より晴、又曇。六ツ後下高井土宿出立。一同一手測、多摩郡下高井土駅より初。右荏原郡大貫治右衛門支配所赤堤村・松原村入会、左多摩郡内田主計知行所和泉村、松原村字代田橋、右大貫支配代田村、左豊嶋郡大貫支配和田村、左右神谷縫殿之助知行所幡ヶ谷村字笹塚、右大貫支配代々木村、寺社領多し、略す。左大貫支配角管村、左右同じ。右千駄ヶ谷村、同戸田越中守屋敷、左水

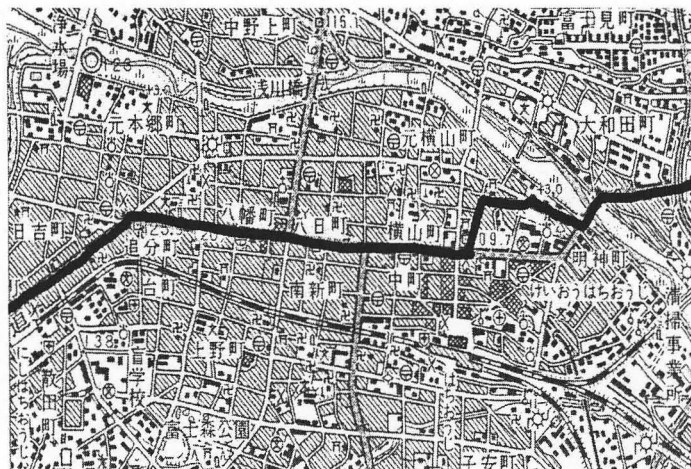


図4 図3の①部、八王子宿内の行程

(国土地理院5万分の1地形図「八王子」平成12年発行に加筆)

知行所幡ヶ谷村字笹塚、右大貫支配代々木村、寺社領多し、略す。左大貫支配角筈村、左右同じ。右千駄ヶ谷村、同戸田越中守屋敷、左水谷弥之助稲垣長門守屋敷、左渡辺平十郎屋敷、左右川崎御代官所、内藤新宿初より制札迄一里三十二丁二十七間、上町字追分(梅)印より青梅街道榜示杭に繋ぐ、一丁七間。(梅)印より左牧野越中守屋敷、中町

駅場三丁二十七間下町、左大
宗寺門前町、
右内藤大和守
裏門、江戸よ
り内藤新宿入
口傍示杭に繋
ぐ、五丁三十
五間。左田安
殿下屋敷、四
ッ谷大木戸迄
測る、一丁四
十七間五尺、
合二里七丁十
七間五尺。四
ッ頃内藤新宿
着。宿涼野屋
長七。伊能七

左衛門・同平右衛門道喜・加納屋治兵衛・妙薫・お琴・伊能治三郎、
当所迄迎に出る。伊能鉄之助も中途迄出る。

三 大山路・厚木道の測量

大山路・厚木道の測量は、伊豆七島と富士山麓の測量の帰路、文化一三年三月一日に、東海道の平塚宿から厚木村、糟屋村(粕屋村)、下荻野村、田名村と測進し、三月一五日に橋本村に着。翌日、ここから往路とは別の道を厚木村まで再測する。すなわち上溝村、当麻村、上依知村、関口村を経て三月一七日に厚木村へ再着。厚木村からは、大山路を鞘間村、荏田村、二子村を経て下渋谷村道玄坂入口の測量印(文化て一年二月五目印置)に繋ぎ、富益橋で打止めにする。止宿は、中渋谷村の名主惣右衛門・平右衛門宅。

一夜明けた三月二二日に中渋谷村を出立し、無測量で下鞘間まで往路を引き返し、ここから滝山道・八王子道を木曾村、小山村、八王子宿と測進し、文化八年五月五日に残した甲州街道筋の制札に繋ぐ。この後、扇町屋宿、高沢町、川越城下、中山道の熊谷宿へと測進し、文化一一年に残しておいた測量印に繋ぐ。

これによって第四次測量時に越後国寺泊から三国峠、高崎、熊谷と測量、第三次測量に直江津から善光寺、高崎、熊谷と測量した街道と合わせて、本州の関東・中部内陸部の「横切り測量」が完了した。

○第九次伊豆七島・伊豆半島東海岸・下田街道・富士

山麓、厚木・大山・八王子道測量

・期間

文化一二年(一八一五)四月二七日江戸出立

文化一三年(一八一六)四月一二日江戸帰着

・測量隊員

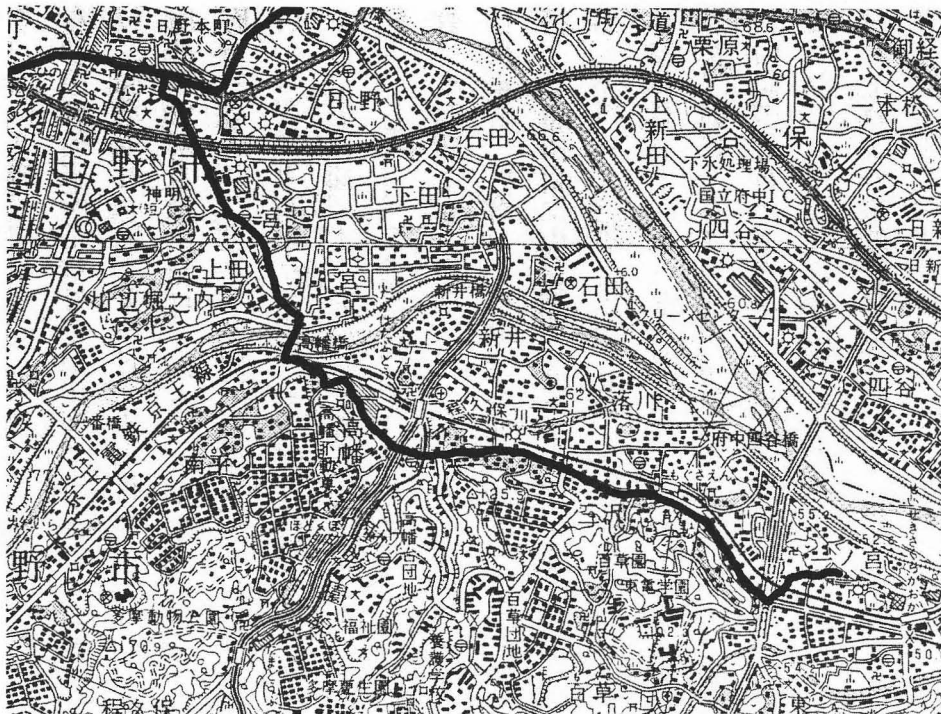


図5 図3の②部、日野—ノ宮の行程

(国土地理院5万分の1地形図「青梅」平成9年発行「八王子」平成12年発行に加筆)

注：66, 67 頁に

図6, 図7あり



『多摩のあゆみ』第128号

発行 財団法人たましん地域文化財団

編集 たましん歴史・美術館歴

史資料室 ☎042-574-1360

季刊：2, 5, 8, 11 月の15日発行

たましんの窓口等で無料配布。

(さくま たつお・元伊能忠敬記念館館長 千葉県香取市在住)

(この後厚水道測量省略)

(次号につづく)

田村(現横浜市) 出立。次に鶴間村から扇町屋宿までの測量日記を記す
文化一三年三月一日 平塚宿出立。文化一三年三月二三日 長津

・伊能忠敬測量日記(佐久間達夫校訂)

三月十一日 晴天、大任郡江川太郎左衛門支配所平塚宿出立、字東中町止宿前ヨリ初メ。

永井甚左衛門(隊長息敬、老齢のため不参加)
門谷清次郎(天文方手付下役)
坂部八百次(天文方手付下役)
内弟子 箱田良助 保水敬蔵
竿取 多田要吉
長持 田中吉兵衛
從者 四人

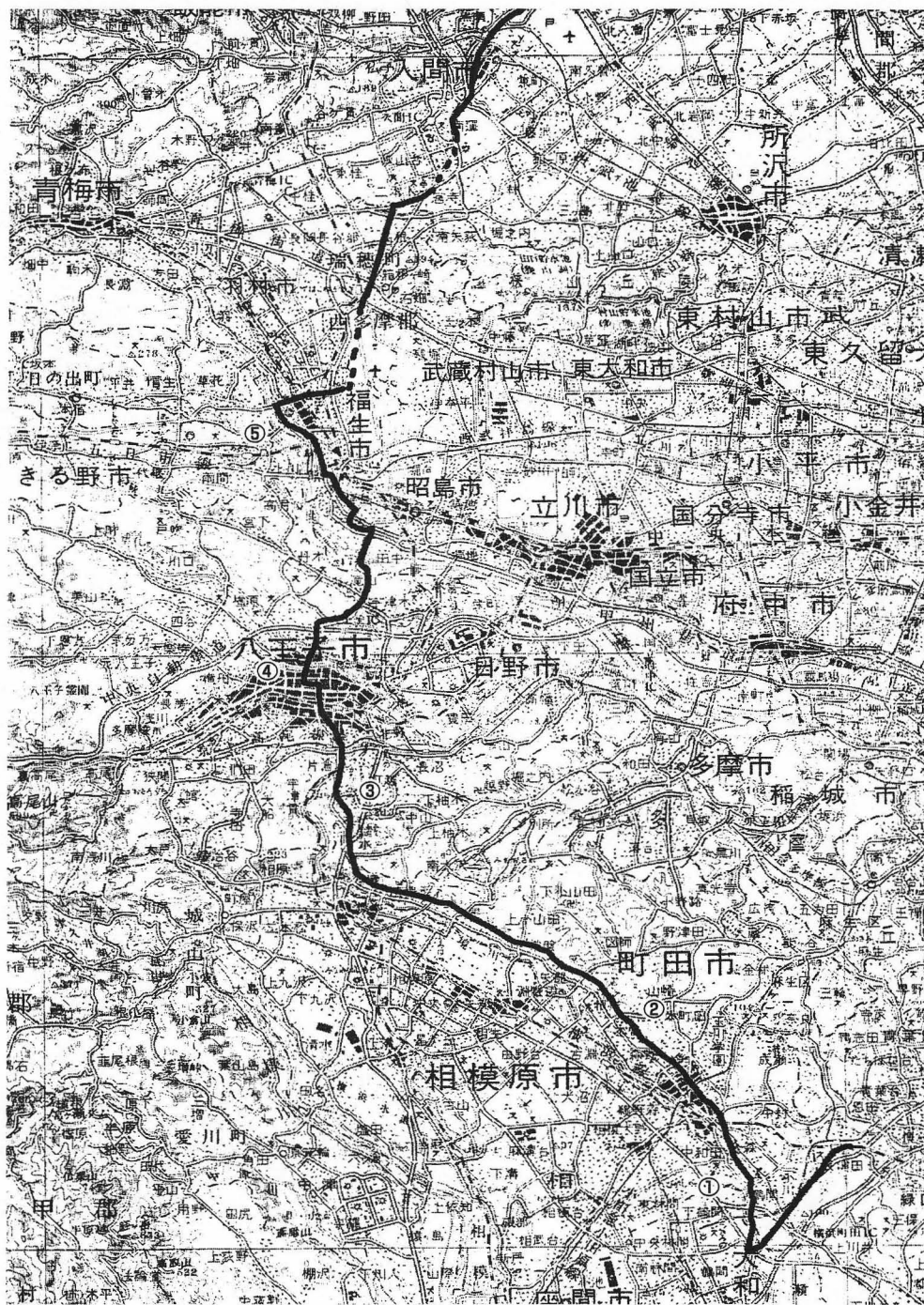
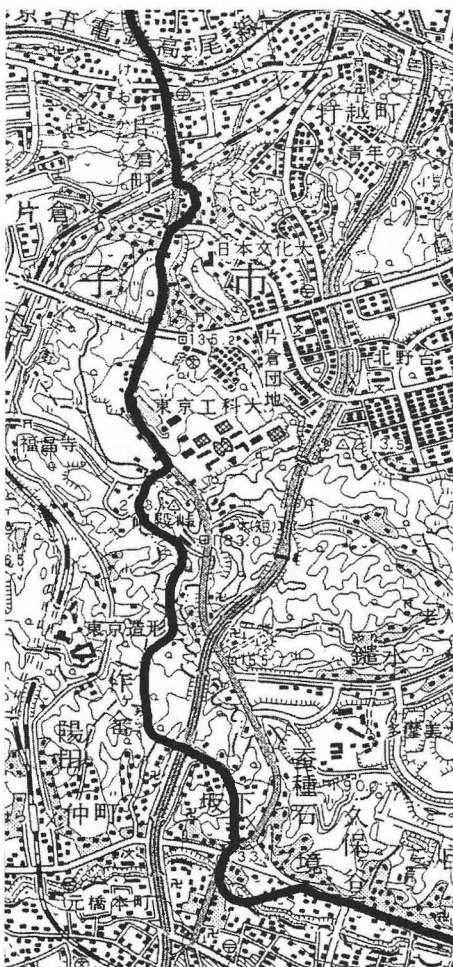


図6 第九次測量、長津田村一扇町屋宿の行程

(国土地理院20万分の1地勢図「東京」平成10年発行に加筆) 丸数字部分詳細図あり



- 図7 (右上) 図6の①部、下鶴間・町田付近
 (国土地理院5万分の1地形図「八王子」平成12年発行「藤沢」平成4年発行に加筆)
- 図8 (左上) 図6の②部、町田市木曽付近
 (国土地理院5万分の1地形図「八王子」平成12年発行に加筆)
- 図9 (左下) 図6の③部、御殿峠付近
 (国土地理院5万分の1地形図「八王子」平成12年発行に加筆)

九州支部だより

‘08 九州支部春季例会報告

石川 清 一

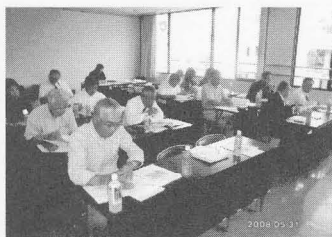
去る五月三十一日（土）例年と同じ、福岡市立南市民センターに於て初参加二人を加え総勢一六名の出席を得て開催した。初参加の伊万里市からおいでの方地滋氏は昨年は直前に思わぬアクシデントでやむなく欠席、今回は無事出席出来ました。もうお一方、奥永渚さんは忠敬三女・琴女のご子孫（六世孫に当たる）で二〇代とまだお若く、思うに全国最年少の会員ではないでしょうか。今回、ご両親と一緒においでになりました。

例会は来賓に国土地理院九州地方測量部根本恵造次長を迎え、定刻一時開始。私より当研究会の近況や、来年が伊能忠敬の九州測量二〇〇周年に当たるので、来年又は再来年に記念行事（例会兼講演会のようなもの）を今後検討したいことなどを報告した。星塾代表理事からの「九州の活動は大変貴重だ、引き続きの活動を期待する」との励ましのメッセージを披露し、早速講演の部に入った。今回は外部からお二方、会員からお三方による計五つの講演となり、終了時間ギリギリまで各講師の熱演が続いた。少し盛りだくさんで疲れたのではと心配したが、皆さんお元気でした。例会終了後日本料理店に移り懇親会を行った。談論大いに盛り上がり終始賑やかにすゝみ八時近くお開きになり、今年も忠敬先生のお引き合わせに感謝しつつ、帰路につきました。皆様長い一日おつかれさまでした。

なお、講演の概略は別記の通りです。



参加者 （後列）原口 国重 奥永 奥永 馬場 遠藤 山下 井上 野田
（前列）河島 宮地 奥永 石川 中富 松尾（紀） 熊谷



国土地理院九州地方
測量部長 菱山剛秀氏

■講演(1)「明治時代の伊能図の活用について」

菱山剛秀氏(国土地理院九州地方測量部長)

・演者は公務多忙の中、夕刻東京行き前の貴重な時間を講演頂いた。
・明治初期近代国家建設にあたって、全国を実際に測量し、統一した方法、表現で作成し、その内容に信頼があった伊能図の存在は大変貴重である。国の骨格を示す基本図として明治以降も国の事業として引き継がれ、現在も更新され続けており、その果たした役割は非常に大きいことを種々の角度から論述された。

■講演(2)「伊能が見た薩摩城下町」

福田光一氏(全国測量設計業協会連合会九州地区協議会会長)

・演者は鹿児島県測量設計業協会会長でもあり業界関係の役職を多数され大変多忙な方で、この週末東京での会議からわざわざ福岡に寄って頂いた。実業人として活動のかたわら測量の先達、伊能忠敬に関心を持ち、立派な資料、冊子も作成され忠敬への熱き思いがひしひしと伝わりました。

・日曜夜のNHK大河ドラマ「篤姫」で評判の「鹿児島」城下での伊能測量や「桜島」の伊能測量時と、(大噴火前で陸続きではなかった)現代との人口比較など興味深かった。

■講演(3)「麻田学派と天文学について」

河島悦子氏(歴史街道を歩く会)代表

・演者は若い時から歴史古道へ関心を持ち、長年九州の各街道を踏破され、特に伊能測量と重なる長崎街道、唐津街道については著作を出し、上記街道研究には欠かせない一冊となっている。今回講演にあたり、剛立の出身地大分県(豊後)杵築まで再度確かめに出向いたとのことで、郷土の偉人と云うべき麻田剛立を地元で知っている人が少なく、顕彰事業もありないらしく意外だったようです。

・剛立は高橋至時先生が天文学を学び、忠敬先生も孫弟子にあたる、師といふべき人であるが表面にできることは少なかったか。麻田暦、土御門家の暦、渋川春海の貞享暦にも少しふれられたが、暦は難解です。

・暦のことでは小生ふと明治改暦事件を思い出した。明治五年十二月二日、それまでの太陰暦を廃止し西洋と同じ太陽暦に変え、十二月三日が明治六年一月一日になり当時十二月が一月月弱なくなり社会に大混乱を引き起こした故事を。(現代ならどうなるでしょうか。)

■講演(4)「維新をつないだ道と筑前福岡藩の事情」

遠藤薫氏(図書出版のぶ工房編集者)

・演者は伊能忠敬関係出版で注目されている福岡市内の若手編集者。
・幕末の雄藩・薩長土肥は本当は薩長土肥筑前(福岡)の五藩だった(なるはずだった)との説。すなわち筑前福岡藩には明治維新前後に京を追放され都落ちした三条実美など公家(いわゆる「七卿落ち」)(文久三年)、「五卿落ち」(慶応元年)や高杉晋作、西郷隆盛など志士達が当時福岡藩内に入り太宰府往還を経て大宰府に滞在しました。また藩内で高杉、月形洗蔵ら多くの勤王の志士を支援した野村望東尼(のむらぼうとうに)など傑物もいたが、惜しむらくは福岡藩十一代藩主黒田長溥(くろだながひろ)薩摩藩主島津重豪の第九子、黒田家に養子入りの「乙丑の獄(いつちゅうのく)」により勤王派の家老はじめ主要人物が一掃されたため維新に乗り遅れる結果となった。

■講演(5)「伊能忠敬が歩いた肥前路」

馬場良平氏(塚崎・唐津往還を歩く会)事務局長

・演者は銀行勤務のかたわら佐賀の歴史道をコツコツと研究を行っており伊能忠敬も測量で通った佐賀県内の歴史道を毎週歩く度に、現在の地図と見劣りしないその伊能測量技術の高さにびっくりするのとことです。
(いしかわ せいいち・九州支部長)

お知らせ

例会案内——隔月の例会をはじめます

■このたび二カ月に一度の例会を九月から実施することになりました。会員が講師となり、それぞれのテーマで講演をおこないます。運営担当は新沢義博さん。講演後には質疑応答をかねた懇親会で交流をはかりながら、さらに知識を深めます。地図を間近に見ながら講師の解説を聞いたり、日頃疑問に思っていた事柄について講師に親しく質問できる機会です。ぜひご参加ください。会場は江戸深川資料館、清澄庭園、芭蕉記念館、靈巖寺にもそれほど遠くない場所。早めに着して秋空の下、史跡巡りを楽しむのはいかがでしょうか。

■第一回例会（九月例会）

○日時 九月一四日（日）一三時～一七時

○会場 江東区森下文化センター 和室（下欄案内図参照）

○講演（一三時～一六時）

・「話題になつたいくつかの犬図写本——海洋情報部所蔵図ほか」

講師・鈴木純子さん

・「伊能忠敬と箱田良助／菅茶山との交流」

・質疑応答・懇親会（一六時～一七時）

○参加費 一〇〇〇円（講師謝礼を含む）当日会場

○申込 不要 直接会場へお越しください。

○問合せ先 担当・新沢義博さん（☎090・5765・8152）

■第二回例会（十一月例会）

○日時 十一月九日（日）一三時～一七時

○会場 江東区森下文化センター 和室（下図参照）

○内容 講師の方は現在交渉中です。

森下文化センター案内図



所在地 〒135-0004 東京都江東区森下3-12-17

電話 03・5600・8666 FAX 03・5600・8677

交通 森下文化センター <http://www.kcf.or.jp>

電車 都営地下鉄新宿線・大江戸線「森下」駅A6出口より徒歩8分

都営大江戸線・東京メトロ半蔵門線「清澄白河」駅A2出口より徒歩8分

バス ①都バス門33系統「亀戸駅」——「豊海水産埠頭」「高橋」下車徒歩3分

②都バス業10系統「業平橋駅」——「新橋駅」、東20系統「錦糸町」——「東京駅北口」「森下5丁目」下車徒歩3分



お便りから

■石谷春香さん 川崎市

こんにちは春香です。暑いですね。私の家ではクーラーが壊れてしまったので家の中にと死んでしまいそうです。それから夏休みの宿題も多くて死んでしまいそうです。来週はバスケの合宿に行ってきます。原稿はいつもありがとうございます。今回もたくさん載せていただけてとてもうれしいです。

■伊藤栄子さん 東京都・練馬区

この春、足の怪我をいたしましたして、未だにやとと近くを歩いている有様です。

■入江正利さん 長崎市

体調のよい時に對馬藩の『測量御用記録』を読み直しています。

■梅田和雄さん 神戸市

六月二六日は朝日新聞の記事と第五二号内、佐久間先生の新史料『石井記録』紹介を大変うれしく読ませていただきました。まだまだ新しい事実が判明している事がうれしく思いました。

■大宮信篤さん 松山市

秋の研修旅行で当地へお越しの事。お待ちしております。

■劇団俳優座・古賀伸雄さん 港区

相変わらずこつこつ頑張っています。

■加藤巷児さん 狭山市

小島一仁氏が亡くなられたこと会報五二号で

知りました。私が伊能忠敬について最初の勉強も氏の著書のおかげです。謹んでご冥福をお祈りいたします。合掌。

■久保木恒雄さん 柏市

我壮健也。会報は熟読しています。

■高瀬芳夫さん 千葉県香取郡東庄町

いつも機関誌を心待ちにしております。七月十一・十三日は佐原大祭です。夜、小野川へ映る祭りの風情は格別のものがあります。

■直江泰子さん 筑西市

会報有難うございました。先日、友人達が佐原へ出かけ記念館でもとても御親切に説明して頂き、又、充実ぶりに感激して居りました。石谷さんのレポート素晴らしい、友達に訪れる参考に見せたいと思います。

■野田茂生さん 大野城市

三月に体調を崩し、なかなか元の状態にまで戻りません。

■花田敏行さん 登別市

いつも会報を楽しみ読ませていただいております。室蘭の本輪西に「伊能橋」という橋があります。退職後に室蘭と伊能忠敬の関係を調べてみたいと考えております。

■原口光和さん 大野城市

間宮林蔵の研究文献があれば伊能忠敬との比較も含めておもしろい企画が出来るのかな、と思っております。間宮林蔵の樺太と大陸の研究も素晴らしいものです。

■平川定美さん 佐世保市

二・三年後には伊能忠敬の郷土測量の実態について、まとめて出版したいと思っています。

■福田弘行さん 新座市

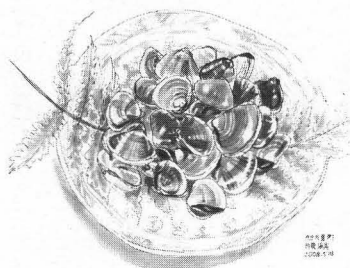
四月から「四国八十八ヶ所の今」を歩きだしました。全部歩けば二二〇〇キロの行程。忠敬さんが訪ねた徳島市内のお寺、高知城下伝右衛門宅絵図、宿泊した室戸の二五番津照寺と三八番寺は健在。松山寺は消えていました。

■藤岡健夫さん 横浜

石谷春香嬢、大変な生徒さんです。先号の紀行文が大変面白かったのですが、今回は忠敬の測量法から自分の足で緯度一度を実測するとは、おどろきです。この先がたのしみです。

■山本公之さん 小平市

静嘉堂文庫に茶碗の美・国宝・曜変天目を思い掛けない誘いで見に行った。展覧会案内を手にとり驚いた。二〇〇九年二月一四日から三月二二日古地図の楽しみとして伊能図などが展示されること。



九十九里町 片貝海岸
2008.5.14 江口俊子さん画



日々の話題

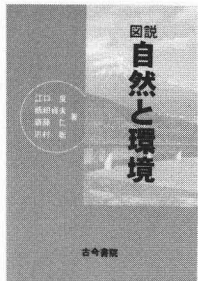
■表彰 渡辺一郎さん（作品賞）鈴木純子さん（功労賞）が日本国際地図学会賞を受賞しました。



作品賞
渡辺 一郎 会員（伊能忠敬研究会 会長）
鈴木 純子 理事（伊能忠敬研究会 センター 幹事）
野々村邦夫氏（文筆賞）



■論説掲載 吉田正人さんの論説「日本は途上国に資金協力を」が六月二五日付朝日新聞「私の視点」欄に掲載されました。



■出版 斎藤仁さんの著書が刊行されました。
『図説 自然と環境』
2008年5月15日
古今書院刊
斎藤仁・江口曼他著



お知らせ

■平成二〇年 伊能忠敬研究会視察旅行

行先 忠敬思い出の地 四国・山陽地方2泊3日
期間 2008年10月19日（日）～21日（火）

行程 第一日目 羽田空港→広島空港→福山

神辺 箱田良助生誕地→大和ミュージアム→
呉市入船山記念館→かんぽの宿竹原（宿泊）

第二日目 竹原→白水港→明石港→小長港
→御手洗→小長港→明石港→木江港→宗方港
→大三島→大山祇神社・向上寺・耕三寺→し

まなみ海道→今治国際ホテル（宿泊）
第三日目 今治国際ホテル→高浜→大浦・中

島港→市民センター→中島港→高浜→道後・
松山市内観光→松山空港→羽田空港

参加費 73000円（振込先 研究会口座）
備考 神辺、御手洗、入船山記念館、大浦、忽那

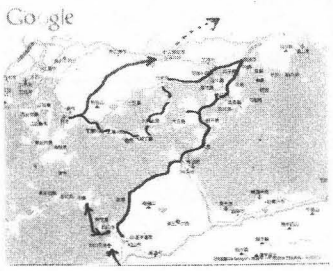
八幡宮参拝と、個人では足の運びにくい見
所が盛り沢山で

す。この機会に
お誘い合わせて

ご参加ください。
申込 9月10日迄

佐原支部・香取
禧良さん宛FAX
にて申し込み。

FAX 0478・
57・36561



伊能忠敬記念館

☎0478・54・1118

◇特別展『伊能図の評価 評価される忠敬』展

期間 9月9日（火）～11月9日（日）

全国を測量して正確な日本地図を作成し近世
から近代への橋渡しをしたこと。明治以降、

修身の教科書に登場した人物。最初の忠敬伝
記といえる墓碑銘。互いにクロスリンクす

る業績と人物像の二つのテーマを紐解きなが
ら伊能忠敬を紹介する。また、当家の貴重な

資料群を守り伝えた伊能家について紹介する。

◇講演会『早稲田大学図書館所蔵伊能図（大図）
について』

講師 早稲田大学図書館職員
日時 10月4日（土）午後2時～

場所 香取市中央公民館
【5頁に特別展の関連記事】

■静嘉堂文庫美術館03・3700・0007
◇『静嘉堂文庫の古典籍 第7回 古地図の楽し
み―江戸の町を歩く―』伊能図 ほかを展示

2009年2月14日（土）～3月22日（日）

■八王子夢美術館☎042・621・6777
「タツノコプロの世界展」9月15日まで

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどこでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行

— 予定 —

発表誌 原則として年四回

第54号 締切 9月 末 発行 11月

第55号 締切 12月 末 発行 2月

②例会・見学会の開催

第56号 締切 3月 末 発行 5月

③忠敬関連イベントの主催または共催

第57号 締切 6月 末 発行 8月

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地（04年8月事務所は新宿区下宮比町から移転）

T153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

電話・FAX 03-3466-6752

事務局メール junko-sz@jcom.home.ne.jp

郵便振替口座 001500610728610

（07年8月よりアドレスが変わりました）

投稿規定 会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2〜8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部にて一任下さい。手書き、CD、メール添付可。（FD要相談）一頁は二段組31字×26行（400字詰用紙4枚分）、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等（返却します）添付可。話題、情報、近況などのお便りもお待ちしております。

伊能忠敬研究会のホームページ

「伊能忠敬研究会」公式ホームページ

<http://inoh-tadtaka.org/>（休止中）

伊能忠敬研究会「資料室」…現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料。（担当・坂本幹事）

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakano/>

「伊能忠敬図書館」…忠敬関係の文献、画像資料。（担当・前田）

<http://www.tl.rim.or.jp/~koko>

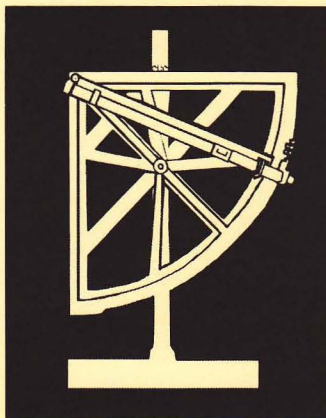
編集後記

◇北京オリンピックの陰で忘れられているが、四川大地震は死者約九万人の大災害だった。実はこの地震を予言していた人物がいる。◇李四光（一八八九—一九七二）は大慶油田を発見するなど中国では大変著名な地質学者だが、「中国は六〇年以内に四回の特大地震が起きる」と予言していたという。その四回とは唐山、台湾、四川、福建。前の三つは的中した。次は福建だ、と中国では話題になっているそうだ。◇それはさておき、この李四光さんは歩測の達人だった。仕事柄よく地質調査に出かけたが、日頃から一步八十五cmの歩幅を保つように訓練を積んだので、歩くだけで露頭の大体の長さや幅を知ることが出来たという。◇この話は「一步八十五厘米的精神」として児童向けの偉人伝に載せられている。「中国の伊能忠敬です」と中国人の知人は言った。◇一方、十九世紀後半に二十七年間にわたり朝鮮半島を踏破、独力で『大東輿地図』という近代地図を作り上げ、「朝鮮の伊能忠敬」といわれる金正浩。この人の話も大変面白いが、また次の機会に。（M）

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.53 2008



TOPICS I

Historic Spots about Inoh Tadataka (3)	Kawasaki Michiyo	1
Report of General Meeting 2008	Editorial Department	2
The Inoh Family's Lacquered Helmet	Editorial Department	5
New Documents about "Funate" of the Domain of Karatu	Editorial Department	6
News Reports about "The Ishii's Memorandum"	Editorial Department	8
Exhibitions of "The Large-Scale Inoh Maps" and "Wasan"	Editorial Department	10

TOPICS II

Reproduction of Inoh's Measurement with Ropes on the Sea	Watanabe Ichiro	11
Place Names and Landscapes in " <i>Inoh Daizu Soran</i> " (7)	Hoshino Yoshihisa	16
A Visit to Asada Goryu's Birthplace	Kawashima Etsuko	26
	Inoh Yoko	28

FROM VISITORS' REGESTERS

ARTICLES

Buildings and Treasures of Todaiji-Temple	Sakuma Tatsuo	30
Big Earthquakes in " <i>The Survey Diary</i> "	Tsujimoto Motohiro	34
Study of Inoh Tadataka (3)	Ishiya Haruka	38
Inoh Tadataka and the Yonezawa Highway(2)	Matsumiya Teruaki	46
Seki Ken as a Calligrapher of Tadataka's Epitaph	Ueda Koichi	52
Inoh's Survey in Tama(1)	Sakuma Tatsuo	59

BRANCH REPORT

Spring Meeting of Kyushu Branch	Ishikawa Seiichi	68
---------------------------------	------------------	----

MEETING ROOM

Informations about Regular Meetings	Editorial Department	70
Letters from Members Daily Topics and Informations	Editorial Department	71

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY